毎月十日廿五日發行

家庭雜誌

壹冊定價金五錢



明治三十年九月十五日發兌

第百八號

重要目録

奇應丸

●主治効能●

御小兒衆の虫のやまい〇五かんきやうふう〇胸いたみ〇はら下り〇しやくつかへ〇船車のよい〇酒の二日よい〇はしか〇ほうそ〇産前産後はよろしからず

◎効驗の顯著にして若かも賣價の低廉なるは普く諸君の知らるゝ所願くは御試用の上倍々御高評を賜らん事を伏して願上候

◎全國有名の賣藥店に差出し有之候間御最寄にて御求め被下度候

東京市日本橋區通一丁目

白木屋

大村彦太郎謹製

●電話本局四百七十五番

●和漢諸體**文章速成術**

●新奇發明**習字速成術**

●新奇發明最良新式**速算術**

此三書は各專門學士の發明に係る今古未發の新術にして十歳以上の者は男女を不問十日間學修せば普通の文章家書家速算家となるは受合ひ從來心掛けある人は熟練上達天下に鳴るの士とならん右一冊に附郵稅共廿四錢三冊一時に注文の方へは郵稅共六十五錢にて差上候●爲換大坂局宛切手一割増

日本一手發賣 大坂北區老松町二重門西入南側

石川慈善堂

伯爵松方正義君題字

女子教育演說

西洋綴一冊 正價金拾錢 郵稅金貳錢

伯爵 大隈重信君演說
伯爵 土方久元君演說
公爵 近衛篤麿君演說
伯爵 板垣退助君演說
男爵 山川信道君演說
男爵 北畠治房君演說
從三位 內海忠勝君演說
從六位 廣瀨宰平君演說
成瀨仁藏君演說

本書は女子教育に就て以上の諸名家の高論卓説を筆記したる書にして教育家及子女の父兄たるもの丶一讀せざるべからざるの最良書なり

東京市日本橋區通一丁目
大阪市心齋橋筋博勞町

青木嵩山堂

華族女學校學監下田歌子先生編述

●家庭文庫新刊廣告●

家庭文庫

全部六冊和裝

隔月壹回發行

正價 ●壹冊金三拾五錢●參冊前金壹圓●六冊前金壹圓九拾錢●郵税壹冊六錢づゝ●御注文は必前金の事●郵券代用一割增

方今女學に關するの書、その數少なからずと雖ども、能く新舊の情理を折衷して、家庭教育の上に適合するもの、甚た些少なるを遺憾とす。茲にこの**家庭文庫**を出版せり。本書は華族女學校學監として、學東西を究め、遠く歐米を巡遊して、一種超凡の新智識と新卓見とを以て、今現に子弟教養の道に從事せらるゝ、下田歌子先生の編述に成るものなれば、他の空論座談の書と異り、上下を通じて、一般社會の家庭上に適用するを得べきは勿論なり、全部六冊、皆是れ編者が多年の實驗上より出でたるものなれば、如何に在來の家庭書類と其趣を異にせるか、江湖諸君、請ふ一本を繙ひて以て驗せよ。

●家庭文庫全部目次●

平田久著

十九世紀外交史

印刷中

多くの肖像を挿入す總て鮮麗也

外交なるものが國家の存亡に關する最重最大の問題となりたるは、十九世紀にあり。運輸交通の方法充分に發達して、兩極も猶ほ隣家の如く、陸海軍備の組織漸次に完成して平和も猶ほ休戰の如くなりたる十九世紀にあり。本書の論述する所は題號の示す如く、國家の存亡に關する最重最大問題としての十九世紀外交の精神、方法及び變遷にあり。即ち筆を千八百十四年の排ナポレオン同盟に起し、上篇『前半の均勢』に於て、維納會議の歐洲再造　神聖同盟の反動政策、希臘獨立の變態、東歐西歐の對峙、三國同盟の成立を論述し、中篇『過渡の時代』に於て、クリミア戰爭、伊太利統一、普墺戰爭、普佛戰爭、露土戰爭の千變萬化を叙述し、下篇『後半の均勢』に於て、三國同盟及び二國同盟を詳論したり。

大勢を叙することと掌紋を指すか如きなり、而して間々當時の人物を論して痛快を極む。四五百頁の冊子中に十九世紀外交の詳細を悉くさんことは成し得べきにあらず、されば本書は專ら外交的關係のみを記述し論詳するに止めたり。或はこれを以て本書の短を誹るものあらばあれ、これ實に本書獨有の長所也。材料に至りては、直接當時の局に當りたる外交家の遺著に據るもの多し。

發行所　東京日吉町　民友社

大改良當九月一日より

國民新聞

每號八ページ（臨時增加）

言責を重んじ正確を主とし事若も報せず又若も論せず言ふ所必ず責あり報ずる所必ず實あり。

內に於ては公明あり外に對しては禮節あり品位高尚意思堅確優に海外に向つて日本を代表するに足るを期す。

改良初日より『東京だより』『週遊漫錄』等讀者の愛讀を値する記事多し。

小說は蘆花生の飜案小說愈々出で、愈よ誦すべし。

定價	地方郵稅
一枚	二錢	五厘
一ヶ月	四十錢	十三錢
三ヶ月	一圓十五錢	三十九錢
六ヶ月	二圓廿五錢	七十八錢
一ヶ年	四圓四十錢	一圓五十六錢

廣告料

一行の代價左の如し（但五號活字廿二字詰）

一回	十五錢
二回以上	十四錢
五回以上	十二錢

發行所　東京日吉町　國民新聞社

（前付の六）

發刊數日にして再梓せり

新刊!!!

名家紀行文選

定價卅錢　郵税四錢

讀賣評　或は物故したる或は現存する明治漢文家の紀行に關する什名妙編を假名交り文に書き直したるものなり諸名家の作を蒐集したるものなれば其文章の趣味も一々異りて流麗なるあり勁拔なるあり雄大なるあり淸楚なるあり初めは假名交り文に直したるものなれば名玉に瑕付くるの恐れなきかを疑ひしも讀むに難澁なき丈け却て德川さ覺えたり亙時誦讀するには至極の者たり

朝日評　拙堂、一齋、鵞梁、艮齋の紀行文八十三篇を輯めて一册となす忽ちにして高山大澤忽ちにして長林曠野或は花の爛熳たるあり或は月の淸朗たるあり讀來て巻の終るを覺えず

發行所　東京市京橋區日吉町　民友社

四版 金貨本位はやわかり

定價十錢　郵税二錢

金貨本位の論の始まると、まづ先きに出版した斯の書、今は第四版を出さねばならぬ場合となり、發行部數も、無論、萬の聲で、かぞへられる。需要は矢張絶へない。なぜたへない？蓋し金貨本位の施行も來る十月と迫り、貨幣にかゝつた研究は色々出て來る、そこへ持て行くと、斯の書は、平易で、面白くて、その名に背かないから!!

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

家庭雜誌

定價表

當號ゟ改正

一册	……	(前金)拾錢	(市外郵税共)十一錢五厘
六册	……	五拾七錢	六拾六錢
十二册	……	壹圓八錢	壹圓廿六錢

十二册以上一册九錢の割市外は別に要郵税

廣告料　一行（五號活字廿四字詰）一行八錢

家庭雜誌九月以後毎月一回十五日發兌

本社電話番號本局七十番

發行兼印刷人　吉崎園吉　編輯人　金子佐平

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　家庭雜誌社

明治三十九年十月五日發行
家庭雜誌第百八號

目錄



小川一眞製

將來の議伯



小川一眞製

跡見花蹊女史筆

家庭雜誌第百八號

（明治三十年九月十五日發兌）

社説

行儀作法

支那にては禮義三千、威儀三百などゝ言ひ、社交の式目頗る繁雜を極め、殆ど虚禮に失するの傾向を生じたれども、凡ての組織に腐敗せる今日の支那が辛ふじて社會の秩序と個人の道德を維持する所以のものは、主として周代以來連綿たりし禮節尙社會の各部に存在して世道人心の上に制裁を加ふるに歸せずんばあるべからず、我國にても古より上下長幼互に亂れざるの禮節ありき、足利氏に其基礎固く、伊勢、小笠原、斯波、今川、細川、曾我、武田等の流派さへ起りて、人々が世に處する行儀作法大に整ひたるが、戰國時代には殺伐の事のみに人の心恐しく此事は一時廢頽の傾を來せしも、德川氏三代の頃より再び興り、十二三代將軍の治世には、最も全盛を極め、其極虚飾の弊に陷り、却つて僞善虚榮の標的となれり、去りながら眞に禮節を確守する家庭には士農工商各々其道により、一家の禮節整然として寔に一絲亂れざるものありて、品行の根本、道德の標準として永く人心の温和を致し、社會の秩序を維持し、且つ我國風俗の醇美、優に世界に誇るべきものありき。

維新の革命は凡ての組織を破壞し去り、禮節の美風をも此大波瀾に掃蕩し去られ、文明の進步と反比例の速度を以て墮落し、今や我國の行儀作法なるものは地を拂つて誠に見る影もなくなれり、外に在りては朋友親戚知不知人の間、家に在りて家族の間に文明なる國民としての禮節を有するかを見るに眞に慨嘆に堪えざるもの多し、其實例を擧ぐれば雜沓を極むる停車場の如

きにありては、傍人は老人及幼者を助くる義務を有すべきに、却つて老人を排除し幼者を蹂躙して、顧る處なく唯我あるを知つて他あるを知らず、誠に文明的國民の擧動として苦々しき事共なり、又女子を見れば其纖弱を憫むべきが當然なるべきに、却つて婦人の一人旅を見て侮辱するが如き擧動あるは、到底文明的國民の態度となすべからず、又家庭に在りては、子が親に對する、妻が夫に對する、弟が兄に對する其他凡て家族間の禮節支離滅裂して、謙讓と敬愛の美德悉く廢頽し、諸事無遠慮、不謹愼にして動もすれば長上を凌駕し、姉兄を無視し、老幼の序を顛倒し、其狀眞に見るに忍ぶべからざるものあり。即ち有躰に今日の現狀を言へば弱肉强食とも謂ふべき、誠に無殘千萬なる世の中にして、やがては禮節なきの國民となり了らんとす。

而して我國一般の社會人心の趣く處、貪る事を知りて讓る處を知らず、凌ぐ事を知りて愼む處を知らず、動くを知りて靜なるを知らざるは、國民の品格に禮節なきを證するものぞかし、國民に品格なきは、一家族の間に禮節の制裁なきに歸因すべし、一家仁なれば一國仁に興り、一家讓なれば一國讓に興り、一人貪戾なれば一國亂を作すの教訓、吾人は今更の如く新なるを覺ゆるなり。

いづくの國家にても禮節なき人民は最下級にあり、又世界の内にて節禮なき國民は下等の階級即ち野蠻國の名を負はざるべからず、斯の如く節禮なき人民は個人としては下等社會に居り、國民としては世界に對して面目なき境遇におらねばならぬなり、禮節の要最も茲に存す。

禮節とて左程面倒なるものにもあらず、繁文褥禮は却つて處世の澁滯を來すものなれども、何人も容易に行はれ易き行儀作法、即ち父子、夫婦、兄弟、朋友の間

に禮節あり、以て家と國との秩序を整ふ、孔子は禮の要は和を以て貴しとなすと言へど、和合でさへあれば今日の如き家族間の亂暴狼藉にせよとの意にあらず、和は素より一家怡樂と繁昌の源泉なれども、如何に家族相互の情親厚なればとて、無遠慮に不謹愼に情の趣くまゝに放任せば、斯に相互の感情を害し、一家の秩序を濫るに至るべし、故に禮節を以て情の七分を制する心懸あり、遠慮すべきは遠慮し、謹愼すべきは謹愼せば、人としての品格、國民としての體面を保つこと難きにあらざるべし。

殊に我國の美德として涵養すべき禮節は、長者を尊敬し幼者を憫愛する事なり、古昔羅馬が繁昌の基を發きしは、一般人民に老者を尊敬するの習慣ありしに因る、眞の禮節は決して虚飾にあらず、吾人は繁文縟禮の無益を厭ふものなるも、文明國人民として世界に面目を有する丈の禮節は、最も其必要を感す、昔は漢の高祖、臣屬の勇にして禮なく、暴慢事をあやまつを見て、叔孫通をして禮を制せしむ、適當なる禮節は人と國の上に大なる效力を有するもの也。

人間の骨數

生理學の教師「人間の骨の數は二百八枚
娘の生徒「それでは先生、私は二百九枚ありますわ
教師「なぜです
娘の生徒「でも私は昨日魚の骨を一本嚥み込みました

史　談

ウィクトリヤ女皇の幼年時代

ウィクトリヤ女皇は一千八百十九年五月廿四日を以て倫敦府のケンシントン宮に生れぬ、祖父なる國王ジョルジ第三世は十五人の兒女の父にして女皇の父なるケント公は國王の第四の皇子なり、當時英國の形勢は盛運隆々たるにあらず國王はいと老いたるが上に眼の疾

に罹り氣さえ亂れ太子攝政たりと雖も施政の法宜しきを得ざる爲め收斂多くなり一般の生活は愈々困難なる勢を呈せりされどケント公は皇女に命名すべき日來るやかゝる悲運に計らず宏麗なる典をケンシントン宮の大廣間に擧げ僧正大僧正等其式に參しアレキサンダー、ウイクトリヤと命名しぬ。

皇女八たひ月を閲するや其父ケント公逝き借財のみ多く殘りたれば母なる公夫人は心安くは覺えざらんも斯くてあるべきにあらざれば貴族の兒女たる己れの子に善美なる敎育を施す可きを思ひ定め皇女及ひ其庶姉なるフエオドラとを相手にケンシントン宮に起居せり皇女は日を追ふて生長し庭園など走せまはる樣になりし頃には小さき噴壺にて花に水を注ひて樂み或は叔父なるヨーク公より與えられし驢車に乘りて遊ふを常とし亦た其驢を愛し之に乘るを好みたり故に靑のリボンにて飾られしは善かりしが一度乘りて走り始むるや他人が驢の爲めに疲れと餓を訴へくれる迄は平常にて走せ續けらるゝには驢も困まりしならん亦た斯く庭園にて遊ひつゝある時には逢ふ人每に語り側近く仕ふる人々に對しては小さき手を接吻せらるゝを喜べり。

此の若き皇女の服裝は質素にして白きキヤムブリックを着け戸外にては白きヘリースを着くるを常とし夏は麥藁の女帽を被り冬には白き海狸帽の一種を用ゐたり。

其の養育料及ひ其他の費用に關しては最初四年間はプリンス、レオポルドの支給する處なりしが此の人は其の姪に對するや父の如き能度を以て能く生活を爲したり其後他の叔父即ち國王ジヨルジ四世は皇女の扶持の料は之を國家に仰ぐべきなりと思ひ國會に向つて其養育料及ひ其他の諸費を請求し每年六千パウンドを支給せんと許諾せられたり亦たヨーク公も甚だ小姪を愛して其成育の爲めに心を用ゐたり。

皇女第五歳の時牧師ジヨルヂダーウエス其の教師に定められぬ而して「彼女は敏捷にして利發然かも温順の性未た圓滿なりとにはあらぬも年齒相應に備はりてわりしとは皇女に就て見たる處誰れか五歳の女兒に對して之に越したる豫望を爲さんやまた公夫人は其母

英國女皇の一生



なる人より「倘齢若き皇女に物覺えさせんとていれたくは苦むる勿れ」との注意を受たれど規律正しく教育を

爲したり。

皇女は母なる人も亦た女敎師となりし人も獨逸の生れにてありし爲めに獨逸の語に苦もなく習ひ宗敎上の敎育は熱心誠實なるタャウェス牧師に受け習字數學を習字敎師より敎へられ其の外佛蘭西語、伊太利語、希臘語、音樂及び圖畫を習ひ然かも之を倦む事なく勉めたりき。

亦た善良にして且つ賢明なる君主たるには男兒的の敎育あるを要し亦た貴婦人的の藝能あるを要するとして是等に必要なる敎育をも授けられしが將來登るべき高き位に付ては深く秘して十一歳に至る迄は告げられずして過ぎぬ然れど嘗て皇女九歳の時サー、ウォター、スコット、公夫人の饗筵に列せしときフリンス、レオポールド及び皇女も連なり居りしがスコットは其の日の日記に記して「皇女ウィクトリヤ——既に未來の女皇たるべき態度を具へて居る」と云へるより見れば此の如き小貴女にして其敎育に氣を着け亦た腰元などが未來の女皇たる事を知らせぬ事を取締りたりとて女皇は既に其事を覺り居りしならんか。

皇女を敎育するに際し敎師は他の市民の如く金錢の事には淸廉にして然かも綿密なる性を養ふを勉めたりとはマルチノー孃の云ふ處然り實に皇女は貧家の兒女よりも寧ろ適當に經濟上の事務を修練せしめられたり故に父なるケント公の負債あるを知るや其の私費を節して貯蓄を爲し卽位前には之を償還し終りしとぞ。

倘少かりしとき嘗てタンフリッチ、ウェルを訪ひ慈善市に臨みし事ありしが朋輩に贈る爲めに種々の物を買ひ最後に一人の從妹の爲めに一個の箱を買はんとせしが金足らざりし爲め是を思ひ止まらんとせしが賣手の貴女は直ちに其の品を皇女に奉げて「其の代は都合好きときに拂ひ玉ふも可なる」と云ひしも皇女は之を辭せりされど賣手は倘ほも辭を續け「然らは其代拂ひ玉ふ

に都合好き迄品物を保存し申すべし」と答えたり其の時に皇女は「オー其程迄に親切にせらるれば其意に從はん」と答へ後錢を得るや朝夙に起き例の驢車に乘りて行き其の箱を買ひ取りて歸えれりとぞ皇女が負債を嫌ふ事斯の如く而して今に至りて嘗て負債を爲せる事なしと云へり、遮莫彼の女とても他の兒女の如く時としては我意を貫き或は怒る事もなきにあらず一例を擧ぐれば彼女は音樂を好みたれども之を復習するを好まぬ僻ありしが爲め其の教師が「成功に達するに王路の設はなく只だ絶えず修練するこそピヤノの名人となる道なれ」と云ふ格言を引きて訓戒を與へしとき皇女は其の樂器に鍵を鈎けて其の鍵を己れの衣嚢に收めて「ピヤノの名人となる王路が玆にあるに」と云ひて復習を拒みし事もありたり。

教師は又た一事を爲し終らずして他の事に移る事なき習慣を養ふ事を勉めたり嘗て草刈を擬似し遊戯を爲し新しく刈りし草を小さき車に積みつゝありしが疲れしと見え、把を棄て其遊戯を止めんとせしが女教師直ちに「之を續け玉へよ」と云ひしか彼女は「最早疲れたり」と答えたり女教師は更らに「其遊戯を爲し始め玉ふときより車に積み終らずして止めてはならぬ事を知りて始め玉ふべきを」と諭して遂に之ば終迄續けさせたりとぞ。

皇女第七歳のとき其母と共に王よりウヰンドルに招かれたり王の招きは寧ろ命令の如くにして母なる公夫人も無論之に應じたり皇女は招かれし其日を樂みたりしが國王も亦た其小さき姪を愛しぬ國王は其日樂隊の奏する面白き調を聞きつゝ皇女に向ひ「ヴヰクトリヤよ、次に汝の好む處を奏せしめんが何を望むや」と問ひしが皇女答えて「神よ王を助け玉へ」のをこそと答へたり而して其の歸らんとするや國王皇女に問て曰く「此の訪問中何か尤も面白かりしや」と皇女答えて「王と

共に馬車を輾しらせたるときなり」と云へり且つダイヤモンド入りの腕裝一對の贈物を携えつゝ歸れりとぞ。

此の小さき皇女は日常は勉學に忙はしければ時に愉快の事に逢えば其の悦は忘れ難きものありたり葡萄牙の女王ドンナ、マリヤは尙幼なかりしが嘗て九歲か十歲の頃英國を訪ひし事ありしが英國民は之を歡迎するの準備に忙はしく國王も大宴會を開いて之を饗せし事ありしが其の時皇女も其席に招かれたりしが後にて其遊戯は大概其宴會の擬似にして其人形も皆羽の長きものやレースなどにて裝はれ又た長き裾引きし裳を裝はせられたり、當夜兩々相對比すべき兩皇女は未來の女皇たるや相似たるも其の他の點に於ては凡そ異なれり其の服裝に於てもウィクトリヤは飾なき眞白き服裝にて質粗なる躰裁なりしも葡萄牙の少女王は扇を使ひ錦繡を輝かし盛裝したる宮女の如くなりし。

一千八百三十年六月二十六日を以てジョルジ王薨き其弟クラーレンス公はウイリヤム四世の名を以て國王の位に昇りたればウィクトリヤ皇女は國君の位に一步を近けり彼女は其系統に於て斯の如き順序を有したり而してウイリヤム四世王は既に六十五歲の高齡にして嗣なきを以て若しやウィクトリヤ皇女未だ定年に至らずして國王の薨き玉ふ事もやあらんとて攝政律と云ふ法案議會に提出せられ皇王未だ十八歲に至らずして國君の位に昇る事もあらん時に備へたるにて去る場合には無論其母ケント公夫人を以て攝政と爲すべかりしなり斯かる次第なれば其の眞の地位を皇女に知らするの必要起り來れり故に先には女敎師は系圖の如何を可成皇女に知らせざるを勉めたりしが今や之を歷史敎科書中に挿入し置きたり然る處皇女は例の如く其の書を繙きしが直ちに其の附箋を見出して曰く「前には嘗て此を見なかつた」と女敎師答へて「前には此を見玉はすと

も好いと考へられたからと云へり之に次に皇女は「私は急に國君の位に近くなつた」と續けたりしが女教師は「左樣」と云へり斯くて暫く考へて居りしがさて曰く「多くの兒女は皆此んな事に逢つたならば誇るであろふが其の困難なのを知らぬ、榮譽がある處には又た其丈けの心配がある」斯く話して不意に右の手の人さし指を舉げてきまり惡るそふに女教師の手の上に置きつゝ「私は温厚くならねばならぬ」「今初めて拉典語を習ふ事を强ひられた理由を知つた、オーガスタやメーリーなどの從姉妹は習はぬに拉典語は英語の礎であつて又た雅語の源であると云つて習はせたが今其の理由が解かつた」と云ひ了つて又た再び「私は温厚くならねばならぬ」と操返しぬ暫くして課業を始めしが是よりして其の舉止の温厚き事決して外の兒女の及ばさる處となれり斯くて彼女は叔父なる國王の即位式には招ねかれざりしも諸方に旅行して諸事に注意を注くの機會を得たり、彼女は年歯に比して少しく丈低き方なりしも其態度は凜として六尺以上もある如き威風を具へたりしが又た温しく慈あり且つ謙遜なる風姿を具へ各國の國語を流調に語り、ウォルシル、ホーラスの詩篇を解し又た多くの藝術に通し殊に音樂及び圖書を嗜めり。

皇女第十二歳の時其母公夫人倫敦及ひリンコルンの僧正等をして其學問進步の試驗を爲さしめしが種々雜多なりし問題の多分は能く答えられたり其內エリサベス女皇に就ての考を問はれしときに彼女は暫し躊躇せしが遂に答えて「エリサベス女皇は偉大なる女王であつたと思ふが善美なる婦人でありしか疑はしい」と答へたり亦其年の誕生日に當るとき宮中に參し叔母なるアデレート女王の前に三時間立ち續けしが定めし疲れりならん其日の服裝も相不變質素なりし。

皇女十六歳の時セント、ゼームス宮のローヤー、チヤ

ベルに於て堅信禮を授られしが其式はカンタベリーの大僧正及びロンドンの僧正によりて司られたり此の式は莊嚴なる式にして貴族中にても僅の上位の者のみ參列を許され皇族は一同壇の周りに半圓形に整列し皇女國王に導かれて壇の前に來り其の左には國王立ち其右には母なるケント公夫人立てり、皇女は儀の終る迄は整しき姿勢を保ちしも大僧正が勸告の内に受けし聖式に就て注意すべきを云ひしときには彼女は唇少しく震ひ更らに爾後彼女が遭遇する困難あるときに王の王即ち神にすがるべきを勸めしときには彼女は耐え難き情やありけん母の肩にすがりて高く啜り泣きを爲せりケント公夫人も同情に打たれ其他の皇族も目に濕りを催したりとぞ。

皇女十七歳の時從兄プリンス、アルベルト其父プリンス、レオポルド及び其の兄弟と共に親戚を訪はん爲めに來り五月を以てケンシントン宮に達し數週間其所に滯在せり其間數々の待遇を受け又た大宴會をも催されたり其の後プリンス、アルベルトの書信の内に次の如く其日の模樣を記せり「一昨日叔母君は我々の爲めにケンシントン宮に於て大宴會を擧げしが貴女紳士花の如く裝ひ雲の如く集ひしが我々の一行も遲く迄其の會に列したり」と而して又た其來賓中にはブランスウイクのウイリヤム公プリンスオレンジ及びウェリントン公の如き貴人もあり亦たウイクトリヤ皇女も此の宴會に出席して樂しく舞踏せり。

アルベルトはウイクトリヤ皇女と共に踊り共に歌ひ共に馬車を驅らし其の相互の交情を喜びしが如くなりしが彼等は尙ほ裏若くして赤繩を結ぶには無邪魔氣なるべくもプリンス、レオポルド、及びケント公夫人は此の樣を見て親心に悦びたるが如し余はスコットと共に其時には宮の庭園にはクラブ、キューピットが花の上に羽たゝきを爲しつゝあらざりしかを疑ふなり之れ

二個の愛友が相分かるゝとき皇女は其愛するものゝ安全を其父プリンスレオポルドに希ひ又たアルベルトは其の後常に意あるが如き擧止多かりしを以てなり。然れどよし其の思ひは左程迄に進みたりしとするも去る思ひは凡て打蓋ふはるゝべき事起りぬ、彼女は即ち國家顯要の位地即ち女皇の位に即き全心を國家の事に傾注するの止むべからざるに至りぬ。

詩人ゲーテの母（其三）

英　子

七、ワイマルに於ける朋友

ゲーテ事務を掌握すること日に益々繁くして、屢々母に音信することも能はざりければ、母夫人は唯だ人々の傳言によりて彼の安否を知り、此を此上なき樂しみとなしぬ。其始め母夫人は聽くも、ゲーテが住みなれざる地に獨居し、起居に不自由あることを察し、信實なる僕サイデルなる者を擇み、家事萬端を周旋せしめんが爲めに送らんとせしが、先づ其出立前彼を呼びて家事一切の事を詳細丁寧に敎へ、忠實に彼に仕へんことを云ひきかしぬ。其以後は常にサイデルに書を寄せ、ゲーテの安否を問ひ、又其度毎にゲーテの身上に就きて委細に注意し、食事の量は如何に、或は彼の最も好むものは何、彼の居室の裝飾は斯樣にせば、彼の意に協ひ、最も喜ぶ所なりなどのよより、自ら編みて送れる靴足袋は、必ずゲーテの意に適するならんなどに至るまで、細大一も漏らさず云ひやりき。特に始めの頃母夫人はワイマルにあるゲーテの朋友を親しく知らざりしを以て、サイデルがゲーテの起居を詳細に報知するは、特に愉快になることにてありき。然れども、かゝる有樣は永續せしにあらず、ワイマルに於て母夫人を知る者の多きは故郷に異ならずなりき。是れ此大詩人の母を知らんとて、新來の珍客頻々として日々ゲーテ

家に充滿し、母夫人に面會を求むるの士絶へざりしが故なり。或人の評に當時ワイマルよりフランクフルトに向て巡禮する者群をなせりと云へる程なり。是れ皆ゲーテに送れる母夫人の書信とゲーテが其母に就て語る所とを見聞せる者をして、心中密かに母夫人の人となりを慕はしめ、ために彼の知己に預からむとて來訪せるものなりし。又一度彼の溫顏に接する者は、皆其懇切慈愛至らざる所なく、品位自ら高きに感じ、彼を敬慕する念をして益々熾ならしめたりき。

サイデルはワイマルに至るの後はよく忠實に働きて家事に熟達せしのみならず、又ゲーテのよき慰藉者ともなり、ゲーテも常に彼を愛したり。

當時ワイマルの名士と稱へられたるウヰランドも亦、一面識のなき以前、遙かに書を寄せて交を求めたりしが、其溫顏に接せんとの念勃々として禁ずる能はず、遠くフランクフルト指して訪ひ行き、一週日をゲーテ家に消せしこともありしが、歸りて後「余が貴家を去るの時は余をして恰も生みの母の膝下を遠ざかるの思ひあらしめし程にて、いとゞ幸福にして厚き待遇を忝ふせり」との、意を書に寄せ、以後は常に母と稱せしとぞ。

八、ワイマル朝と母夫人

ゲーテはワイマルの新大公爵の寵をうけ、特に擢てられて、高官に任用せられしかば、舊臣等は此の若き後進者が不當の位地を得るを見て平らかなる能はず、譏謗の言を彼方此方に放ちて彼を陷れんとなしぬ。然るに老大公爵夫人アンナ、アマリアは、此の中間に入りて、常に人心を穩かならしめんとて、斡旋甚だつとめ給へり。此の事大なる効ありて、人々のゲーテを誹謗すること漸く平穩に歸したりき。此を聞ける母夫人は特に老大公爵夫人の恩愛の厚きに感じ、復た日一日と大公爵夫人に謁見を乞はんとの念を増しぬ。

時は幸にも遂に至りて千七百七十八年と云ふに、大公爵夫人のラクソ啓行ありし時フランクフルトに立寄られしかば、母夫人は宿望をとぐるを得たり、此時大公爵夫人のフランクフルトに滯在し給ひしは、甚だ短かかりしが、日々母夫人を召し給ひて、種々の御下問あり、特にゲーテのワイマル朝に欠くべからざる者なることなど、懇々と御物語あり、又此の柔和にして、單純なる母夫人の性を見ぬかせられて喜び給ふこと一方ならず、兩夫人の高貴なる或る性情は僅か此の數度の對話によりて、忽ち發揮せられ、融合して恰も昔年よりの近親の如くなり、公爵夫人は高貴の御身をも忘れ玉ひて見へ。以後は常に母なるの語を以て母ゲーテを呼ばせ給へりといふ。還御の後母夫人の寄せたる書状に返書を送り給ひしが、御書に曰く「愛するアヤー夫人、貴下の書を得たる我が悦は筆紙に盡しがたし、又われは之を記さんとも思はず。何となれば眞正なる感情は神聖にして記すべきものにあらざればなり。然れども、われの如何に貴下を思ひ、絶へず貴下を記憶してわが喜びとなすやは、貴下の容易に知り得る處なり」と。ウヰランドも宮中に伺候して、老大公爵夫人が母夫人を敬愛し玉ふ旨を物語らせ給ひしことを屢々聞きて、之を其友人に書き送れることあるに由ても、亦如何に兩夫人の關係の厚かりしやを、知り得べし。又老大公爵夫人は、其愛を顯はさんがため、ゲーテの眞像を母夫人に送り或はゲーテ新作の詩に曲譜を自製して添へたまひ、又其後には自身の像をちりばめたる香筐を賜ひたるともありき。母夫人は是等の下賜のある毎に常に喜ひに溢れて雀躍禁ずると能はず、御禮狀を奉りしが彼の香筐を下賜せられしときの如きは「かゝる誕生日は未だ曾て遇はざる所にして、この日は歡喜と快樂の日と申すべく、唯だ喜悦の中に生活をなし候」と申上げぬ。

九、當時フランクフルドのゲーテ家母夫人が若き男女との交際を好むの特性ありしとは、人のよく知る所なりしが、其家に在ては常に兒童に組し、其特性の發揚を奬勵したりき。是を以て青年士女の訪問引きもきらず、別して愛子ウオルフガングがワイマルに奉仕してよりは、己の慰めにもとて、若き士女を會し、又特に娘子等をして各自に手細工物を携へて來らしめ。若し飽けば談笑し、音樂を奏し、舞蹈を催し、或は詩文を朗讀し、或は夜自らの豐富なる想像より造り出でたる物語を聞かしめ、喜び興ずると共に益をも得せしめぬ。母夫人はかくして相樂しむの間、其身も若き人々に異ならで、いと快活にてありき。此の會は常に土曜日に催されければ、集まる者は土曜日の娘と呼ばれぬ。

かくして過ぐること數年、悲しいかな、其獨り娘にてシロッセルに嫁せるコルネリアの訃音は報せられぬ。惟れ千七百七十七年六月八日の出來事なりき。母夫人は生き殘りたる一人娘に先き立たれて、其慟哭は一方ならざりしといへども、よく其信仰を以て其悲情を抑へ自ら大に氣を勵まし、慰を與へんとせり。又ワイマルなるゲーテも之を聞きては一腕を取り去られたる如く、悲嘆に沈みぬ。されどゲーテはかゝる折には常に默して、其心情を秘し一言も其事を語り出ださゞるの習慣なりしかば、誰もよく之を知らざりしが、其日誌中には些細に其悲痛の情を書き顯はし、又母夫人に送れる書中には、唯だ暗黒、悲痛、夢の數字を記せしのみ。是れ實にゲーテが一生中最も悲哀極まりたるの時なりしといふ。シロッセルがゲーテの女友某と婚せるの後、彼は復た其亡妹を追想する事を恐れ、餘り通信をもなさざりしといへども、母夫人は少しも交際を變ぜず、此の新婦に對すると死せる娘に異ならず、又其子にも眞の孫の如く、親みたりしとぞ。

父ゲーテは年老いてより、其身は多く病床に在りしのみならず、親戚知己の少なかりしとて、ゲーテを想ふ念愈々切にして、音信を通ずることも甚だ數を增し、忠實なる彼のサイデルは常に變らず、ゲーテの起居、動作、及衣食の細事に至るまで悉く書してフランクフルトに報じ、其意に協はしめ、又ゲーテの感化に由て、漸くに詩の意などをも解し得るに至りたれば、ゲーテの新作の詩は一々之を寫して、老父母の許に呈したりと。

老大公爵夫人は是等の事を聽き給ひて、屢々書を寄せて、慰めの辭を下し、又母夫人をワイマルに來たるやう招待し給ひたれども、母夫人は家に病夫のあるありて、己れ病床を少時にても離るゝ時は、病の重り行くならんことを知り、厚き御言葉にも從ひがたく、打過ぎ居たり。此より書信の往復は益々兩婦人間に繁く、又大公爵夫人の侍女ルイゼなる人とも相知るに至りければ、大公爵夫人には恐れ多ければとて愛子の事は皆此の侍女に托してけり。時には詩をもて應答することもありたれど、母夫人は元來己れは詩を能くせざれども、子ゲーテは作詩自在にして、妾の代りをもなすべければ、妾の拙作は幾重にも御宥恕を希ふと書き添へたることもありき。侍女ルイゼは母夫人が其子を想ふ至情を知りて、屢々書を通じ、ゲーテ及其忠僕サイデルの起居を報じ其心を安ぜしめぬ。

母夫人かワイマルの愛子を思ふの意熾にして如何にもして相見んとの念止むとなき折柄、ゲーテはカル、アウグスト公爵に隨從し瑞西を漫遊すべしとの仰をうけたるを以て、出立の前先づ此を母夫人に報ぜしが、暫中には唯だ「此度は久振りにて拜顏を得る喜の時節到來し、大公爵に隨從して瑞西に赴くの途上其の仰によりて御家を訪ふとと相成候。然れども殊更に家内の裝飾などをつとめ給ふことには及ばず候。是れは反て御

笑を招くべく、又御饗應なしまゐらするにも別に珍味を用意し遊るゝの必要もなく、唯だ平常のまゝにて御意に協ひ候」とのみ記して何日頃到着するやを報ぜざりき。母夫人は此を見て、欣喜限なく、其日を今かくくと待ち居しが或る日の事、例のごとく安樂椅子によりて、餘念なく編物などに從事せるの折、頻に呼鈴の音聞えければ、急ぎ立ちて戶を開き見しに、是れなん突如として高賓の愛子と共に來ませるなりき。抑もかくなし玉ひしは、大公爵の發意にて、乘車を片道に乘り捨て、母夫人を驚かしめんとて徒歩したまいしなり。母夫人は此を見て、狂するばかり淚を流して喜び躍り、忽ちウオルフガングを抱き暫時はものをも云ふ能はざりき。大公爵は暫らく立ちて慈母の歡喜を傍見し玉ひしに、アヤー夫人（母夫人の事也、是れ詩人スレルベルグ伯爵兄弟、ハウグヰッツ相伴ふてゲーテを其居フランクフルトに訪ひ漫遊を企てける時ゲーテの母が善き葡萄酒を地下の穴藏より取り來り、彼等を饗せしと、恰も獨逸人の入口に膾炙する「ハイモンの四子」てふ昔噺中其四子が勇圖を計り將に發せんとせし時其母アヤーが其子に饗をなせしと同じとて、戯れにゲーテが名付けし處なり、以來はウヰランド、アンナ、アマリア、等親近の人々及び母夫人自らもかく稱せしなり、）は忽ち大公爵の許に走り行きしが歡極りて、半ば泣き、半ば笑ひ、何を言上すべきやを知らざりき。後父ゲーテも來りて大公爵に拜謁なしぬ。大公爵が此處に滯在なし玉ひしは、僅か五日なりしが、後途中より書を賜はり、其中には、愛するアヤーなど記し玉ひて或は之を敬し或は其待遇の厚かりしを謝し玉ふなど、親任の最も深きを示し玉ふものならざるはなかりき。母夫人も亦此の高貴なる、又親實なる大公爵に謁見してよりは、其恩惠の厚きを心に銘して、片時も忘る能はず。或は我愛子の此の高德なる大公爵に、事

ふるを得たる榮譽をほこりて置く能はず、身はフランクフルドにあれども猶ほワイマルに生活するが如くに感じ、時には思ひにせまり、却つて撫然として寂寞に堪へざることもありき。（未完）

出發

妻君「どうぞ氣をつけていらつしやい、必らず船からおつこちないやうに……

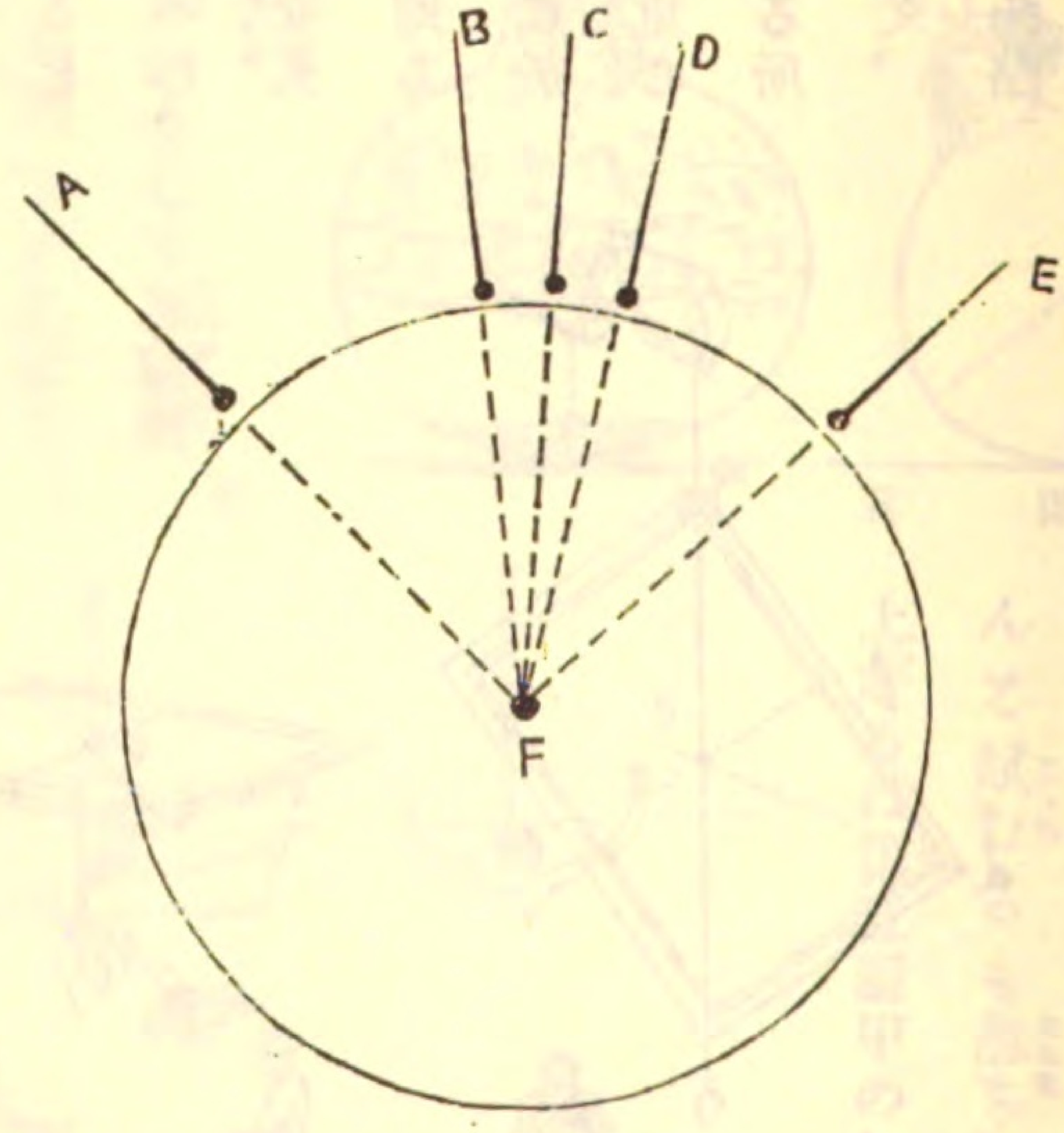
主人「心配しないでも好い、あぶないことがあるものか大丈夫

妻君「それでも若しも難船でもしさうなら直ぐに電報をかけてください

科學

重力の中心

重力の中心（又は重心とも云ふ）とは、物躰の（如何なる形狀にあれ）重力が凝集る其躰内の一點、即ち該物躰の各部分が如何なる位置にあるも正しく相平均する一點を云ふ（第三圖を見よ）此事實は古へ希臘の學者アーキメデースの發見せる所にして、吾人が捿息せる地球にも亦重力の中心點あり、之れ即ち地球の中

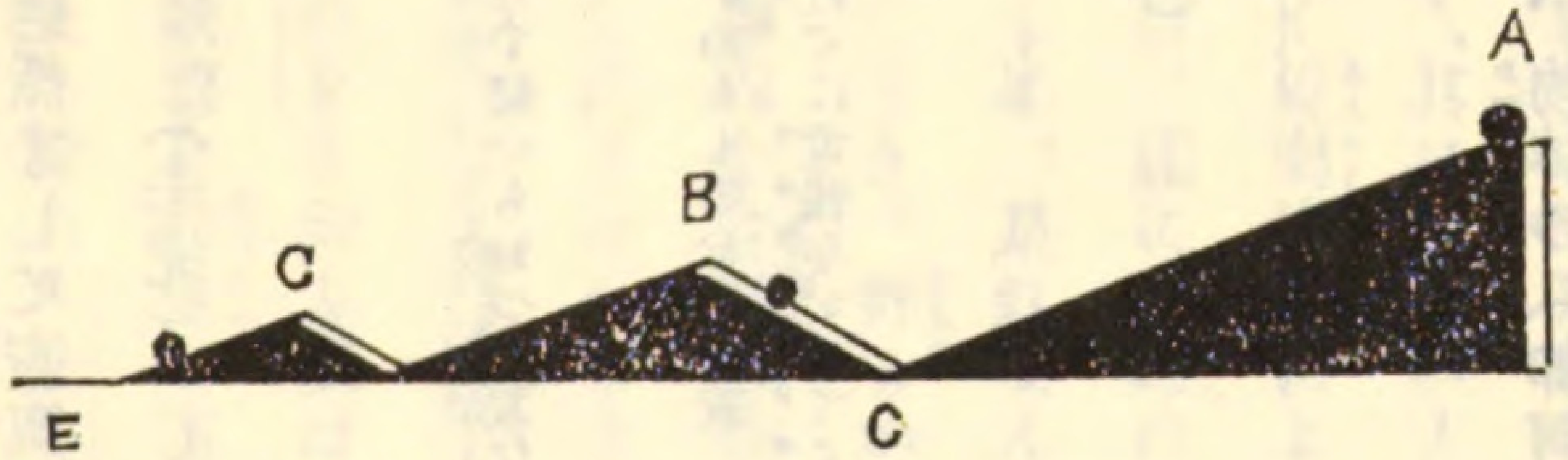


第一圖

心にして、吾人若し一の鉛錘を其表面に垂下せば、何れの處に於ても其鉛錘は直に地球の中心に向ふべし、されば二個の鉛錘を相並べて垂下る時は、其錘線は

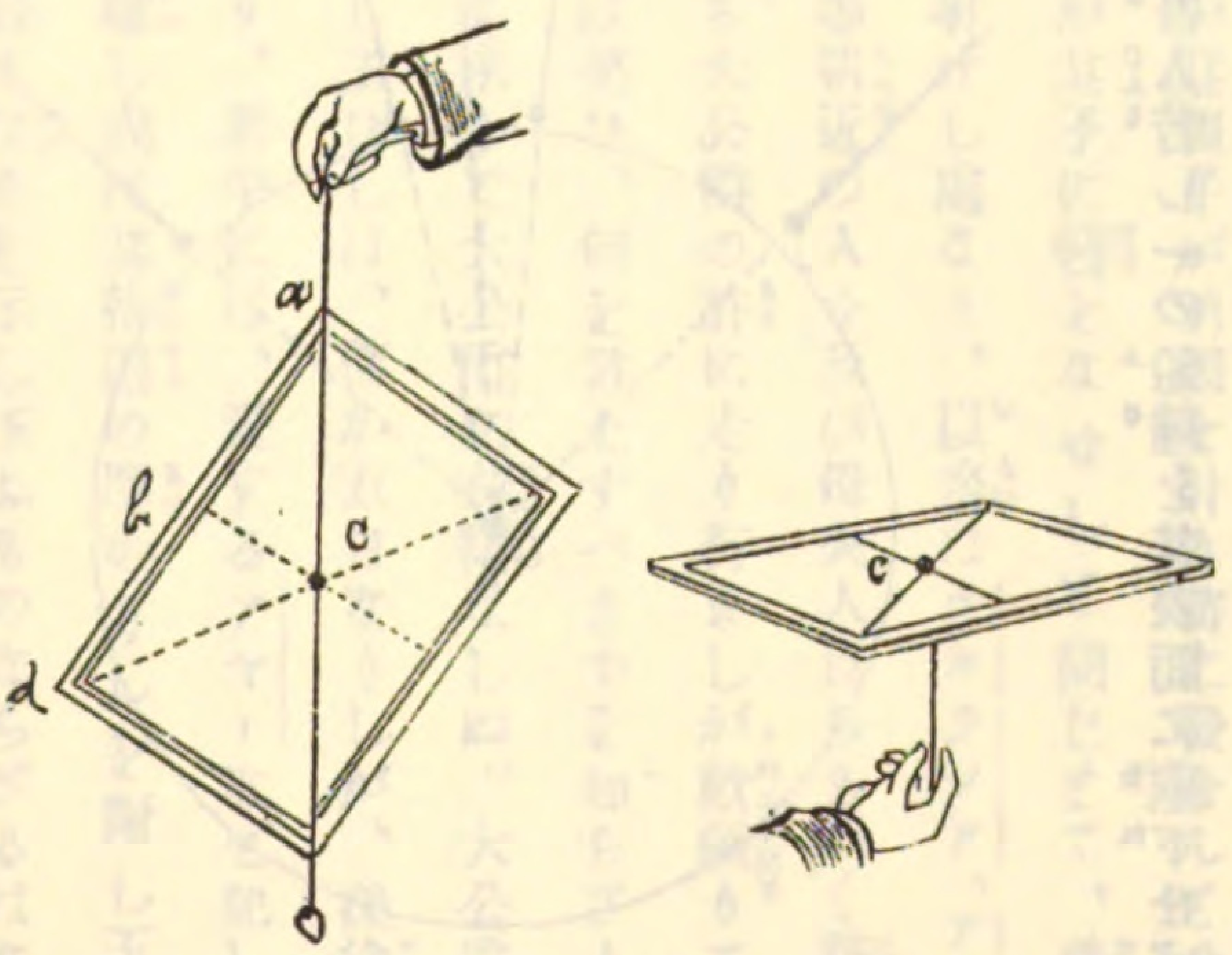
一見並行するが如くなれども右圖に示すか如く、其實は並行するものに非らざるなり。

地球上の物躰は常に其中心に向ふて運動するものなれども、時として變則の現象を呈するとなきにあらず、之れを反動と云ふ、第二圖に示す如く、厚き木板を切斷し、其切斷面に一條の溝を穿ち、其最高點(A)より石球を轉ずれば、球は一度其最低點(D)に墜下るも直ちに第二(B)及ひ第三(C)の高點を超越して、最後の低點(E)に達するを見る、之れ即ち反動の勢力に依りて然るなり。



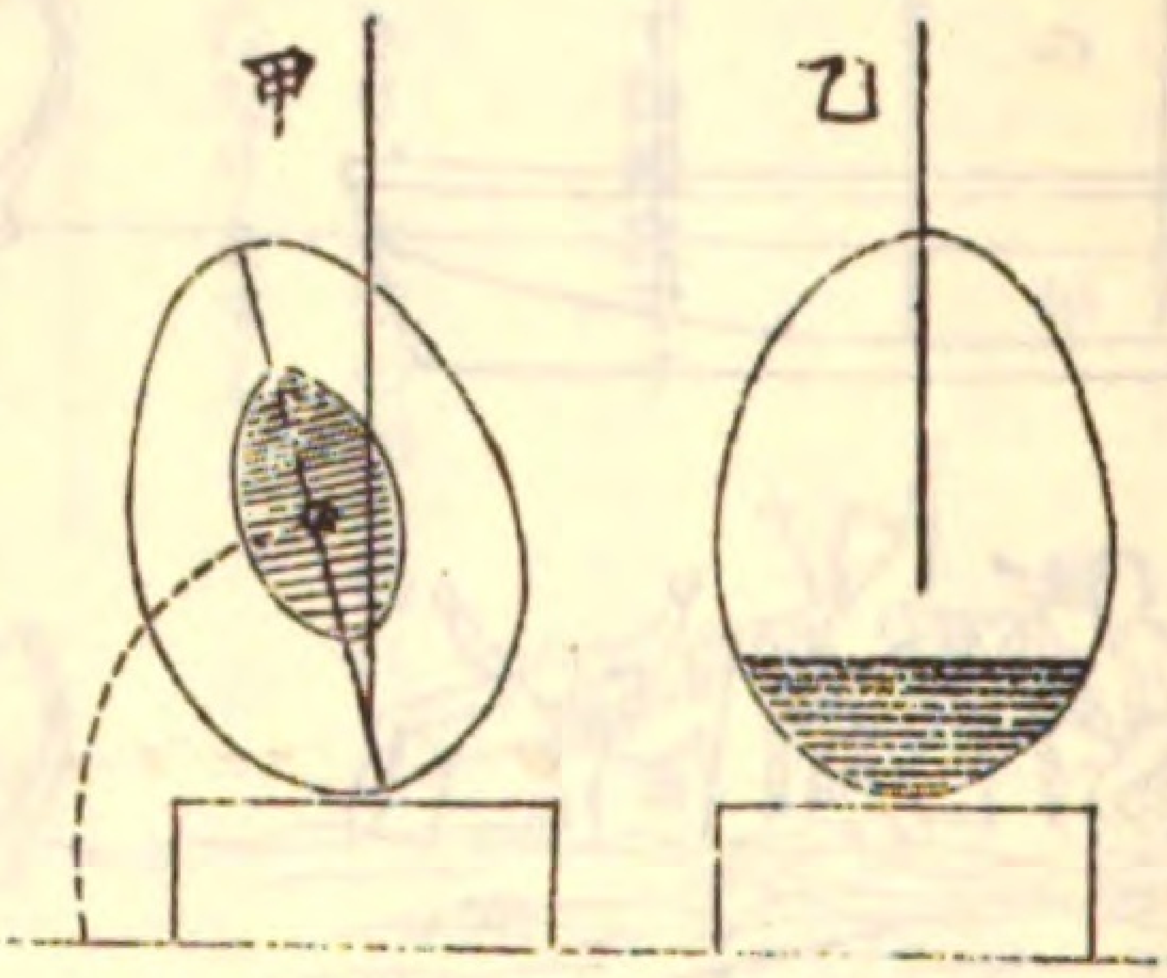
第二圖

重力の中心を見出すの法は、第三圖の如く、小學校用石盤の框の或る一點(a)より鉛錘を垂れ、其錘線の方向を盤面に記し置き、更らに他の一點(b)より同樣に鉛錘を垂れ其錘線の方向を記すれば、必す前の線と或る點に於て互に交叉するを見るべし、此の交叉點は即ち石盤に於ける重心の在る所にして、若し此點を尖りたる木片を以て支持すれは、石盤は正しく其上に靜止して少しも動搖せざるべし、之れ即ち石盤の各部分に於ける重力の此點に集まりて互に相平均すれは



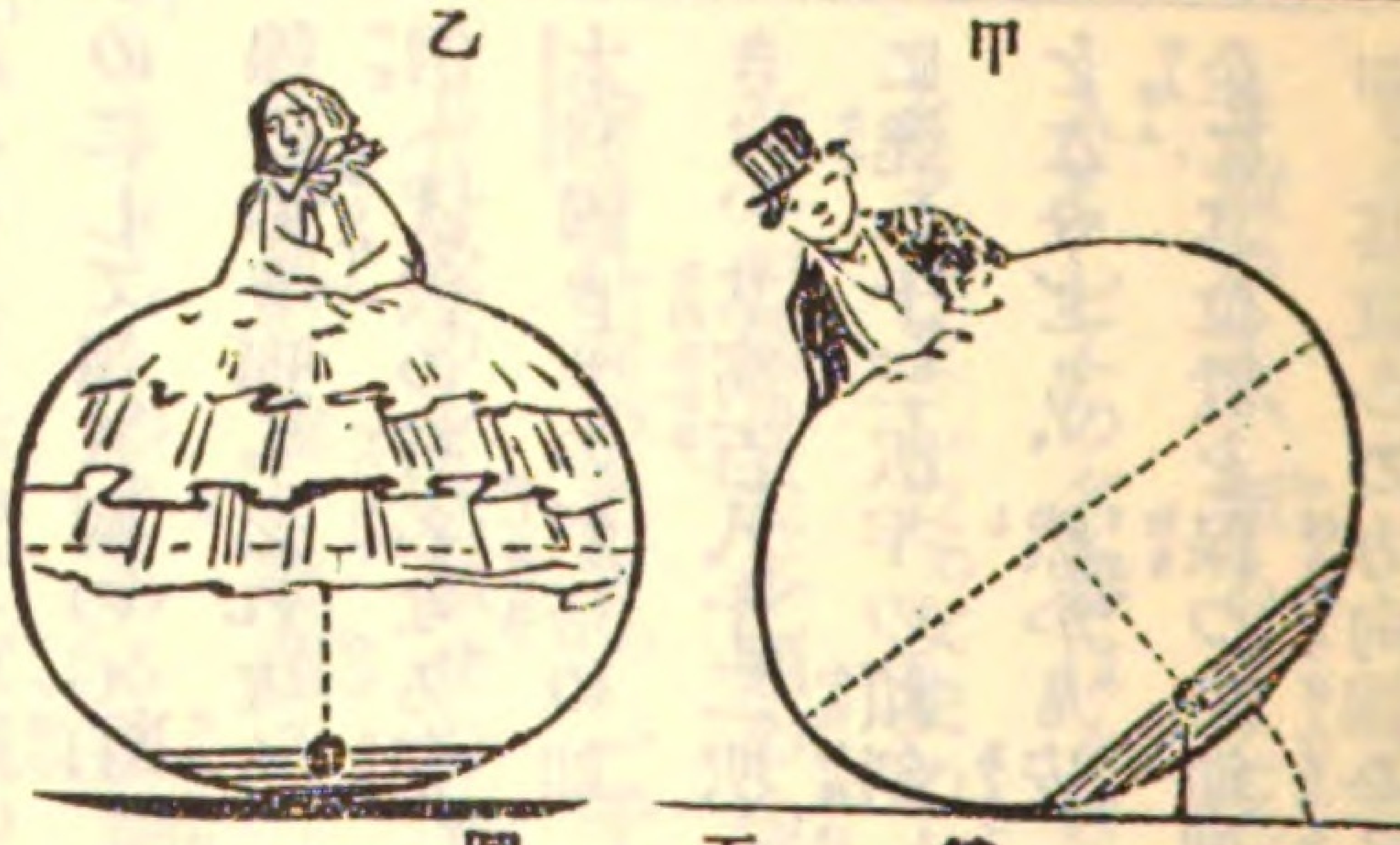
第三圖

なり。此静止の容躰を名けて物の均衡と云ふ。
然して此均衡に於ても、物躰の形状如何に因りて自ら確、不確あり、重力の中心若し物躰の下部にある時は、上部にある時よりも其均衡を得ると一層確かなるものとす、例へば第四圖の如し、二個の卵を盤上に安置するに、甲は其儘に据置き、乙は之れを振り動かして其黄味を下部に沈澱せしむれば、黄味は其比重白味よりも重きを以て、乙は甲よりも其位置一層確かにして容易に動揺するとなかるべし、之れ甲は重力の中心依然として其中部にあれども、乙に於ては重力の中心移つて其下部にあればなり。又例へば小児の玩弄する不倒翁の容易に顛倒せざるは、前に説明せし乙の卵



第四圖

と同一の理にて、重力の中心其の下底に存在する故なり、然して幾度之れを顛倒んと試むるも忽ちに起き上がるは第五圖甲の如く重

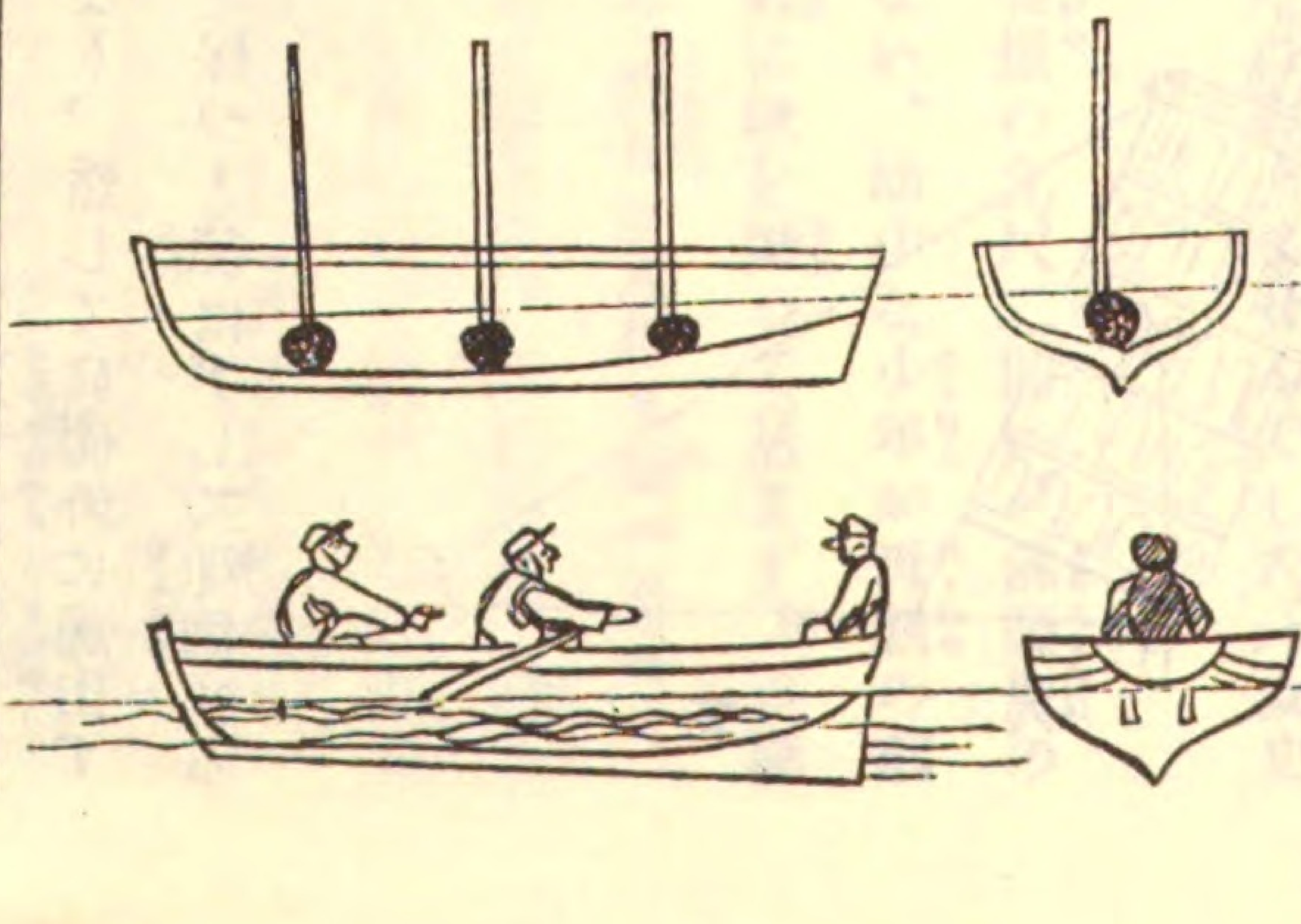


第五圖

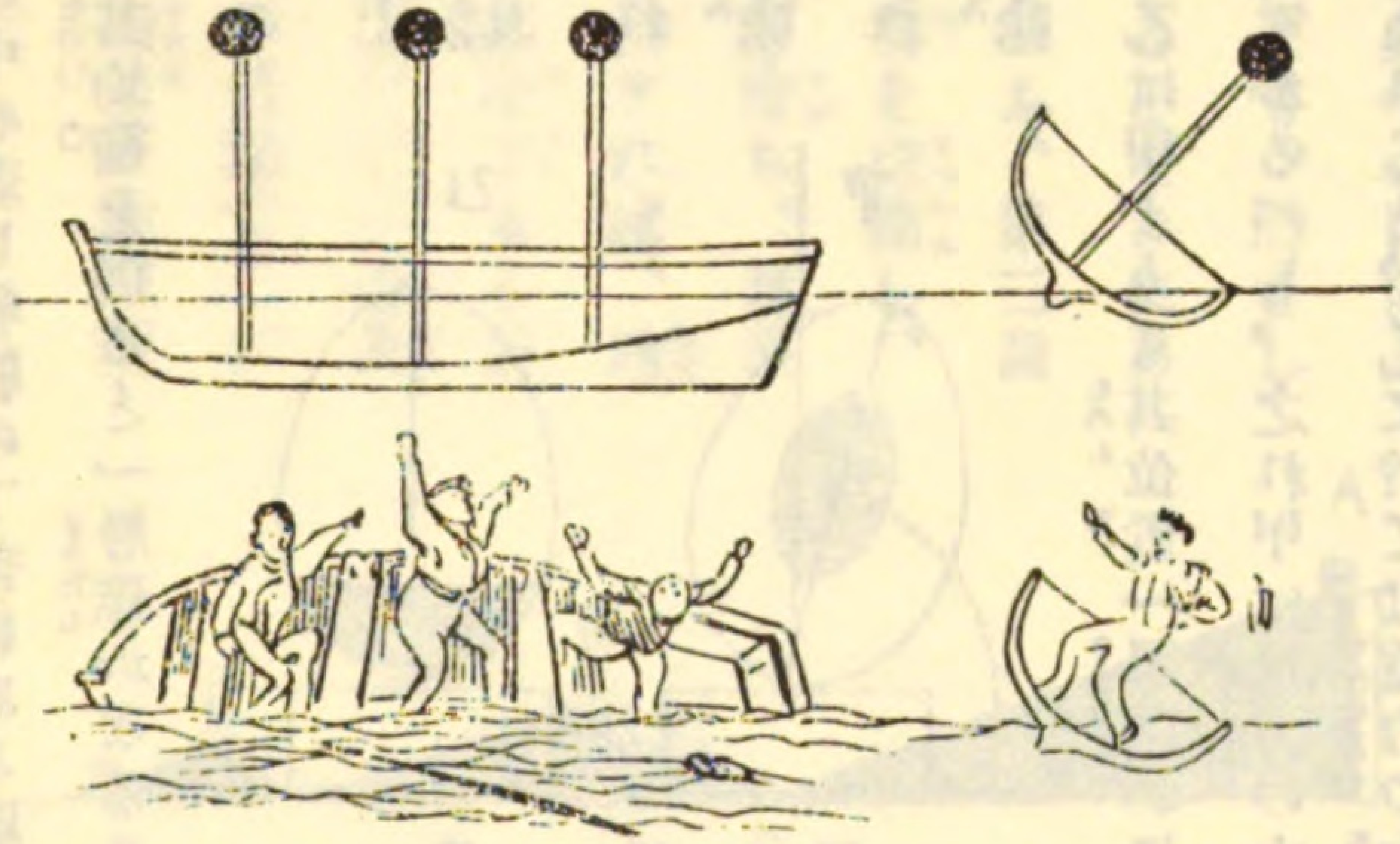
心の方向決して其底礎以外に出でざればなり。

又た端艇を漕ぐの際、其位置の安全なるは漕手か艇內に踞坐するが

第六圖



爲めに重力の中心其下底に在るに由る、然るに偶々不慮の急變に遭へば、漕手は狼狽して一齊に起立するの常癖あるが故に、重力の中心は忽ちに下圖の如く上部に轉動てし重心の方向艇外に出るを以て、顚覆の不幸を見に至るなり。此の如く物躰の位置の安全を保つは、其躰內に於ける重心の高さと其方向線の位置とに依るものにして、方向線若し底礎內に落つる時は、物躰の位置安全を保つと雖も、更らに底礎の端邊に移れ

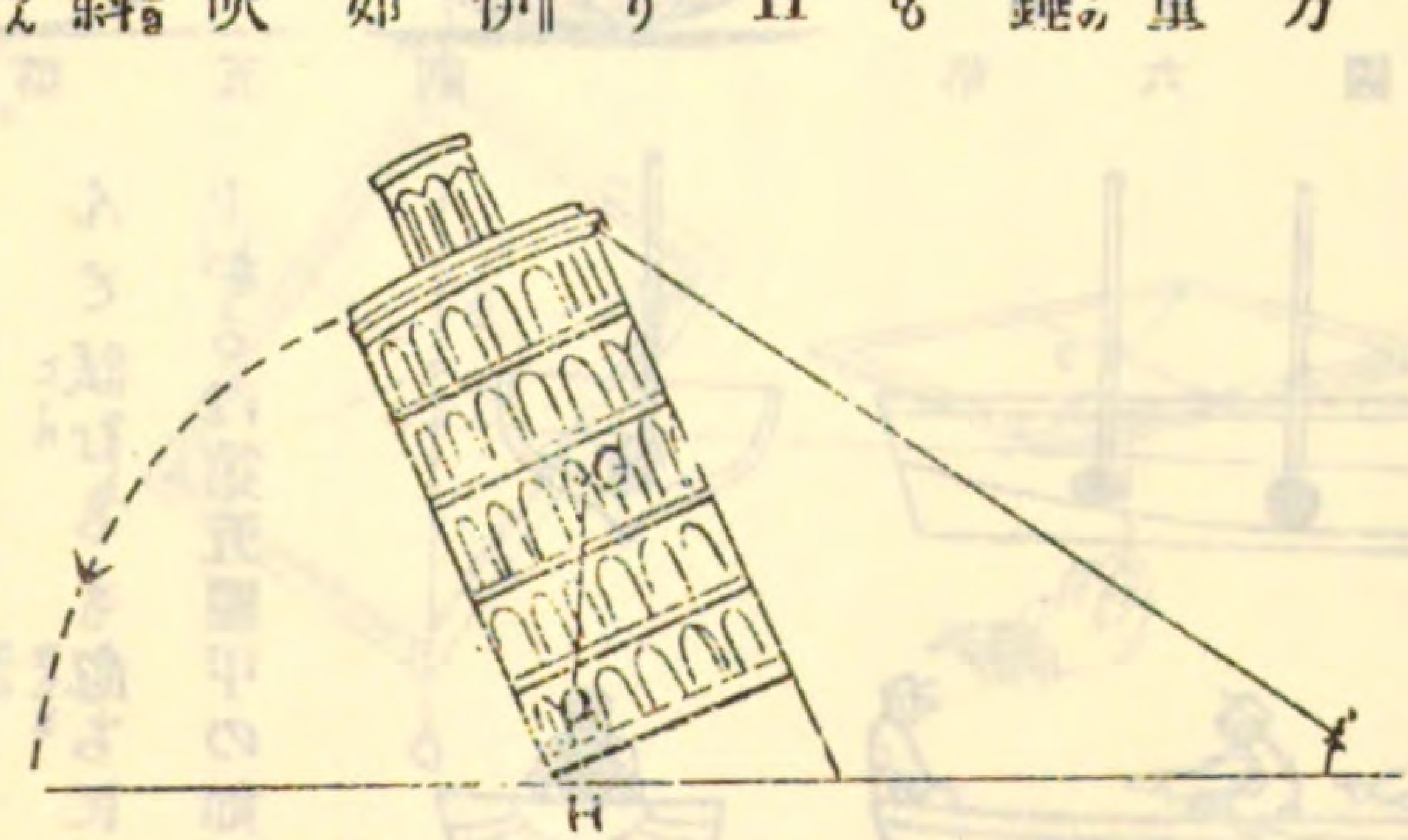


第七圖

ば、其位置較々不安全となり、然して底礎外に逸出ずるに至れば、遂に其位置を保つと能はずして顚倒するなり、

右に述べたる重心の方向線とは、其物躰の重心點より垂下せる鉛錘線の趨く方向を云ふものにして第八圖のGH線の如き即ち之れなり

例へば彼の有名なる伊太利國ピサの斜塔の如きは、其高百八十二呎に達し十三呎半の傾斜をなせども、然かも安全に其位置を保つて顚倒するとなきは、重心第八圖の如く其重心の方向線全く其底礎內に在るに因る。若し



第八圖

此の斜塔にして一層高からしめば顚覆を免れざるべし、何となれば其時に於ては、重力の中心以前よりも上部に在るべく從て其方向線は底礎外に出つべければなり。

令嬢の年齢

問ひたがる人「御幾歳です
令嬢「二十を過ぎました
問ひたがる人「二十歳を越して御幾歳です
令嬢「三十までの間です
問ひたがる人「もそつさはつきり、本當の御年齢は
令嬢「はい……明後日で三十になりますよ

談叢

マリブラン女史

紫櫻生

女史は一千八百〇八年に、佛蘭の「パリ」に生れた、有名の伶人で、まだ弱年い時から其芳名は歐洲に響き渡つて、至るところ熱心な歡迎を受けました。伶人としての名聲はその私行上の深切のために一層光をそへました。女史の仁惠の心は實に著明なもので、女史が儲けた多額の金は大低慈善の事業のために費やされたのです。一千八百三十六年に女史が早逝せられたのを悲歎せぬものはありませんでした。（女史の詳傳は他日に讓る）

「ロンドン」のとある裏棚長屋の九尺二間に、佛蘭胤の「ペテロ」と云つて父親のない、幼少な少年が母親の病床の側に坐つて、何か小聲に歌を歌つて居ます。戸棚を見ても一切のパンもなし、終日なんにも食べません、が矢張鼻歌で氣分を張强めて居ます。夫れでも、時々はその身の淋しさ、饑じさを考へて、ほろ〳〵と涙を落します、と云ふのも畢竟母さんの好な彼の蜜柑を一つ差上たならどれほどおよろこびだらうと思ふからで

す、——して自分には一錢の金もありません。前に歌つて居たのは自作の歌です、自分で調子の文句も悉んな作つたのです、小兒は天才であつたと見えます。

窓近く出でゝ、ふと外方を見ると、一人の男が黄色な文字を書いた、廣告紙を捧げて、當夜「マリブラン」女史の音樂會があると云つて叫ばわつて行きます。

「ペテロ」は「アヽ己れが行く事さへ出來るなら‥‥」と思ひました、が數分して、何か思ひ當る事でもあつた樣に、手と手を握り合せました。眼に望の光をほのめかしながら、先づ鏡臺の前に坐つて、頭髮を梳つて、そして小ッさな箱から古い、垢れた、紙片を取り出したまゝ、母さんの睡顏をじつと見つめて、大急ぎで、家から飛出ました。

＊　＊　＊　＊　＊

誰人が入らしたのです、妾はもーすつかり疲れてしまつたよ。

と貴女は下女に申しました。

ハイ、黄色な縮毛をしたほん可愛らしい少年で御坐りまするが長くはかゝりません一寸と‥‥御目にかゝつてもきつと御氣に觸る樣な事はあるまいつて申して居ます。

よろしい、此方へ通しておくれ、

と美はしい顏に笑をたゝへて、伶人は申しました。

妾には小供を斷る事は出來ないから(と口中にて)

「ペテロ」は帽子をその腕の下に、例の紙片を片手に持ち乍らは入つて來ました。そして小供には不似合に、男らしく貴女の前にずつと進み、一禮して云ふには

私が今日まいりましたのは餘の儀では御坐りません、母さんが大變に病氣で困つて居ますのに、藥、食物も買つて上げる事が出來ませんからです。私の思ひまするに、いつか貴女の大音樂會でこのつまら

ない歌を歌つて下さるならば、きつとどこかの書肆が少しばかりの代價で買つて呉れるでしよう、すると私は其金で母さんのために藥や食物を買ひます。」

美婦人は坐を立つて、——ア、如何に其姿の長高くて、威儀正しかりしよ——小供の手から紙片を受取つて、輕く其歌の調子を小聲に歌つて見ました。

これは汝が作つたのですか。

と貴女は問ひました。

汝が作つたの、ほんとに？文句もですか……妾の音樂會に來て御覽！

と暫らく考へて貴女は問ひました。

ハイ、實に難有御坐ります。

少年の眼つきのうれしげなのはその身にあまるよろこびを表はして

……實に難有御坐りますが私は母さんの側に居なければなりません。

それはよろしい、妾の方から別に人を遣はして、母さんの御守をさせませう、此處に一「クラウン」ありますから、これで母さんに食物や藥を買つて上げなすつて、そしてこの入場券を以つて今晩音樂會にお出なさい、すると妾のつい側の席に汝を案内致しますから。

「ペテロ」は殆んど其幸運を信ずる事が出來ませんでした。若干の蜜柑と、他に小贅澤品の種々を買つて、可憐な病人の許に持つて歸つて、今日の出來事の始終を涙ながらに物語りました。

やがて晩方ともなつて、「ペテロ」は音樂會に列なる事を許されました、が此時彼れは其身の過去に於ひてまたこんな宏大な場所に入つた事はないと思ひました。音樂の響、千百の燈火、堂内の華麗、ダイヤモンドの光耀、絹のすれ合ふ音、ためにに彼れの眼も腦も炫惑してしまいました。

終に女史は出て來ました。少年は視線をその光榮ある顔の上に定めて居ましたが、どうでしよう、誰一人崇拜せぬものもない貴婦人が、その身のまはりの寶玉のために燃ゆるかと思はれる許りの美人が、「ペテロ」の哀れな歌をほんとに歌つて呉れられるだらうと思ひましたらうか。

モー彼れは呼吸もせないで、待つて居ます。すると樂隊は可憐な調子を囃やしました、彼れは此調子を知つて居たから、うれしまぎれに拍手いたしました。そして女史はほんとに少年の歌を歌つたが如何にも質朴で、悲しくて、非常な感動を與へました。――其證據には人々みな眼に泪のつゆをたゝへ、堂内寂然として、哀れな、――ア、眞に哀れな歌の文句より外には物音はありませんでした。

「ペテロ」は丸で空中を飛んで居る樣な心地で家に歸りました。今は金錢の事に關して何心配がありませう？全歐第一の伶人がそのはしたない歌を歌つて呉れられて、數萬の聽衆が「ペテロ」の悲運に同情の泪をそゝいだではありませんか。

翌る日、彼れは「マリブラン」女史の訪問を受けて恐愕ました。女史はその手を「ペテロ」の黄色な縮毛の上に置き乍ら、病みなやんで居る婦人の方に振り向ひて

お小供さんは貴女のために幸運を儲けられました。今朝妾の所に「ロンドン」第一の書肆が來て、お小供さんの歌を三百ポンドに買はして下さつて、若干かの儲をしたなら、其后の利益は此處に居らるゝ「ペテロ」さんと自分とで分けたいと申しました。貴女、どうぞ、神樣に感謝して下さい、お小供さんは天からの特別な賜を持つて居られます。

心氣高い伶人は哀れな婦人諸共にしば〳〵泪にくれました。「ペテロ」は誘や試にあるものを守つて下さる神樣を始終忘れませんから、直ぐ母さんの病床の

側に跪いて、質朴で、しかも雄辯な祈を捧げて、彼等の困苦に付て、敢て世話をしてくれられた實に深切な貴女の上に神樣の御祝福のあらん事を願ひました。この祈の記憶は「マリブラン」女史をば一層同情の人にいたしました。英國貴族社會の偶像とでも云ふべき女史はそのいたるところ慈善の行をいたしました。そして女史が年弱くしかも幸で安々と永き眠につかれた時、その病床にはんべつて看護をつとめ、永く絶えぬ愛情で女史が臨終の心を慰めたものは前日の哀れな「ペテロ」――今では金もあり、學問も出來た、當世第一流の作歌者でした。

高い地位に居ながら、寡婦や親父のない少年に同情を表する氣高い心こそ世の中のほめねばならないものでしよう。（完）

鶴殺長作の話

雨谷一菜庵

維新以前に在りては、人の命誠に粗末に取扱はれぬ。殊に農工商の輩に至りては、士族と呼ばれたる亂暴者の爲めに困しめらるゝこと一方ならず。去ればとて之を官に訴ふるの便宜も少く、之れと相爭ふに結局は損を招くに終れば。無理が通れば、道理ながらこれをさけて、腫れ物に觸るが如く、唯々敬して遠くるの策をとり。無躰なるとをと腹は立てども、頭を下げ腰をかゝめて、御尤至極と穩に笑顔を作り、殿樣旦那樣と恭ひ侍けば。三ピンといはれし年季縛の若黨仲間まで、大道に踏ひろがつて大手を振りたるなり。

將軍の犬を愛し給ふより天下にふれて。犬を殺すは申す迄もなく、故なくしてこれを苦しむる時は。忽ち理非如何を問はず死罪たるべしとあるに恐ろしく。布子に換えし初松魚咬ひて、のそり〳〵と出でゆく後影

見ながらも手は出されず、此畜生と睨みし甲斐なく、命惜しさにまづ〳〵と思案する人間の意氣地なさ、萬物の靈長とは大聲にて名乘られぬ仕墮落ならずや。殺生禁斷の場所に入りて魚を漁りたりとて、今ならば科料とやらの端下錢にて濟むべきを。無慘にも簀巻にして生きながらこれを沈め、魚の餌食にさるゝとは何たる因果ぞ。それよりも腹の立つは、御茶壺の御通りを拜まず、不禮ありしとて斬捨てられしもありけり。分けて話にもならぬは、辻斬とて新刀の利鈍を試めす爲めに。淋しき暗き場處にかくれ。誰彼の容謝はなく、唐突に通行する者を、唐竹割にきつて見ん、車斬こそ興あるべけれと。西瓜一ツ割つても、人の物唯では濟まぬ世に、こんな痴漢少からざりし。

世の移り變とはいひ、今より僅三十年の昨日に。かゝる時代もありつるを思へば、今の世によくぞ生れ合せし身の、一汽車乘後れしが爲めに、衝突の災難を脫れ得たるやうにも感ずるなり。

春日の鹿を殺せしものと同樣、鶴は名鳥なりとのとにて、之を殺せし者ある時は、嚴しき刑罰に行はるゝとなりけるが。殊に常州水戶の城主德川西山公(光國卿)久慈郡西山の御山莊に御隱居ありける時より。尋常ならず御寵愛ありし雌雄二羽の丹頂の鶴あり。素より能く公に馴れ奉りしかば、放し飼はるゝに、決して遠く飛去る事なく、常に御山莊の邊に舞ひ遊びて、閑雲野鶴に伴ふ公が御風流の御覺召にも叶ひ。御手づから餌など與へ給ふに、更に恐れ奉る事もなく、直々と進みよりて、靜に之を啄み。嬉しげに羽たゝきし、聲高く鳴きなどし居たりけるに。或日如何にしたりけん、二羽共に何處にか飛去りて歸り來らず。公もいと不審に覺して、近侍の人々に斯くと仰せ出されければ。夫は一大事なり、捨置くべきに非ずとて、忽ち足力を四方の里正が許に走せ。里正より猶ほその配下の百姓に觸

れ。鶴の行衛存じたるものは速に申出でよ、重き御賞賜わるべきなりと嚴しく達せられたるより。其近村の農民は俄に騷き立ちて、額を集め膝つき寄せ、無い智惠絞るも多かりけり。去るに雄鳥は如何にしけん、其夕暮雌鳥のみ一羽歸り來れり。



茲に久慈郡藤田村に近く隣りて、天神林と呼べる處に、長作と呼べる百姓住みけり。其性愚直にして力強く、一人の母に仕へて能く孝養を盡し。雨にも風にも耕作を怠る事なく、貯有りといふにはあらねど、又さして朝夕に事欠く程貧しくもあらず月日を過ごし居たりける。

時は七月の初院、殘る暑さは畠打つ背に汗を湧かして、鋤きかへす土も燒くるが如く。涼しげなる木蔭に歇ふ蟬を羨む日盛を、暫時が程は避けてこそと。長作流にゆきて汗を淸め、松の一叢繁れる邊を撰みて草折伏せ、用意せる行厨をひらきて、今や飢えたる腹を愈さんとせる折。何時何處よりや來りけん、一羽の鶴長作が後より、肩越しに首さしのべて、左手に持ちたる行厨を嘴もてつけり。長作驚きて持ちたる手を放てば、行厨は打こぼれて土に盡くまみれぬ。長作打腹立ちて何の思慮も無く、鋤をとりて鶴の背を強く撃てり。大力の長作に撃たれては鶴は二度三度羽をふ

るはせしのみ、もろくも死して千歳の齢を草葉の露にまかせけるこそ是非なけれ。長作我にかへりて、色青褪め心悲き、茫然として爲すべき途を知らず。思へば野に來り栖む鶴を殺してだに、大法に行はれて死罪となると聞けり。況てや此邊は昔より鶴などの棲むべき處にはあらず。唯水戸の大殿西山に御隱居遊れてより、殊に御寵愛の鶴二羽あり。折々は此邊にも舞ひ下りて遊ぶと、誰やらの噂せるを聞し事あり。我打殺せし此鶴は、其内の一羽なるべし。此事公の沙汰にもならんには、如何なる憂目にか逢ふらん。アナ悲しアナ恐ろしと、身もすくみ、足もなへて、獨涙にくれ居たりしが。此上は兎にも角にも、人に見咎められぬ工夫こそ爲すべけれと、畠の中程に穴を穿ち、殺せし鶴をこれに埋め。扨て此上は家にかへりて、一思案して見るべし。老ひたる母だに無くば、自ら罪を官に請ふも易けれど。吾れ死罪に行はれんか、母は忽ち路頭に迷ひて、暑に病み、寒に凍えて、年豐なりとも終には飢えて死なん。今母を伴ひて他國に走るとせんか、若し母の何故に走ると問はゞ、吾れ如何に答へん。

かく種々に思ひ煩ひつゝ、心は細き畷を過ぎ、憂は積る岡の邊をめぐりて、我家の門口までは來りけれども。牛頭馬頭の門守るものも無けれど、地獄の門に歩み寄りし心地して、我家ながら入るにも入られず佇むを。耳敏くも老ひたる母の夫と知りて出迎ひ。『今日は常よりも暑さ强ければ、家に在りても案じ煩ひ居たり。珍らしく早く歸りませしよ、氣分にでも惡くやある。見れば顏色も痛く蒼味たれ。疾く足を洗ひて横になりて見よ、暑にやあてられつらん。枇杷葉湯にても煎じて飲みて見るべし』と、優しき母の語に胸先づ塞り、耐え〳〵し涙一時に溢れて、今は包むに包まれず。其日過ちて丹頂の鶴を打殺したる始終を物語りつ。此上は人の氣付かぬ内に他國に走りて、母を養ひ奉らんと。

咽び入りつゝ歎くを見て、母は驚き且つ呆れ、暫時は應へなかりけるが。漸くにして涙を拂ひ、容を正して長作に對ひ。『今御西山御寵愛の鶴を打殺せしと、過ちとはいひ其罪脱るゝに脱るゝと能はざるべし。假令家をすてゝ他國に走らんとすとも、いかで首尾よく脱れ得べけん。親子の者途中に於て憂き縄目にかゝりて、却つて世の人の笑を殘さん。唯此上は是非に及ばず、自らかく〳〵と潔よく訴出で。上の御慈悲を願より外に思案もなし、彼方より召捕の方々向はれぬ内、疾く庄屋が許に走りて其扱に委することそよけれ。此母も命にかへて、官へ願ふて見るべし。ユメ未練の心出さず、心の内に神佛の御名を絶えず念ぜよ。』と、急き立てられて長作も、漸々心取直し、暇乞さへそこ〳〵に。力なく〳〵起上り。戸外に出づれば黄昏れて、塒に急く群烏の、羽を打交はし睦みゆく、先は親鳥、後は子烏、かゝる鳥にも親と子の、あるに甲斐なき身の不孝。これも前世の冥罰かと思へば足も捗らず、立留りては振かへる、森の彼方に夕月の、影冷かに冴え渡り、夜のみは秋の空なれど。母にひかるゝ執着の、涙は繁き草の露。明日をも待たで消ゆるかと、迷へば路も見え分かず。折しもあれや往手より、御用と記せし提灯の火影のチラと見ゆる間も、有りや無しやに長作が、襟頸とつて其場に押伏せ。高手小手にぞ縛めける。

※ ※ ※ ※

西山の御家老大森典膳、（彌惣右衛門と稱す御隱居の折より初中後首尾よく御逝去迄勤む）夜に入りて御暇賜はり。不老澤なる住家に歸らんとて、（西山勤務の諸臣多くは不老澤に住せり小姓頭佐々介三郎御醫者鈴木宗與小納戸劍持與兵衛朝比奈半次等も仝前）一人の從僕を伴ひ道を急ぐ處に。林暗くして夏草繁り、細き流の水音淋しく、秋早や來ると鳴く虫の、聲哀れなる彼方の松の根につくばいて涙ながら『お願あり』と呼ぶ老婆あり。

＊　＊＊　＊＊　＊＊

水戸城を去ると東三里、那珂川の大流海に注ぐの處、漁村ありて那珂の湊とはいふなり。公殊の外海上の月を賞で給ふよりして、此地に一亭を築き賓閣と名付給ひ。秋の夜冴ゆる月の頃は、常に此亭に來遊あり。黄金花咲く潮の態、空より歸る蜑小舟。これは詩に、彼は歌に、よむ盃の數さえも、三五夜中新月の、いろ〳〵澤なる御慰み、深くぞ興じ給ひける。

時は元祿七年甲戌八月十五日、待ち得し月の影滌ちて、流石は名ある夜なりけり。公には御酒宴半にして、御目付五百城茂太夫嘉忠を顧み給ひ『兼ねて當地にて制配致す旨申聞けたる鶴殺の罪人、唯今自ら仕置致すべければ、疾く此庭前に牽出せよ』との嚴命なり。誰とて拒み奉るべき、忽ち庭上に土壇を築き、罪人長作を牽出してこれを抱かせ。準備調ひたる旨申上ぐるに、公には庭上に下立せられ、御佩刀の鞘を拂つて長作が面前に差つけられ『憎き奴かな。鶴を殺すがよきか、これがよきか、』と仰せらるゝに。長作眼を閉ぢて靜に頭を垂れ、御制配を待つのみなり。公には御太刀振かざされ、アハヤ一下と見えたれば該臣孰れも聲を呑み、今か長作が命も露と消ぬべしと思ひ居たるに。靜に公は御後を顧み給ひ。中村新八顧言を招がせられ『斯く迄はしけれども、今此者を斬捨てたりとも、死したる鶴は甦るまじ。禽獸ゆゑに人を害ふ、國法ありとも忍ぶべきに非ず。彼の鶴も我養ひし處のものなれば、これ私のものともいふべし。去れば了見一つにて罪人一人助けたりとも、天下の法度を亂すともいふ可からず。人の命は大切なるものなり、今は此者に落付候までの飯米路錢を與えて追放せよ。俄に産を失ひ路錢にも事欠けば、惡事をもするものなり。これ長作とやら、此先とも身を愼み、過ちたりとも罪を犯し、老ひたる母をな歎かせそ。汝が命助かりしも孝心ありしが故

なれば、天の憐れみ給ふ處と難有思ふべし。故郷を離れ何處の浦にさまようとも、孝行といふと忘るゝな』と座を拂つて坐につき給ふ。侍き居たる諸臣も皆、君の恵のいと深きに、涙を袖にしぼりあえず、畏みたゝへまゐらせける。

月の光は愈冴えて、及ばぬ隅もあらざりし、君が情もしかぞ世に、照りきと後にも傳へける。

天氣の話

其一　雲　T．K．生

雲は水蒸氣の凝結して成りたるものなれば、天候とは大なる關係を有す、されば之を至細に觀察して天氣を卜するは隨分趣味あることゝいふべし。

暴風日の夕暮、黄色たりし空の色、急に淡緑に變ずる時は、尙ほ風雨の烈しき日來るべし、されど若し橙黄色或は赤色を呈すれば、大氣乾燥するの證にして從つて晴朗の天氣を豫期すべし。

細小なる雲が日の出前東天に登りて、間も無く散り失する時は、其日は一日晴天なり。

緑色を帶びたる群雲、悉く東南に集合して、數時間同じ場所に止まることあれば、雨幷に風の來るを卜すべし。

空の色合深緑となるは確に欝陶敷天氣の來る前表にて、其の季節々々により、或は雨模樣となり、或は雪空となる。

日の出前後に、空の色合赤色又は黄色を呈すれば、二三時間の内に必ず降雨あるべし。

如何なる時にても雲が虚空を横斷して急走するか、又は西北に當つて鉛色の雲を顯はす時は雨天の徵と知るべし。

日沒に於て切れ〴〵なる雲四方に飛散せんとするの狀態を呈し、雲の端が恰かも赤色又は金黄色にて縁取し

たる様に見ゆることあれば、大抵靜穩なる天氣の打續くものなり。

晴朗なる天氣に次いで來る第一の變化は通例白雲の現出なり、此の雲は最も高遠なる虚空に點々浮ぶものにて、其の形は糸、卷髮、藁束、布片等に彷彿なることあり、こは次第に其の量を增して終には空中一面を覆ふに至る、此雲にして若し非常に高く見ゆる時は、天氣の變化は漸進的となるなり。

夕景に於て微細なる雲を西北に見出す時は、突然降雨あるべし。

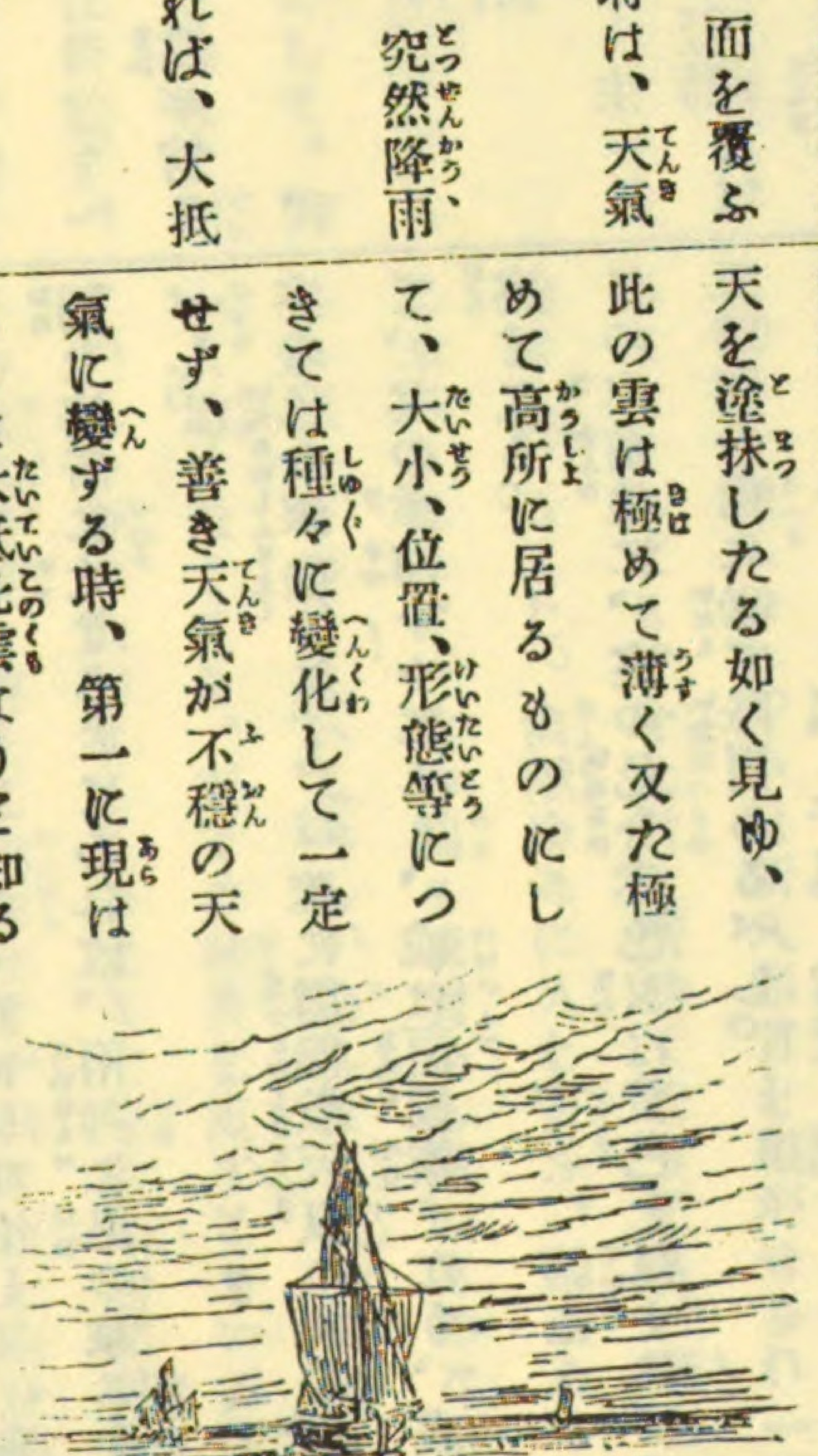
晴天後點々たる雲の空中に散亂することあれば、大抵直ちに降雨あり。

西方に黑雲の立ち昇るは、驟雨の前表なり。

ルーク、ホワード氏は雲に就て最も詳細なる研究をなしたる人なるが。今より殆ど百年の昔初めて雲の形態を分類せり、即ち卷雲、積雲、層雲、(以上單稱)、卷積雲、卷層雲、積層雲、亂雲(以上複稱)の七種に分ちて命名せり、此の稱呼は今尚ほ氣象學者の間に行はるゝ所にて全く改良せらるゝに至らず。

卷雲

卷雲といふは、大抵彎曲の形をなし、恰かも刷毛にて天を塗抹したる如く見ゆ、此の雲は極めて薄く又た極めて高所に居るものにして、大小、位置、形態等につきては種々に變化して一定せず、善き天氣が不穩の天氣に變ずる時、第一に現はるゝは大抵此雲なりと知るべし、此の雲は四方に細き線をなして延長することあれば、又線と線とが互に平行して南より北、(或は東北より西南)に廣がることあり、又たは馬の尾に彷彿た



卷雲

る形をなすことあれば組紐の樣に組合ふこともあり、卷雲は常に暴風の來る前表となれど、若し此雲にして躰裁よく空中に點在する時は穩やかなる天氣打續くべし。

此の雲の平坦なる面が速に下る時は、雨天となること間違なし。

卷雲の糸が輕風に誘はれて空中を走る時は、其の風は強くなるべし、されど風の方向は前に變らず。

卷雲の一端が微風に掃ひ去らるゝ時は表面風（地球の表面を吹く風）の風向忽ちに變はるべし、卷雲の現はれたる日西南の表面風起る時は、如何なる好天氣といへども多少暴摸樣となり風雨共に三四十時間の内に來る、暴風雨濟みて晴天を顯はせし時、二三の卷雲を東方に見ることあれば、暴風雨は全く過ぎ去りたるものにて晴天の日續けど、若し卷雲が四方に亂れて流布する時は、第二の暴風雨が間も無く起るを豫期すべし。」

晴天の日といへども、卷雲出現すると共に晴雨計下降する事あれば、雨天となること間違なし。

卷雲の線が上方を指す時は大抵降雨の前兆なれど、下方に向く時は風の徵候なり。

卷雲が西より東にわだかまる時は暴風雨の迫る兆なり。

若し卷雲が切れ〳〵に破れて飛散すれば、好天氣を卜すべし。若し此の雲が風に逆つて飛昇する時は、降雨の徵、風に從つて低くなり、又次第に濃くなれば、惡しき天氣の兆と知るべし。

日沒或は日の出に羽根の如き卷雲現はれて、美麗なる色彩を放つは、晴天の徵と知るべし。

雲より發する蒸氣が上方に立つ時は、其の雲は次第に低くゝなるものにて、降雨甚だ近し、されど若し下方に立つ時は、その雲は次第に高くなるものにて、益々好天氣と成るべし。

房紐又は馬の尾に似たる雲の現はるゝは、大抵風の前兆と知るべし。

積雲

積雲といふは水平面より起り上方に向つて次第に堆積する所の雲にして、其の形さながら眞綿を積み上げたる樣なり、此の雲の組織は極めて濃密にして大氣の低くき地に起るものなり、こは熱地より騰る所の暖かき空氣に依つて醸さるゝが故、或は又晝雲と呼ぶ、



積雲

其の最下部は水平面に接し上部は非常に凸起して殆ど山の形をなすことあり。

若し此の積雲にして程善き高さと大きさを持ち、日中熱氣の盛なる時のみ現出することあれば、そは好天氣の徴と知るべし、殊に雲の屈曲も輪廓も正しくして風と共に現はるゝことあれば、晴天の日永く續くべし。されど迅速に其の量を増して、大氣の低くき部分に下り、日沒に至るも尚ほ其のまゝにして散り失せざる時は、終に雨天となるべし、雲の表面より毛の如き小片飛び出ることあれば(殊に風に逆つて動く時は)降雨の近かきを豫期すべし。

若し此の積雲が夕景に至りて其の量を減ずれば好天氣の徴なれど、之に反して其量を増す時は悪しき天氣の來ると知るべし。

若し冬の日に於て、積雲の白き堤を南方に築けば、天氣は雪となるべし。

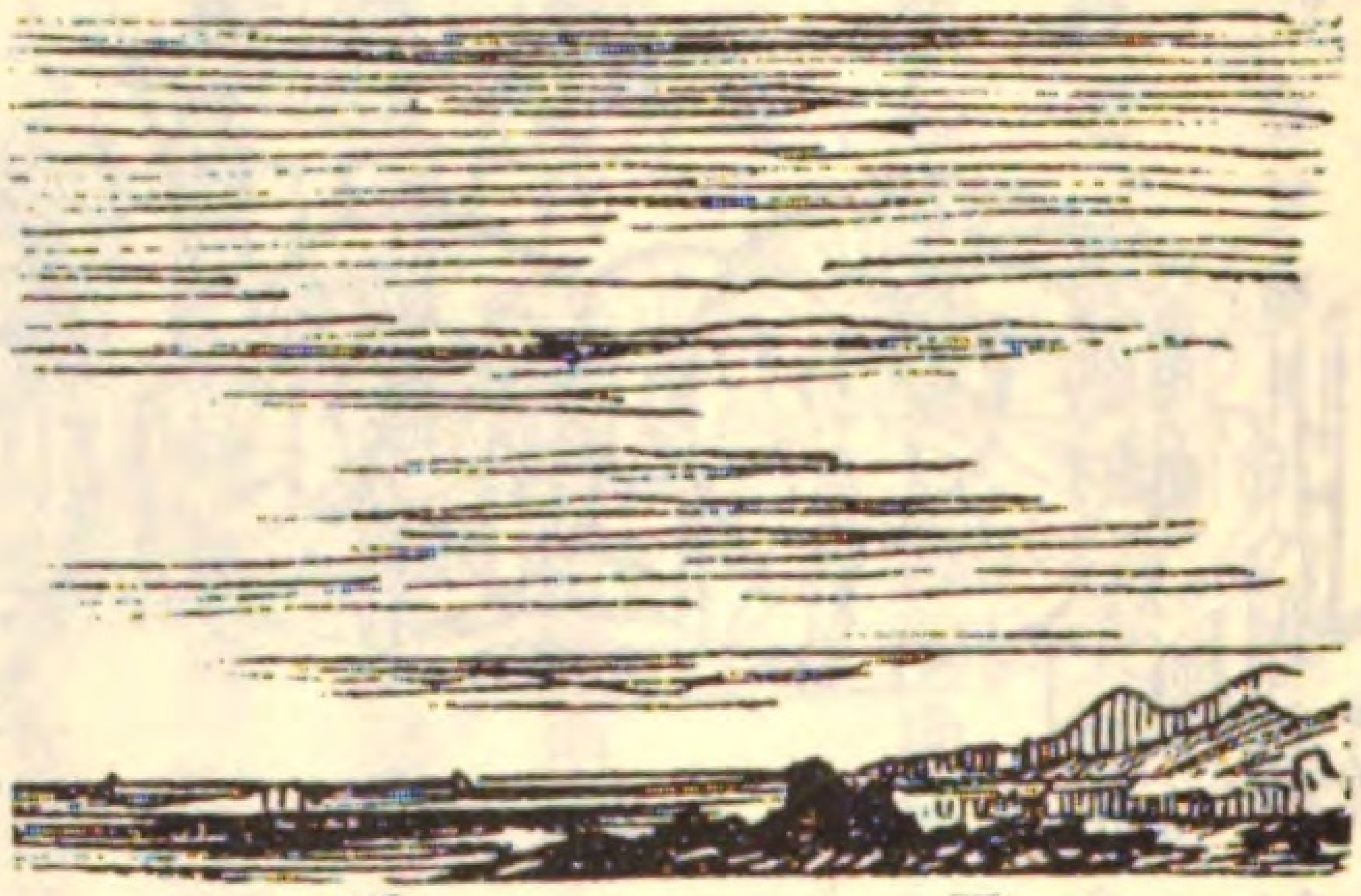
若し夏の日に於て南風の吹きたる後、二三日間非常に暑くなりて、山の如き積雲起ることあれば、直ちに雷雨の來る徴と知るべし。

日沒に強風吹きて、その風下に積雲突起するときは、

其の夜の中に雷鳴あるべし。

層雲

層雲とは下方より上方に層をなして增す所の平かなる雲をいふ、こは前二者に比し最も低部に懸かる雲にして其の最下部は霧となりて地上を覆ふ、概ね日沒に起り、夜間に增張し、日の出に消ゆるが故、或は又夜雲とも稱す、この雲は日中上騰したる蒸發氣、夕景の冷氣に逢ひて下降するや忽ち凝結して雲となりたるものなり、されば再び太陽東天に登りて、光線を雲の面に發射する時は、爲めに攪亂せられて遂に四散するに至るものなり。



層雲

此の層雲翌朝日の出前後に至り、霧となりて四方に散亂し、同時に晴雨計も上昇する時は、晴天を卜し得れど、若し晴雨計が上昇したる儘にて下降すること無ければ其日一日霧が續く、されど又晴雨計が下降するときあれば其日は雨天に變はる可し（未完）

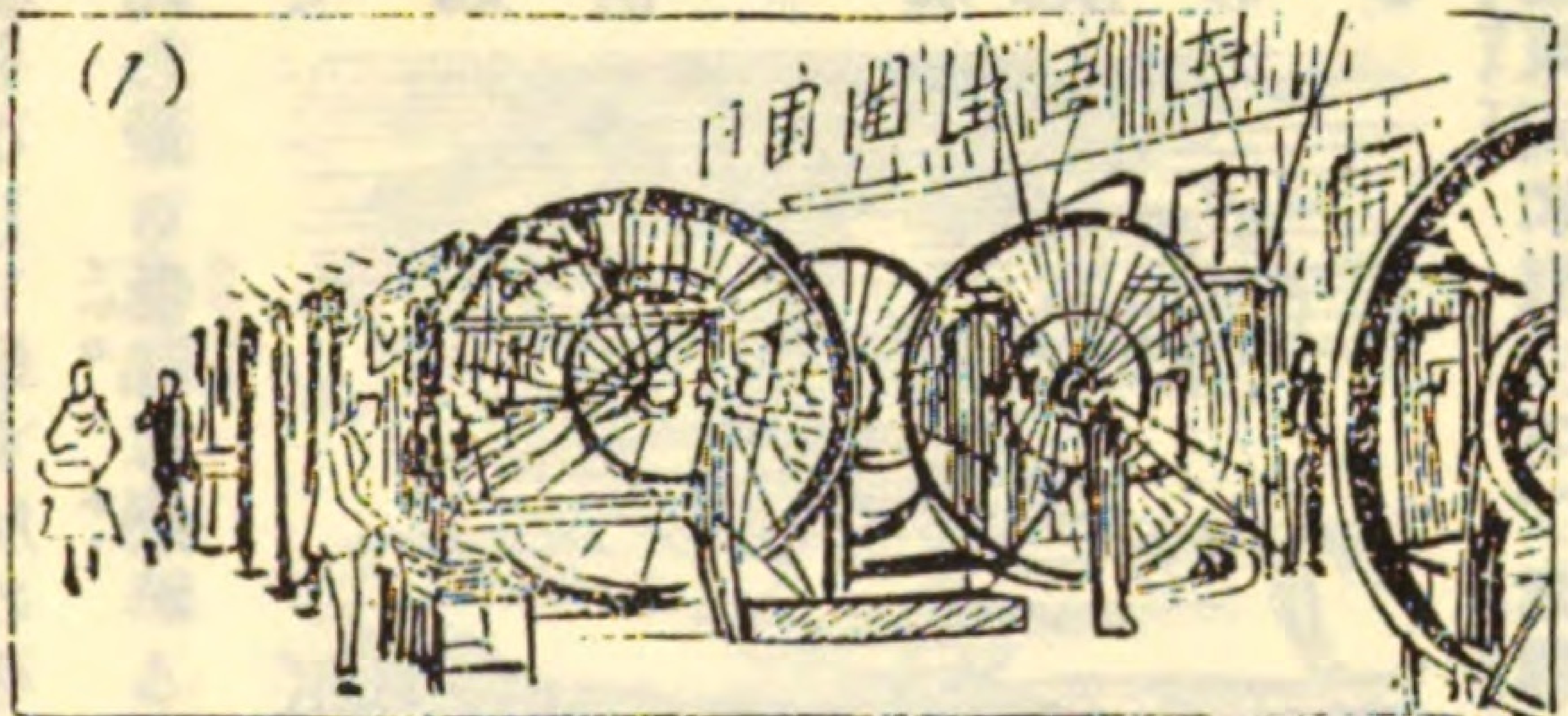
英國造幣局の話

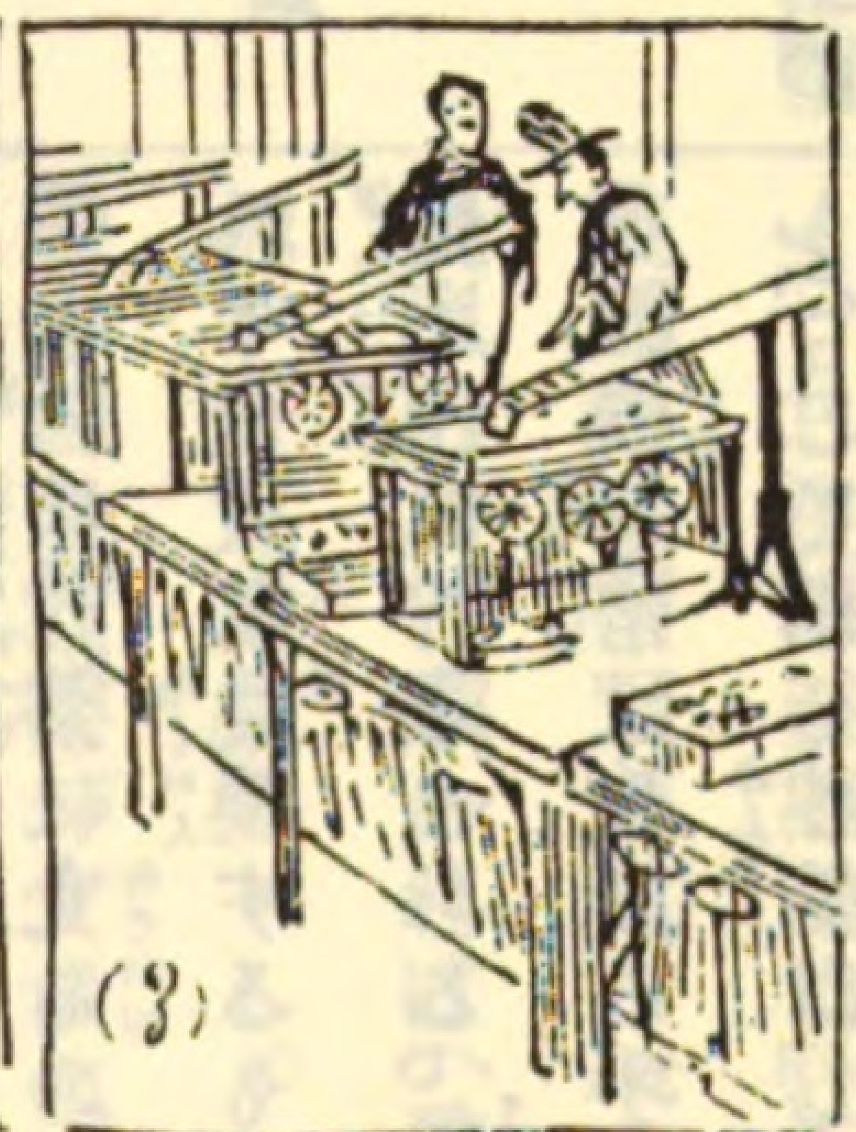
金が凡ての金屬より遙に秀で且つ効力あることは十分知り渡れる事なり、英國は金貨本位にして銀と銅とは僅に補助貨幣に止るのみ、又紙幣も流通すれどもいづれも金貨に兌換するものなり、而して金は大英銀行の金庫内に貯藏せらる。

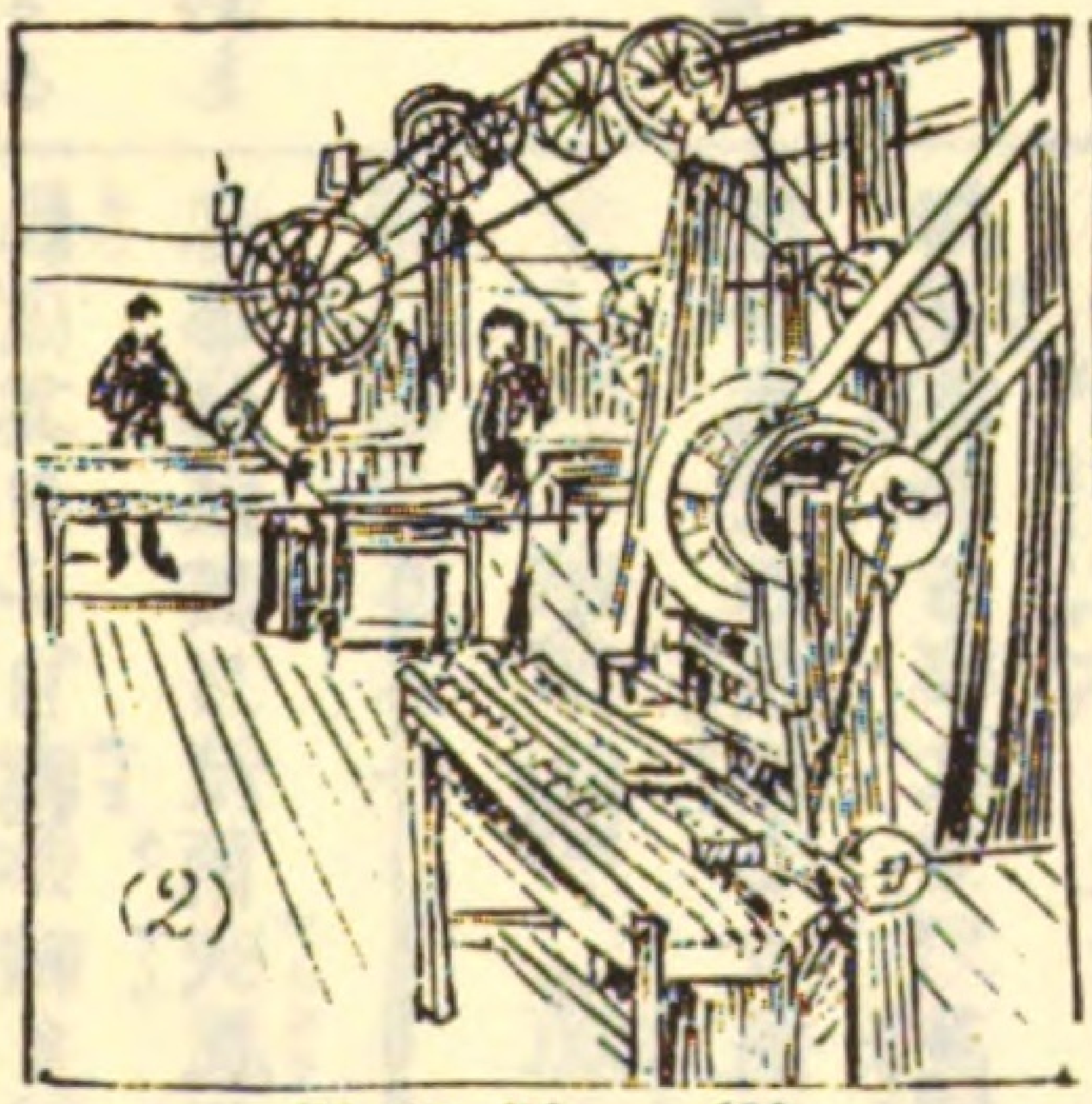
英國の造幣は政府の手にて嚴行せられ、造幣局（Royal Mint）と稱し建築は「トウワー、ヒル」にあり、器械及蒸氣機關はボールトン及びワット式の最精確なるを撰み、多年間世界無双の觀あり、兎に角大英商業國民の希望を滿したりしも、時勢の進行につれ漸次舊式退歩

の姿となり、八方に擴張する大英商業國民の要求に應ずる能はざるより、舊式は新しく且つ効力ある器械に其地位を讓らねばならぬこと丶なれり。

造幣局は「ロンドン」名所の一にして、溶解せる金屬を一ぱい溢えたる大坩堝、純金を滿したる眞紅に熱せる大竈、重き黄色の錠子は煉瓦のやうに積み重ねある有樣は容易に信じられぬほどの大仕掛なり、此金の錠子は展轆(熱鐵等を壓迫して鐵板又は軋條となす器械)の中を通り過ぐれば、一個のソヴエレン(金貨一磅)の厚さに二個のソヴエレンの廣さの「リボン」のやうな長條となりて繰り出ださる丶なり。


(1) 壓搾器


(3) 自動秤器


(2) 切斷器

さてこれより金の長條は厚さと廣さとを精細に成功せしむる種々なる器械を經て其縁にぎざ〳〵をつけるなり、其術は長條をば金貨に切斷すると同時に行はる、切斷器は自働器械にして其重力にて壓迫し、同時に二個づ丶器械の下にある受函に落ちる仕掛なり、丸く切り出したる殘餘の端片は、再び貨幣の原料となりて大竈の内へ投ぜらる、此の切り出されしものこそソヴエレンとして貴重せられ又其價あるものなり、これより其面に壓迫器にて印象を現はし、其縁を磨く、斯の如く順序を經る理由は金貨の

美麗と純粹と重量と價値をつけんか爲なり。

今日の現狀に至るまでには印象をつける方法には數種の方法あり、最初は金貨を平圓板の上に置き槌を以て打ち出したれど、尋いて墮落器を使用し、又輪機と螺旋とを使用せり、ゼームス、ウヲツト式の螺旋器は千八百八十二年迄適用せられれど、此器械は大鐵槌を以て打擊する故機械場は喧囂にして耳聾し魂消ゆるか如き有樣なりき。

併しながら今日の仕掛は打擊の代りに貨幣の兩面より壓搾するがゆゑ場内常に靜なり、而して一秒時間に同時に二個の金貨を得る次第なれば一分間に百二十個を製し得らるゝ計算となるなり、秤量器は凡て自動器械なり。

造幣局は他の器械場とは大いに趣を異にし最も嚴密を要するものなれば、局員は實直にして技術熟練の人物を撰拔せり。

子「人間は猿から來たさうですね
父「さうだ
子「それでは猿はどこから
父「猿……猿は木から來たのだ

文藝

めぐりあひ

湖處子

憂世を離れた山陰に、多くの家畜を牧ひ、豚や羊を朝夕の伴として、淋しいとも思はず、其日を安く獨身暮の老婆が住んで居た。年はとつても老耄もせず、身の糧、家畜の料にと、秣草を刈りに、果實を獲りに、降つても照つても向ひの森に出掛けること、昔しも今も毫しも變つた事がない。

若いものは老い、老いたるものは死、死ねは生れ、生

れては死ぬ、廻轉燈籠の樣に世の人は變はつて行くが、この老婆はかりはいつももとの老婆で、相も變らずこと〳〵と森の中に出かけて行くので、村の人々はあれは魔術婆ではあるまいかと、内々恐を抱いて、老婆の影を見ると逃け隱れるのが常であつた。

秋の空晴れ〳〵と囀る百舌の聲勇ましき霽日、老婆は例日の如く爽快朝風に吹かれながら、草刈に餘念なき折しも背後から、

「お婆さん感心に精が出るね。

と聲かけられて振り顧ひて見れば、風采容態賤しき家系のものとは思はれぬ立派な青年が立つて居た。老婆は曲つた腰を伸べ、少し反身になつて、

「ハイ〳〵毎日恁うやつて草を刈りますが、年齡をとつてはねえ貴方。

と腰を叩く、若者は刈草の太き束と果實の一杯に滿ちたる目籠と老婆とを見比へながら、

「お婆さん之を家まで運ひなさるのかい、大變だなあ、如何だい少し加勢しようか。

「ハヽ〳〵有難う御座ります老齡の悲しさにはこれでも骨が折れましてねえ貴方、一通りや二通りでは御座いませんよ、貴方はお齡も壯し、男でいらつしやるから、それては一つ手傳つていたゞきませうか。」

「いゝとも〳〵、世間ではね、我等を華族〳〵と腰拔の樣に喧しく惡口するが、私も男だ、なあにこれしき造作ありやしない。お婆さん力量試しにさあ擔して呉れ。

習はぬとはしてみたいが人情で、若者は那麼鹽梅か一つ擔いでも見たし、また老婆が可憫相でもあるので、早や乘地になつて云へば、願つてもなきことゝ、老婆はく〳〵喜び、束と籠とを六尺棒の尖端に結び着けて若者の肩に載せてやる。載せられてみれば荷は存外重い、重いところか肩の骨はメリ〳〵ポキンと今にも折

れそうである。

どうです重ふ御坐りますかね、

うゝゝうんにやあ

さあおいでなされ

老婆は平氣でサッサと先に進む

お婆あーさん

ハイ／＼

一寸待つてアイタヽヽ、腹か痛み出した、オ、痛い、もう駄目だこれじやあ到底歩けやしない、お婆さん私やもう止すよ、左樣ならあばよ。

と荷を御さんとするを、さはさせじと老婆手にて支へながら。

虚構を仰やれ、虚構をおつしやれ、そんな迯口上は無益の皮、いゝえもう聞きませんよ、さあ／＼愚圖／＼して居ては日が暮れます、サッサと御いでなされ。

と急きたてるア、情けないことになつて來たと、悔んでも地鞴は踏めず、思ふ存分齒は咬みしめても、徒に臍を噛むはかりで、苦しさは踏みつぶされた蛙の樣に、臓腑も飛び出てんばかりてある。

オ、痛い、あゝ苦しい、もう一足も歩けない、重くて／＼肩か潰えて眼の玉か飛出そうだ、どうかこれで許して呉れ後生だ、お婆さん、

と泣かんはかりに訴へてもなか／＼聞き容れない。詮方かないから足を止むれば、さあおいでと手を引張る、構はず荷を御ふとすれは、どつこいそうはと手で支へる、鬼婆目と罵れはエンサカホイと小躍りして囃したてる。とう／＼引張られ死ぬ樣な思をして家に着いた。家畜は早くも老婆を見認めて馳けて來る、其後から色のすさまじう黒い一個の娘も隨いて來た。

まあお母さん如何なすつて、

といふ聲は玉の樣で、あの醜い顏からどうしてと思は

れる。

どうしたのこうしたのつて大變な騷さお前、このお方か、これを擔いでやるとおつしやるから頼んだところが、途で重いから嫌と仰やるのよ、それをどうかかうか賺して無理にこれまで引張つて來たわけさ。それでも若人には珍らしい親切なお方さわねえたんとお禮を申しな、貴方嘸お疲で御坐いませう、此處が善う御坐います、横にでもなつてゆるりとお休息なされ。

と緑蔭深きところに莚を敷く、若者は頽れる樣に其上に身を倒して初めて生き復つた思ひ、老婆と娘とは家畜を追ひ立てゝ牧場の方へ行つて仕舞た。牧場は一面に青疊を敷いた樣で、其中をキラ／＼と一條の小川が流れて居る。その小川に下りたつて水飲んで居る二三の羊も見える。風そよ／＼と吹く。あゝ好景色だと獨り見蕩ていた眼はそのまゝとろ／＼となつて、疲のせいかぐつすりと寐込んで、老婆に搖り起されるまでは前後不覺であつた。

今日はお蔭さまで、どんなに助かつたか知れませんよ、何かお禮を申し度いので御座いますけれどねえ貴公、山家の事ではあるし、御覧の通りの貧乏で、何一つ差し上げる樣なものは御座いません、幸ひこゝにおもしろい持合の品かありますから、これを貴公に進げまするに、何卒かお持なすつて。

と差し出したはそれは／＼は嘗て見たとも、觸つたともない瑪瑙製の手匣であるから若者は大喜悅、有難の百萬多羅を置土產に喧ましき家畜の聲を聞捨て天女の樣な少女の門口に立つて見送つて居るのも知らないで、老婆の家を出たはよかつたが、道を踏み違へてまた一難義、やう／＼の事で、とある都に出たは野臥し山臥しの苦勞を嘗めた三日の後のことである。固より都といつても知らない土地のことなれば、何方へ行て

よい事やら、更に方角は白壇弓で、的はなけれどぶら〳〵と、足にまかせてゆく目先にこれはとばかり膽の潰るゝ程鴻大な建物は、國柱ふとしきませる君王の行宮である。これ屈强と若者は、直に王に面謁し、例の手匣を献上すれば、傍に御在ありし御妃そを御照覽ありしが俄にハット顏の色を變へ玉ひ、その手匣を取り落し玉ふ。王は奮怒の聲荒らゝに、誰ぞある盜賊なるぞ疾く出で合へと叫び玉ふ、その聲聞きつけて近侍のもの、ドヤ〳〵と駈け來り、茫然と煙に卷れて居る若者を、一二も言はせすぐる〳〵卷に縛りあげて、獄屋に送らんとするを、妃はしばしとおし止め玉ひ、その男には尋問たき仔細あればと縛を解かせ、近侍を退け玉ひ、涙ながらの御述懷、

肌には羅綾をつけ、頭には玳瑁を戴き、酒池肉林の榮華は極むるとも、心に思の種し盡ずば、いかで幸ある身といはるべき。思ひ出づるも涙の種、妾は三人の姫をもちつるか、いづれも賢明こき生れつき、なかにも末の姫は沈魚落雁とも、花羞閉月とも云はん樣なき美しさ、讀み書きの道に疎からぬのみか、よろづのすさびにも拙なからず、殿中の花と讚へられしぞかし。妾は鷺が鶴をは生みし思ひ、可愛さは一倍にて、幾年月手しほの花と、雨にも風にもいたはりしぞかし、さるにあはれその姫はあゝその姫はいまいかに。

忘れもせぬ姫が十五の春、殿は姫一同を一室に呼ひ集へ玉ひ、我身も追々齡は積る、定めなきが、人の身の上、何時いかなるとか起らんにも限らねば、今より其方たちか身の行末を定め置んと思ふなり。其方たち三人は皆この父を愛するならん。さりながら何程までに愛するか、試みに述べて見よ、その言葉一つにて其方たちが運命は定まるぞ、いかに〳〵と促し玉ひしとき、妾はお薩摩芋よりも父上を戀しう

思ひ侍ると云ひしは一の姫、妾は秘藏の衣裝よりも父上を愛しまつるとは二の姫の言葉、そのをり末の姫は、妾が父上を慕ひまつる心はいと〳〵深し何と較へんにも侍らずと云ひつるに、唯それのみにては何とも判きかたし何にか比へてみよとの仰に、いかに妙なる味も其源をなすものは鹽にこそされば妾は其鹽をめづるごとく父上を、と曰はせも果てず不孝ものめと一方ならぬ御不興、汝鹽の如く我を思はゞ、我は鹽よりもなほ辛き目に汝をあはせんとて、二人の姉にはそれ〳〵領地を賜ひ、妹一人を人も通はぬ山中に流罪同樣のお刑罰とは法もあらうに、餘り殘酷い無情きなされ方を詫ても宥めても聞入れ玉はぬ一徹の御氣象、姫が悲しみ妾か嘆はそもいかなりしぞ。其後殿にも後悔し玉ひ、多くの人を遣はして八方に手を分ち、普ねく山中を探ねさせ玉ひしかと一向姫には見當らずその報知、早や虎、狼の餌食となりたるか、哀なることとしてけるよ、これも我身が短慮よりと、殿は齒嚙をなし玉ひ、妾も失望落膽し、今日が今まで涙の乾く隙もなかりしにおん身か捧げしこの品こそ、まがふ方なき姫か愛藏の手匣、もしや手掛りもと思へば、かく呼ひ留めつるなれ、そもこの手匣いかにして得つるぞ。

と言葉急しく問ひ玉ふ。

一部始終を聞き終りし若者は、森の中にて老婆に出會しこと、老婆よりこの手匣を受け取りしこと、其家には老婆と醜き娘よりほかに誰も見えざりしことを具さに陳ずれば、王も妃も頷き玉ひ、何は兎もあれ、其老婆にさへ會なば姫が行方知れぬとはあるまじ、是より其方に案內を賴むぞと、若者を先にたて、微賤しき姿に身を扮し、都を後に、棚びく白雲前にのぞみて、山路深くわけ入り玉ふ。

日は暮れかゝる、家の內は暗くなる、老婆は自分と同

し様に古ぼけた行燈に火を點し、その前に木綿車を持ち出して、蜂の呻る様な音をさすると、戸外の方にもけたたましい聲をして家畜が牧場より歸つて來る、娘はその家畜を栖にいれて老婆と共に夜業を初めた。夜は段々深け渡つて前の森、後の山に梟の聲が寂しく打連る。

時刻はよしと老婆のさしづに娘はつと身を起して家を出ていつた。折しも月は滿月で、空さへ晴れて居るから、其明るいとは針も拾はるゝ程である、今娘は泉の岸に立つた、衣を脱いだ、水は黄金の漣漪をたてゝ流れて居る。娘はその中に身をいれた、およそ一時間あまりを經て娘は再び岸に上つた。

水にいる前の娘と、水を出た今の娘とは、殆んど別人かと思はるゝ程變つて居る。肌は白い。雪の様である。髮は黒い。闇の烏の様である。その黒い髮の毛が、其白い兩の肩先に流れかゝつて居る。其上より月は容赦なく清き光を浴せかけて居る。其美しさは嫦娥の天下りしかと思はれる程である。

娘は月の光に肌膚を乾さんため、芝生の上に横つて悄然にぢッと月をながめて居たが、やがて星の様な眼から涙がはら／＼と濡れた。濡れた其涙は露となつて草葉に宿り月を抱いて居る。

折からかなたの森の中にザワ／＼と怪しき物音が聞えた。娘は獵銃の音を聞いた鳩の様に驚いて跳ね起きた。これと同時に黒雲與つて月を呑んだ。

歸つて之を老婆に語ると老婆は笑いながら。

なあに心配なとも何にもありやしない、それは多分運の神様からお前をお迎の使がお出てなさるのだらうよ。

運のお使つて誰か來るのお母さん、

それは今に解かるよ、何でも玉の御輿でお迎に御出なさるんだとよ。

わらまあ、それ〳〵もう御來なさる刻限だよ足音が聞えて來た。

さて話は王の一行にたちもどつて、かの若者はふとしたまぎれより王に逸れて道に迷ひ、二日の後に本道を尋ね出したが、其時既に日は暮れ行手は暗くなつてくるし、急ば廻れで少しは後れても夜旅にはこり〳〵したから明くるまで木の上を宿として待つて居よう。さすれは狼や虎に食はれる恐れはなしと思案極め、枝の張つて居る木を撰んで登れば劣らじ顔に月は山の上に登る。見るまに世界は眞晝の樣になつた、折から此方をさして來る一個の少女かあるその少女は老婆の家に居た醜い女てあるから若者は驚いた。女が中流に下りたつて、被つて居た假面をとり去り、美しい其顏を月に現はした時は、若者は木から落ちるはかりに打魂消、天の川を渡る織女を下界で見る心地して、暫しは我を忘れて居た。折から凮颯と起つて、月は叢雲に、花の姿は闇の中に消えてあへなき少女の後を、追ゆく道にて王の一行に邂逅た。何より先に今の事を物語れば、それこそ失せし玉に相違なしと、王も妃も天に登らんはかりに躍雀び玉へば、足も地には着かず急き玉ふ程なく老婆が家に着かせ玉ふ。先づ壁の破間よりのぞき玉へば中には老婆ひとり頻りに車を廻して居る、老婆は内にかと訪問ひ玉へば、ハイと答へて門の戸を開き一同を導きいれ。

これは皆樣よくこそ。長い旅路で嘸さあ御疲で御坐いませう。實は今日であらうか、明日であらうかと、貴方がたを毎日待つて居ましたので御坐ますよ。あのお姫樣で御坐いますか、御心配游はすな、其後ねえ貴方、病み煩もなさらすに美しうお生長りで御坐いますよ、今呼び出しますから御對面遊はせ。

と老婆は後に向いて

娘や〳〵あのお迎か見えたから早う出ておいでよ。」
と呼へはハイと玉の様なる聲を先にたて、奥の一間を排して靜肅に立出玉ふ其姿の高尙さ優美しさは紫の雲押わけて天下ります天津天女もかくやと思はるゝはかりである。それと見るより玉、妃、オヽ姫かと駈けよりて、右左より手をとり玉へは、姬君は夢見る心地で、父上か母樣かと嬉し泣、傍に見て居る若者も共に涙に打咽ぶをりから、無事の御對面祝着に存じまするど、呼ふ聲に頭を擧け玉へば、こはいかに、ありし疎屋はいつしか宮殿と變り、老婆は何處に行きしか影だも見えず。下坐の方には百官卿相膝を列ねて平身低頭して居る。

オヤ、オヤ、オヤ、オヤ、オヤ、オーヤ。

虫の聲

四季阿彌

我住む里に近く仙波ヶ原といふあり、原には秋に名ある草の花咲かぬものなく、月見るに好く、虫聞くに好しとは知りながら、月見たるともなく、虫聞きし事もなくて幾秋をか徒爲に過しつ、二度三度親しき友に誘はれたる事もありけんど、無情くもてなしてえゆきもせざりき。去年の今宵なりけり、深く思ひ染めてし人の親の、別莊とやらんを此原の邊に營みたれば、月も露に照り添ふ秋の夜の眺、來て見よかしと薄樣の取手も薫る斗りなるに、筆の運もいとやさしく、藤花樣とやらんの書きざまして、文おこせる其文の内に一枚の色紙を卷きこめたり、彼の人の親の筆と見えて、これも美しく

芋を煮て月待つ庵や虫の聲

と書き捨てたる一句の意に、吾れも心動きて使の男と

共に家を出でつ、仙波の沼の藻の花に船もとゞめず、水底光る逆川の清き流に添ふて急げば、程なく彼の人の家にはつきける、琴の音は門邊をもれて早や彼の人に相見つる心地すなり。昔し小督を嵯峨野の奥に訪ひたりし仲國は、君の御爲め露踏み分け、吾は我戀人の、情にひかれ寄る鹿の、妻慕ふ聲とや人の見ん、よし人は咎めずとも、人に語るな女郎花、さらでもいつか穗に出づる、尾花に風のなみならず、迷ふは狂ふはじめなる。

彼の人も彼の人の親も喜びもてなし、柿、葡萄、梨子、栗など所せきまで持て出しつ、酒も強えられて早くも醉ひたれど、何よりも樂しく嬉しかりしは、人目をさけて吾れにのみゆるせし笑顔なりき。彼の人は虫を捕えてんとて提燈をとりて野に出でぬ、吾れも共に行かんとて坐をば起ちつ、鳴き競ふ虫の聲を慕ひて、彼方此方とさまよひ、楢の林の影に來れり、月は圓かなる清き影を松の梢に研きて、野は廣々とはてしもなかりつれど、踏みゆけば露ばかりなるべし。吾は彼の人に我戀を語りけるに、彼の人は其戀のやがては遂げらるべき由を誓ひぬ。天も地も我物となれり。

去れど樂しき我愛は、此夜にはじまりて此夜に終りぬ、吾れ都に出でゝ一歳を暮しつ、彼の人の重き病に臥せしときゝて急ぎ歸へり、仙波ヶ原の別墅に訪へば、アナ悲し此日彼の人は墓に送り葬られたるなりき、肉體の上よりしも言はゞ、生きて別るゝも死して別るゝもなど愛かるべき、唯彼の人と吾れとの間に契り交はせし戀は如何に。彼の人死して戀は吾れにのみ殘るか、殘るものは戀の如くして戀にあらず、戀より生れたる傷心の思のみ。去れば戀は彼の人失せたるの時、同じく消えはてけるか、如何に考ふるも消えはつべき理由なし、彼の人は此世に樂しき戀を殘すを惜みて、これを此世よりとりはなち奪ひ去り給ひしなり、一度奪ひ

去られたる我戀は、彌勒の世は來るとも、再び吾にかへるべきやうはあらじ、我心は枯れ我思は疲れぬ、梢をはなれし木の葉の如く、油つきたる燈火の如し。

親なる人は涙ながらに在りし昔を語り出でつ、小さき箱の堅く封じて、其上に我名書きたるを取出し、これぞ亡き娘の君に遺せし筐なりといふ。浦島が子の夫れにはあらねど、開けて口惜しき事のみなるべしとは思ひながら、其儘に打捨てんも心強きわざなるべし。とてもかくても見では心も安からねば、急ぎ其封を切り蓋を開くに、小さき紙に下の句を書きたるもの丶みあり、

　虫の音枯れて秋はゆくなり

彼の人の名をば秋となん呼びけり、餘りに其心の哀れなれば、筆をとり上の句をば書き加へて、佛の御前にさゝげぬ、

　草に結ぶ露も霜とやなりならん

其夜終夜ねふりやらず、御燈かゝげ香など焚きくすべて通夜しけるに、去年の今宵に似たる虫の音月の光も、見るに憂く、聞くに憂く、美しかりし草葉の露も、袖せきかねし涙とばかり思はるれ。（完）

鸚鵡娘

桐廼舍桂子

只在る町にいとゆたかに、住める商人ありけり、年に月に積足らはしたる、寶は物とも思はえで命にかへてもと、住吉の神にのりていつきまもれるは、男の子の中にたま〳〵得つる、鷹子とよへるめの子にぞある、此子うまれしよりもの丶けにもかゝらす、すく〳〵と成育てみめかたちのろうたけなるのみか、親を思ふ事せちなるに心ばせもかしこげなれは、知るもしらぬも見る人毎に愛でおへりしを、いかなるまがつみか若紫の昔もかくやと、しのはる丶頃より物いふ事なく、又

絶て笑ふ事もあらねは、二親は態てさま〲に物いはせんとすれと甲斐なく、笑ふべききかきりの物見すれと、何とも思はぬさまなるに打なげきて、天地の神にいのれと露ばかりのしるしもあらねば、かうしはてゝうち過しゝを、兼て鷹子の師とたのみつる、刀自聞知りてあやしと思ひつゝ、ひと口とひしにあはれ、鷹子は聞しにたかけでもぬけの如、師のいゝり來しとて嬉しきおもゝちもなく、眼のみ見はりてついゐたり、師はよきにすかしこしらへて、試みに書開きてをしゆるに、師の聲につれてさはやかに讀出たれは、親は嬉しきにも涙落してけり、やかて讀終て覺えたりやと問へと、ほのかなる反響もなし、されと啞にはならさりけるよと、いたく喜ひていまや後は師のもとに、あつけまつらまくなどひたふるに、たのみ聞ゆるを刀自はなかなかに、おもしろしとてとみにうへなひつゝ、おのかやどりにゐて行て、朝に夕によみかきのわざ敎ゆるに、

物こそいはね、なへての子のおよぶべくもあらねは、末頼母子と思ほえて、何くれと敎ゆるに琴なとも、をかしうかいならせとびとりして歌ふ事もなきより、人皆鷹にはあらす鸚鵡娘よと、いひはやしていとをしむもあり、あなづるもあれと其身はうしとも思はぬを、刀自はかたはらいたくて、あはれはいやましにましぬ、雪のあした雨のゆふへゐ、此子なくは何にかなくさまんと、さへ思へるはいかなるすくせにか、やう〲ねひまさりて、三五の月とも見るへく照り輝に、鸚鵡娘と知る〲、あくかれありくうかれ男さはなる中に、堪へぬ思ひをうちつけに、いひよるもあれはおのかいひし如、聲たかやかにいひかへさるゝに、恥て逃けかくれぬされは、鸚鵡の名と伎藝の勝れたるは、世にかくれもあらねと、聟かね定めんよしもなきを、親も師も歎きゐしに、ある日やんことなき宮よりめされぬ、猶うしろめたけれは三度まで、いなみまつりて過ぬる

にひと夜師の刀自は、月見んとて親しき友がりまかりぬるに、鶺鴒は端居して、庭の七種など打ながめつゝありし折しも、いつうよりか車のひゞきして、門邊に止りぬ、師やかへりたまへるとさすがに、嬉しげにつと立てむかふれば、師にはあらで宮なりけり、あなやとさけびしを宮は耳とく聞しめ志して、さればよ鶺鴒にはあらじいざたまへと、かきいだきて小車に乗せ給ふよと、思ひもあへず行々かへり見れは、住なれ志宿も友とめてし、七種もやゝ見えずなりぬ。

　世の幸のめぐり車に乗つゝも
　こゝろひかるゝ宿の七種

師の刀自は鶺鴒の待わびぬらんと、更ぬ間に歸り來しに火影も見えねば、むねとゞろきてくまなくたつねもとむれど、音もなし親はらからをつどへて、遠近に人はしらすも、さばかりのたよりもなし、いまはとかなしき事ども語らへば、ともに音を鳴まつ虫も、歸らぬ人をこふるにやと、尾花が袖の露ぞ志けかる、とかくして三日ばかりふるに、めづらしき文とゞきぬ、うちよりて開き見れば。

ありしほどは、師の君はしめ親はらからに、もの思はせまつりし罪、おそろしうてなん、さはいへこはかしこくも、住吉の神のをしへにて、ある夜の夢にいまや後物ないひそ、志はしは不孝の子どうとまるゝも、我妹をまもらば末終に、孝の子とたゝへられん、心にひめてもらしぞとくりかへしつゝ、のりたまふをあなたふとしと、をろかみしか、そが後は學びの外、萬夢心地にてなん、をとつる小車のひゞきの耳にいりて、はじめてねぶりさめたる如、昨日けふは思ほえず玉の臺に、かしつかるゝ身となり侍れば、みこゝろやすうてよ、おぼんかた／＼のみめくみいまより、かへしまつらまくなん

師のみもとへ　　　　鷹子

あまねかる恵の露にくちなしの
　かひなき花のいろも匂へり

父母のみもとへ

玉くしけうちわけてこそ二親も
　神の恵をおほし知りけん

おのづからたいめたまはらん日もとて

夫婦の論據

斜眼の婦「貴下の片脚は何時見ても歪んで居ますれ
跛の夫「さうさお前の眼で見る時は

小説

女流記者

金子春夢譯

原著者オリヴ、シユライナル女史（文學の異名ラルフ、アイヨン）は南亞弗利加ケープ、トウンに在り、夫は新聞事業に從事し、女史亦文學の業を執り、理想の高尙、文體の簡潔、筆路の巧妙を以て、夙に歐米の讀書社會に喧傳せらる、其著『夢』及『亞弗非加農夫の話』は少からぬ江湖の喝采を博したるものなり、本題は『夢の世、現の世』と表題せる内「ゼー、ポリシー、イン、フエブアー、テブ、プロテクシヨン」と言へる短篇小説をば、假に便宜のため『女流記者』と名づけたり。

（上）

なにがし女史と呼ばるゝ人にや、室の一隅にある卓子に向ひ、其後には熾に燃ゆる暖爐を控えて、頻りに筆の運に餘念のない折から、召使の一人名刺を手にして其室へ入つて來た。

婦人は回顧みて、

今忙しいので誰にも遇ふことは出來ない、二時迄に

これを仕あげて仕舞はなければならない。

召使は立ち去つたが、又もや入り來て、一分間でも宜しいゆゑ、是非々々お目にかゝりたき由を來客より取り次いだ。

それでは小使を待たして開いて、お客をお通し申せ。

と主婦は卓子から立ち上つて來客を待つて居るに程なく、絹の衣裳を着けて地に引きずるほどの外套をぞろつかせた、瘦肉で丈のすらりと高い、髮の毛の美しい一人の處女がずつと入つて來た。



お忙しい處御迷惑と知りながら、強てお目にかゝりに參りました。

と挨拶をしたので、主婦は

さ、おかけなさい。

と暖爐の側に座をすゝめ。

外套をお脱ぎになつては、室は暖です。

と緩々談話を聽かん心を示せど、處女は何故か上氣て急燥の樣子で、

私は是非貴下にお目にかゝりに參りました、私を助けてくださる人は貴女より外にありません、貴下は他の女にも優しくつて御親切の方だと思ひます。

と言ひつゝ座つた、もう其の大きな青い双眼には泪を一ぱい湛えて、我にもあらず少さな手袋を脱ぎ去つた。

貴下の記者社會で某君（其名を告げた）を御存知でせう、折々お出會でせうが、其人の事で、貴下のお力に預りたうございますよ。

爐側の敷物に居る主婦は若き婦人の方を向いて俯向いて居る。

處女は倘語をついで、

父にも母にも此事ばかりは話しません、其外の人には尚の事、だけれどもまだ御馴染もない貴下へは・・・貴下は御存知か、知りませんが昨年の夏、一月の間私と夫の人と一所に居ました、其間に私は何もかも夫の人の事は知つて仕舞ひました、夫の人が私を愛して居るかそれは知りませんが、私の歌を好いて居ました、そして夫の人と一緒に馬に乗つて遊んだ事もあります・・・私はあんな好な人は外にありませんのに、貴下、世間で男の思ふほど女は思はないといふのは、あれは全く虚です、夫の人は私の心も知らないで、其後はちつとも姿を見せないやうな薄情な人で、二人の事はもう世間で何だとかかんだとか言つて居たに相違ありますまい、貴下は平生御出會でせうから何とか仰しやつていも、又どうとかなすつてはくださいませんか。

と奇麗に白い歯が並んだ唇をした處女は俯向いた。

時によると私は氣がふれはしないかと思ひます、ア、、つまらない、女になるものではありませんね。」

と語をつづけて主婦の方へ眼を寄せ、

今、人に聞きますと、夫の人は外の女を愛して居るさうです、其女は怜悧でそして記者をしてゐるさうですもう私は堪りません。

主婦は先程から火爐蓋に臂を倚りかけて、其手を面にかぶせて煖爐の火に眼をつけて處女の談話を聽いて居たか、靜に若い婦人の方へ向き直つて、

さうです、女になるものではありません。

と言つて一寸詞を止め、何だか言ひ惡くさうに、

貴下は眞から愛して居ますか、貴下は能く誰でも言ひます若い娘が年上の男子に對する普通一遍の感情をもつて居るのではありませんか。

私はもう狂人になつてます、私はそれから幾週間も眠られません。

と處女は少さな手を組んだ、寶石入の指環が指の間で切れはせぬかと思はるゝほど強く。

私には夫の人ばかりです、此世界に外には何にもありません、貴下は心が大きくて強くてそして怜悧です、貴下は御事業に御熱心です、貴下は御仲間の男子に親切でも、貴下が或男子を世界に二人とないと思しめす時の心持は、どんなだかお分りになりますか。

では私はどんな事を貴下にしてあげていゝのか知らん。

處女は主婦を見上げて、

私は知りません、だけれど私が愛して居ることは必らず夫の人へ知らしては不可。

再び見上げて、

ア、、女になるのは本當に辛苦ものです、私は何もすることは出來ません、だが夫の人に私がこんなに苦勞をして居る事を細に話しては厭です、却つて嫌がらるゝ本になります。

さうですか、併し私が貴下の事を話すなら、何もかも明打けねばなりません、夫の人は私の朋友です、隱慝をする譯にはいかない、ついぞこれまで私の事でも隱くした事がありません。

と主婦は立つて暖爐の側を離れて彼方に歩き始めたが、此方へ向き歸り來て、

貴下は結婚をする時に男と女の間にどんな愛があると思つて居ます、毎日々々目張合せて暮らしてさ、虛飾も遠慮もなくなれば、兩方の氣心が眞に分つて來る、貴下は結婚の目的が男と女が一人で居る時よりも強くなることを實際に行ふのですか、それが出來なくても貴下達が老人になつてから火の側で「二人で手に手を執つて一所にくらしたので、一人で居るよりも勇ましく又自由だ」と話し合ふことがあり

ませう、貴下は夫の人と一生添ふ積なら、十分氣をつくるが好い、明日とも言はない、年齢をとるのは早いもの男は年齢をとつて貴下も亦追々老けて衰へて來る、だから貴下は男の作つた罪も弱い所があつても許してやるが宜しい、どんなに貴下が迷惑になることがあつても、たとへば今二十年間も男が病氣で寢込んだならば、貴下は其間阿母さんが赤兒を介抱するやうに、病人を一身に引き受けて介抱が出來ますか。

と問を起して太息をついた。

さうですとも、私はどこまでも夫の人を愛します、若し夫の人が世界の中で私のみと言つてくれたら、私は死んでもようございます。

主婦は立つて處女を見卸した。

貴下は他の女について考へましたか、どうして〳〵どんな女でも貴下には及ばない、貴下ほど旦那になる人を幸福にすることは出來ますまい。

と靜に言つた。

どんな女の方でも私ほどにはありますまい、私は夫の人の爲めに生きて居ます、夫の人は私の物です。」

と前の方へ體をくゞめ、聲は立てないが肩頭を顫はして、

能々女になるのは厭なものです、どんな事があつても何と言ふことも出來ず、どうすることも出來ません。

主婦は手を處女の肩にかけた、若き婦人は年上の婦人の顔を見上げた。

主婦は彼方に向き直つて暖爐の火を見つめて立つた、此時、室內寂寞として僅に書斎の上に時計の刻む音がキチ〳〵と聞ゆる。

たつた一事、私は貴下の爲にしたいことがありますが、それが役に立つ事が……、併し私は必らず致し

ます。
と主婦は向き直つた。
貴下は自分の事ばかり思ふ外の婦人と違つて、貴下は大きい、善い、美しい方だと思ひます、貴下へ十分御禮を申し上げます、私は貴下を十分信じます、こんな事は母にも明しませんでした、たゞ貴下より外には誰にも。
さうですか、併し貴下はもう歸つて頂かなければなりません、私は仕懸けて居る仕事を了はねばなりませんから。
と主婦は歸去を促した。處女は兩腕をくるりと廻し、」
貴下は善いお方です、私は信じます。
と言つて絹の衣裳と毛皮の外套をざやつかせて、室の外へ出て行つた。
獨り殘された主婦は客が歸へつてから額に汗の出るまで、急歩で室内を彼方此方に駈け廻り、やがて漸く卓子に落ち着いた、卓子の上には男の手跡で『今日午後罷出で差支無御座哉』と朦朧に書いた紙片がある、其傍にはもう封緘をした状袋がある。
婦はそれを取り上げて封緘を押し切り『何卒御來駕あれ』と認めたる書面をば縱横に引き裂いて『差支有之お目にかゝり難く候』と書き直した。
書き直した書面を再び封緘をなし、當名を記し終つて呼鐘を鳴らした。



召使は入つて來た、婦は書翰を渡して、
これを小使に渡しておくれ、仕事は急いで居るが、明

日でなくては出來まいと、さうお言ひ。

召使は命令のまゝに出て行つた、婦は諸手を頭頂に組み合はして又もや彼方此方を歩き始めた。

山むぐら

太田玉茗

（七）

健三は女中が妹を呼ぶ時、もう日が暮れる、何してゐなさる、はやくお歸りなさいませぬと、家へは入れぬとおつしやいましたと、おどした言葉に膽をぬかれて、行かねばならぬ歸らねばならぬと、殆ど夢中で十丁ばかりは、前後も見ずに走つて來たが、元の路だか他の路だか、どこがどこだか方向を違へて、見もせぬとこそへ迷ひ入つた。はやく行かねばならぬと思つて、唯やみくもに足を進める。森はます／＼深くなる。山寺の鐘は遠く幽かに、幽かに遠く響いて來た。遠く幽かに又消え行く。塒をもとむる鳥の聲も、松吹く風の音も止むで、夜はしん／＼と更け渡つて來る。健三はひとり途方にくれて、何處ともなく足をすゝめる。落葉の足に音するので、怖れて慄と身ぶるひして、思はず、後ろを振返つた。

其時胸に浮むだのは、現在自分の身の上であつて、自分はどうして此處へ來たらう、どうしてこんな處へ來たらう、車をおいて錢を持つて、主人に隱れて滊車に乘つて、今朝から出たぎり歸らぬのだ、錢はあすこで受取つたので、己のちやなかつた主人のであつた。默つて主人のものを使へば、あゝ盜坊だ／＼、己は盜坊をして來たんだと、遽かに苦しみ悶き初める。

其盜坊といふ言葉や、其行ひは健三に取つて、まことに由々しき大罪である、まことに恐るべき事柄である。

健三は嘗て家にゐた頃、お寺で地獄の繪圖を見たが、

黒鬼赤鬼が鐵棒を揮つて、人を劍の山に追ふ。鉛の熱湯を注ぎ込まれる。舌を拔かれる。釜湯出にされる。臼でつかれる。身を裂かれる。鮮血淋漓と漲つてゐる。人は火の車に乘せられて來る。

其圖を見てより地獄といへば、いつも非常に懼れるので、或日健三が餘所の家から、柿を落して持つて來た時、母は律義な性質故、默つて取るのは盜坊だよ、縱令僅かなものだと言つても、無斷で人のものを取つたり、無斷で人のものを使へば、直樣鬼が迎に來て、あの怖ろしい火の車で、地獄へつれて行くのだから、地獄がこわけりや默つて取るなと、嚴しく誡められた上に、此後そんな事をするなら、家へは入れぬ追ひ出すぞと、散々叱られた事がある、又朋輩の年季小僧が、此夏店の錢を盜むで、番頭に見つかつて非常に打たれて、とう〳〵出された事もある、又或家の店の前で、掏賊が巡査に捕へられて、引かれて行つた事もある。」

其等の恐ろしい一々の記憶が、健三の小さな胸に浮むで、今目の前に明らかに見える。主人や番頭は夜叉の如くに、盜坊〳〵と追つかけてくる、巡査は待てと迫つてくる、鬼は焔々たる火の車を率いて、天地も今や碎けむばかりの、其凄まじい音を立てゝ、唯驀直に進むで來る。健三は茲に進退窮まつて、絶躰絶命の折しもあれ、母の姿が朦朧と見える。お母樣〳〵あやまつておくれよ、もう今度からしないからねえ、お母樣〳〵あやまつておくれよ、お母樣〳〵と縋らうとする。母は健三をはつたと睨むで、不孝者めが愚者めが、もはや御身の母ではないぞ、子ではないぞと袖を拂つて、其まゝ姿は消え失せてしまつた。健三はあたりを狂ひまはつて、岸破とそこに倒れ伏した。

* * * * * *

妹が養家の青梅在では、翌日電報を日本橋へ打つて、健三の行方を田島屋へ尋ねた。けれども行方は不明で

あつて、番頭や小僧はふとひ野郎だ、あんな奴とは思はなかつたが、何處にどうしてけつかるやらと、皆今更に驚いてゐる。かの川越の孝作爺は、非常に驚いて青梅へ行つて、養家の下男と力を合せて、健二を野山に捜索したが、更に捜索の効がなかつた。

其後樵夫の噂に聞けば、此頃秩父の山の奥に、一人の小僧が出没するといふが、年齢の程から容貌まで、健三に異なつたところはない。けれども頗る人を恐れて、人さへ見れば姿だも見せぬ。（おはり）

夏の月（下）　蘆花生

「妾の叔父さんはそれは〳〵好ひ人で、夜食の膳で一盃やりながら、妾が部屋の隅などで飯事でもして居ると、ぢいつと見ながらほろ〳〵涙をこぼしたものですが、叔母は中々勝氣な方で妾も叱られ〳〵しました。

人間は一寸したはづみで善くも惡くもなるもので、叔母なんぞも決して惡人ではなかつたのですが、子供が多ひ處へもつていつて妾が世話をかけるやら、それから人情は妙なものでね妾が兩親ないものですから家の前で鬼子ッこして居ても通りかゝりの者が「お孃さん、よく御遊びなさいますね」とまつ先に妾に愛想を云つて行くので、叔母も何か自分の仕打に不足でも見られる樣に妙に氣を惡くするやら、生憎從姉從妹は痲疹して妾は達者であつたり、小學校でも妾は一番なのに皆は一向出來なかつたり、何やら角やらで叔母も其處はドゥしても生さぬ中の事ですから苦ひ顏も見せれば隨分敵ひたり抓つたりすることもありました。是は人情致し方もない處ですが、する方は兎に角、せられる方は本當に憐れなものでせう。妾も斯樣な事から恐ひ、惡くひ、怨めしい、悲しいと云ふ事を覺へて、僞詐もちつとは言ひ習い、子供にあるまじい物思ひをすること

ともありましたよ。今でも覺へて居ます、從妹が叔母の針箱を破したのを妾の所爲の様にひどく叱られて、父母の墓所に逃げて行ッて、嗚咽あげながら墓を眺めて「おゝ此下にはお父サンやお母サンが御出なさる、妾もはいりたいなあ」と思つたりして、丁度夏の頃ですから、あのソレよく墓場にさくぼんやりした黄ろい、ね、月見草の花を摘んで、それから夕日の黄ろく照りつける草の中に寢ころんで、墓石に映つた槐の影のちら〱〱躍るのを見て、頭の上につく〱ほうし〱と鳴く蟬の音を聞きながら、何時の間にか泣きなりに眠つてしまつて居たので、叔父の方では妾の行衛が知れぬと云つて大騷ぎして、やう〱妾が墓場に寢て居たのを搜し出し、此れは屹度お前が惡い此様な事で姉様や兄様の位配に顏があはされるかと叔父がひどく叔母を叱つた事もありました。併し何と云へても家の實權は女にあるのですから、叔父から一とつやさしく云はれる所では、叔母から十も二十も睨まれると云ふ鹽梅で、私も餘ッ程小供らしい自然な性質を失つてしまひました。決して怨むぢやないのですが、今でも早く兩親に別れた小供でも見ると、吾事の様に身にしみますよ。

其内叔父は果てますし、叔母は如何様な心でしたか廣島の者で人の好くない四十男を後夫にしたので自然緣家親類の間も遠々しくなつてしまつたのですが、世の中には隨分いけないひ人もあるもので、其後夫と云ふ男ドウして叔母を欺したのか、妾を追出して妾が家の身代を取つて仕舞はうと謀つたものですから、亡くなつた母の弟がそれを聞きつけて、其様な奴等に大事な姪を預けぬと非常に立腹して、親類會議を開ひて、到頭妾を引取りました。叔父の內に移つて暫らく立つと、叔父は活計むきの都合で音戸の家をたゝんで東京に引出ることになり、それにつひては妾も共々引出た方が

よからふ、また何百里かけて家藏の世話出來るものでもなければいつその事公債にでも引換へて置いたがよからふと云ふことで、幸い望手があつたものですから妾の本家は家屋敷土藏から道具器械一式揃へて株ぐるみ悉皆其人に讓つて＝父の死後店の事を任して置ひた番頭は叔父と前後に亡くなつて、此頃は店も暫らく休むで居ました＝それから田畑や貸金なにかは親類の手堅ひ者へ賴むで、東京に引き出ましたのが、妾が丁度十五の春でした。

其れから後は一々話せば長いですが、叔父は麹町一丁目の北側に唐物店を出して仕合はせに景氣つきますし、妾も半年近く何か角と家の事に從妹と加勢して居ましたが、叔父も斯様して置いては濟まぬと云つて、妾共をつひ近所の開化女學校へ遣るとになりました。妾も其以前亡くなつた叔父の内に居た頃は、あまり叔母ががみ／＼叱るものですから、つい拗れもすれば曲りも沈みもする様になつて居たのですが、年若な時分は浮標も同然抑へ手がありさへせぬと直ぐぶく／＼浮き立つて來るもので、別して此叔父の内に來てからは叔父叔母從兄妹まで親切に全く家内の者にして呉れたのですから、あたりは珍らしゝ、賑やかだし、妾も最早自分の不孝は打忘れていそ／＼學校へ通つて居ました。其内都珍らしい正月の數も重なつて、上野淺草左程に遠くも思はない様になつて、十九と云ふ年になります。斯う云ふと可笑しい様ですが、妾も其頃は此様な見すぼらしい風はして居ず、毎も髮結に「御孃様は御器量が好くて居らつしやいますから」などゝ萬更御世辭ではなく言はれた事もあつた位で、叔母も叔父も内々妾を此まゝ此家の從兄の嫁にと思い込むで居たらして、まだ妾には明白それと言はなかつたですが、何時か湯の歸りに奥の椽側で「彼の心を聞ひて置ひた方が大丈夫ぢやないか」「なにあなた、不承知なんぞ云

ふものですか、大丈夫ですよ」と叔父叔母の聲を漏れ聞ひた事もありました。此從兄の欽一郎と云ふのは妾に二つまさりで、其頃は軍人になるとか云つて陸軍士官學校に入つて居まして、誠にさつぱりした男で、妾も子供の時分から一處に育つて見れば兄弟の樣に思はれて隔てなくして居たのですが、其處が不思議の世の中で、妾の心は最早其時は他人の有でした。

妾が學校の往き返へり此一年ばかりが間毎日の樣に行き逢ふ人があつたのです。年の頃は二十四五、何時も洋服出立のさつぱりとして、色の白ひ、髯の黒ひ、今から思ふとおほゝゝゝ隨分にやけた人でしたが、其の頃は眼の前にぱうつとした薄霧のかゝる時代ですから、大層立派な方だと思つて居ました。處がね、ほんに小説の樣な御話ですが、靖國神社の祭禮の晩でした、花火を見に行つた歸り道、連にはぐれて獨り御濠際を歸つてきますと、大勢醉つぱらつた奴等に出あつて、連がないと侮つたのか通せぬ路をしたりなんぞするのでせう。妾は恐ひよりも人の眼の前が恥かしくて如何せうかと途方に暮れて居ると、後から洋服着てステツキ持つた方が「あ、お前此處に居たのか、ひどく搜かしたぞ」と云つて、妾を引立てゝずん／＼通りぬけたのです。妾は二度喫驚してフツト其人を見ると、瓦斯燈の明りですぐ分かりました、それ毎日顏見合はす其方なんでせう。あ、御自分の連と思はして其場を救つて下すつたのだと心づひて、ほんに嬉しく思ひました。若い時分は一寸した事でもしみ／＼身に浸みるもので、斯樣な事から一生をだいなしにすることもあり兼ねぬもので、ウツかりしてはなりませんねェ。それから叔父の家まで送つて下すつたのが緣になつて、始終遊びに來るのです。三菱銀行＝其頃はまだ駿河臺にあつたのです＝の社員とやら、中々容子の好い悧巧な如才のない人で、うまく調子をあはせるのですから、田舍氣

質の叔父叔母從妹まで好い方だと云つてよく持てなしたのですが、從兄ばかりは俗物だいけない奴だと嫌がつて、日曜でも顏わはせるとひどく氣分を惡くしました。其内段々近しくなつて、妾の身上も何時の間にか知られて・それからはいよ〳〵以て親しく圓滑に持かけるのですから、何の分別も經驗もなかつた妾の事で、しみ〳〵嬉しく思つて、實は內々叔父叔母の妾を從兄に妻す心算は氣づかなかつたのではないのですが、つひうか〳〵と其人の口車に乘つて、叔父叔母さへ承知致したならと斯う云つてしまつたのです。叔父叔母はひどく失望しました。失望もすれば不快にも思つた樣子でした。併し叔父叔母もまだ妾を欽一郎にと云ふ事は相談かけたこともなかつたのですから、まさかに內の嫁にするから外へは出來ぬとも云ひ兼ねて、好い人達ではあるし、妾も本家の女と云ふに少しは遠慮もあつたので、先方は催促する、妾は不承知でないと云ふ間にはさまつて、到頭ならぬと云ひ兼ねて、不承〳〵に承諾してしまつたのです。先方の身分取しらべるのも實は表むき丈で、早速結納の取かはせも濟む、先方から妾の財產を一應聞きたいと云ふので叔父はつひ妾の名になつて居る公債證書地劵など妾の印形ぐるみ器械的に先方へ渡して了う、と云ふ鹽梅で、妾は何が何やら夢の樣な心地でした。

併し夢の樣な心地の中にも、從兄の欽一郎が右の話を聞ひて默つて一言も云ひはしなかつたのですが恐ろしく顏を蹙めたのがそれは〳〵氣にかゝつて、叔父叔母も妾の爲めにいそ〳〵婚禮の仕度をして吳れるが如何しても浮かぬ顏色で居るのが是れまた氣にかゝつて、何だか叔父叔母や從兄に對して濟まぬ樣な欺した樣な氣咎がして、其所爲でもありますまいが、ひどく頭痛がし出して、婚禮の一週間前と云ふ日からドット床についてしまひました。最初は朝晩に熱が出て、それか

ら身躰中の血が湧ひたり冷へたり、痛ひ樣な掻きむしりたい程痒い樣な心地でしたが、其内顏から手足まで一面に赤みかゝつた紫色のものがぽつ〳〵出來て、醫者に見せると、さあ大變、天然痘だと云のふです。叔父も叔母も大騷ぎして到頭妾を第二醫院に入れることになつて、釣臺にのつた迄は覺へて居ますが、其あとは唯茫として始終蒸風呂の中にでも居る樣な地獄にでも落ちた樣な積りで夢心地に熱い〳〵と思ふばかり一切夢中であつたので、ぱつかり眼を開いて長方形の部屋の中に寢臺に臥て居ることに氣づひて「あゝまだ生きて居た」と思つたのは入院して二週間も立つての事でした。餘程ひどい熱だつたそうで、醫者も望を絕つた位で、幸ひ一命を取りとめたですが、顏容は見る影もなく變つてしまひました。

熱が退ひて正氣づくと直ぐ浮むだのが「結婚」と云ふことゝ、また「此病氣が結婚の邪魔になりはせまいか」と云ふ心配でした。妾の國の親類内に矢張り天然痘をわづらつた者があつたのですが、直つた當座はまるで焰硝怪我でもした樣に顏一面赤黑くなつて、それが段〳〵よくなると、彼處も此處もぽつ〳〵孔が見へ出して、それはもう見られたものではありません。ドウか彼樣にならぬ樣にしたいものだと念つて、可笑しい事ですが、痂一つの剝がない樣に用心して居ました。掛念はしたが實は知らなかつたのですよ、叔父も叔母も默ッて何とも云はず、お醫者も看護婦も何とも云はず、鏡も見せて吳れなければ、妾も何だか鏡を見るのが恐くて、玻璃障子や藥瓶でも見ぬ樣にして居たのですから。

それから退院して叔父の內へ歸つて來ますと、知るべの者が退院の喜びに來ましたが、皆妾の顏を見て笑止な顏をして歸つて行きます。さては自分の顏が變つたに違ひない、それでは結婚も出來なくなつて仕舞はうか、愛想つかされうか、まさか彼の親切な方が結納ま

で濟むで居る妾は少し少し容貌形姿が變つたと云ッて振り棄てはなさるまい、なさるまいと思案しながら、椽側の柱にもたれて桔梗の鉢に蝶の一ッ飛んで居るのを眺めて居ますと、靴音がはつと胸にこたへました。彼人が來たのです。妾が入院して最初二三度はデセールの鉢など持つて見舞に來たそうですが、其後はさつぱり音沙汰なしで、今日退院の知らせをしたから來たのでせう。弗と椽側に立つて居る妾を見て一寸思ひ付かぬ風でしたが、やう〳〵「イヤ、失敬しました」と挨拶するでせう。妾は耻しいと苦しいと心配と一時にこみあげて、かつと上氣して、碌々挨拶も出來ません。先方では一向頓着なしで、何か暫らく浮世話をして、別に何とも云はず、匆々に歸つて行きました。歸つたのは好いですが、歸り際にぢつと妾の顏を見て、眼と唇の何處やらにそれは〳〵冷たい輕蔑すむだ色を見せて、にやりと笑つたのをちらりと認めたのです。妾ははつと思つて、吾部屋に籠つて、襖をしめ切ッて、震ひ〳〵鏡を見た時の心もち！一眼見て「アッ」と吾れながら叫びました。あの位の大病だからよもや無事ではあるまいと思ひは思つたが、此れはまたあんまりな變り樣。菊石と云はうか、柘榴の内皮と云はうか、鼻の尖から顋の下兩耳にかけて唯もう一面の黒痘痕、眼ばかり光つて居て、口は右の方へ釣りつけ、髪はばらり〳〵ぬけて、二タ目と見られた容態ぢやないでせう。妾は突然鏡を庭石に擲きつけて、一晩泣き明かしました。

若い女しかも嫁入際の若い女の器量を落して仕舞ふのは、中々天下取りのナポレオンが島流しされたよりもつらひものですよ。なまじひに御器量好しだの美人だの云はれた丈に、妾も心から口惜しくて、此顏を寸々に切り裂ひて、世の中の女と云ふ女の顏を扯きむしつて、出來ることなら此世界を打壞しても仕舞ひ度く、

二日三日は碌に口もきかないで、部屋に引籠つて居ました。彼人の方からは其切り何の音づれもしません。其方は妾も最早望を絶つて居ました、如何して此顔を下げて厚顔しく嫁にと云はれませうか。併しそれならそれと男らしく言つて來そうなもの、氣の毒と思ふ位の人情はありそうなものと、恨の念は滿ち／＼て居たのです。其内八月の十二日になつて、丁度今夜の樣な涼しひ月夜でした、妾はちつとは氣晴らしにもならうかと、そつと部屋を出て、唯つた一人で九段の公園の方へぶら／＼出かけました。あゝ去年の此處の祭りの歸り途だつた、彼の人の世話になつたのが始まりで、もう結納まで取りかはす段になつて、此樣な事にならうとは、あゝ情けない、と思いながらほろ／＼こぼるゝ涙を袂で拭き／＼櫻の影の眞黒い中を通りぬけて、靖國神社裏手の泉水の側を歩るいて居ると、泉水の向ふ側から突然に忘れもせぬ男の聲で「其樣な事があるものですか」と云ふ聲が聞へたのです。はつと思つて向ふを見ると、今櫻の蔭から月影へ出た浴衣二ッ、右は確かに彼人、左は島田の女でせう。胸を撞き破る樣にうちだす動悸を兩手でしッかと抑へて、わな／＼慄ふ唇を喰ひ切るほど噛みしめて、ぢつと向ふを見つめて居ると、此方は蔭ですから一向氣もつかずに二人いやらしく寄添つて歩いて居ます。男は彼方向ひて居て、顏は見へないですが、何か媚びしなだれた樣な風をして、女は俯き加減に微笑を含むで居る其横顏に月の光がさして凄い程白いのに、眞黒の島田から二すじ三すじおくれ毛のばらりと散りかゝつた風情、此は見覺へのある元園町の酒屋の娘で、一ッ時同じ學校に居た事のあるお藤と云ふ女です。息を詰めて耳をすまして居ると女の聲で「でもあなたはもう結納の取かはせまで爲すつたと云ふぢやありませんか」。「何有、其樣な事は構ひません。彼樣な痘面が如何なるものか。加之此

方から望むだ譯ではなし……」「まあ、あんな事を云つて入らつしやる。妾はちやんと知つて居ますよ。」「何を？」「何をつて、悉皆。」「馬鹿な。」「でも萬一先方から矢釜しく掛合つて來たら如何なさいます？」「何處かへ行つて仕舞ふ分の事さ、君と一處なら……。」

最早先は開かれません。妾はそつと拔足して、社内を出ると、御濠の方を志して一散に駈け出しました。堪忍も辛抱も程があつたもの、淺猿しいと云はうか、情けないと云はうか、此樣な腐れた世の中に生きて居たつて何にならふ、あゝいやだ〳〵、自分もいや、人間もいや、世の中もいや、何もかも搔きむしつて、ぶち壞して、劈いて仕舞いたい、口惜いと一心に思ひつめて、濠の方へ駈けて行くと、瓦斯燈があか〳〵とつひて、納涼に來る人や何か往來が絶へなひものですから、も少し立つて人が居なくなつてと思つて、それから同じ處に立て居ては巡査の眼にでもつひてはならないと氣がついて、番丁のあたりを無暗に歩るきました。何だか茫と夢の樣な中にも、神經は恐ろしく鋭くなつて、國の父母の墓所の光景や、叔父の家や、從兄の顏や、叔母の顏や、學校の事や、病院の樣子や、今の九段の樣子や、鏡に見へた自分の顏や、洋服着た彼人の姿や、自分の葬式の光景や、何もかも一時に走馬燈の廻る樣に浮むで、今歩いて居るのは番丁でもあれば死んた後の樣にも思はれて、眞暗い蔭になつて居る巷路をぼと〳〵歩るひて居ますと、其眞黒ひ中からぱつと光明がさして來ました。それから何やら歌ふ樣な聲も聞へるのです。何の事だか暫らくは一向分からなかつたのですが、餘ッ程立ッて、此は讃美歌を歌ふので、此處は一二度は引張られて來たこともある耶蘇教の會堂だと云ふことが解りました。妾は耶蘇教が大嫌ひで、と云ふのは何も耶蘇教を知つて何處の所が嫌ひと云ふではなく、唯耶蘇と云ふ其名から嫌ひで、蟲が

嫌ひで、嫌だ嫌だと云つてましたが、此時其歌の調子が何だか憐れっぽくもう今夜死ぬると云ふ妾にしみじみ覺へたので、ふつとはいり込んで聞ひて居ますと、其歌は

さまよへる者よ、立ちかへりて、
天ッふるさとの、　父を見よや。

と云ふので、つひ其節の美しいのに聞き惚れて一句一節耳を傾けて居ると、其美しい節に包むだ美しい文句が油の樣に身にしみ渡ッて、何だか母の懐にでも抱かれて其和らかな手に背を撫でられる樣な心地がして、妾は身震ひして顏を押へて泣き出しました。歌は猶つゞいて、やさしい愛の言葉は耳から電氣の樣に全身にしみ渡る、涙は泉の樣に湧く、妾は身も浮く程泣いて涙の下から石か鉛の樣に固まつて居た胸さきは段々にくつろいで、ちつとは心も輕くなつた樣に思はれたのです。それなら嫌ひな祈禱も吾れとはなしに頭が下がれば、説教もよくは分からなかつたのですが、何やら妾の爲ばかり云つて聞かせる樣な心地がして、あゝほんに悪かつた、天道樣が見ていらつしやる、此樣な事で死んでは濟まぬ、妾は不仕合でも妾よりも不仕合せな人があらう、是れから心を入れかへて人間になりませう、と思ふではなく感じて、今夜の事を忘れますまいと心に誓ひました。それから會堂を出た所で、丁度從兄が妾の居ないのを心配して從妹と一所に妾を搜かしに來るのに出あつて、叔父の家に歸つて、此一夜の事を思ふとほんに夢の樣でした。

叔父も叔母もひどく先方の不人情なのを怒ッたですが、其樣な人にはいくら云ッても駄目ですよ。其れ所か、聞き質して見ると、ひどいぢやありませんか、妾が財産はすつかり自分の名義に書き換へてしまつて、叔父が怒つて裁判にかけると談じつけると、此方では正當の手續を踏むで登記も濟むで居るから法廷に爭つ

ても差支はないと云ふのです。從兄の欽一郎は切歯してピストルでも持ち出しそうでしたから、妾はとめて、其樣にお金が欲しひのなら呉れてやりませう、妾一人の身過は何しても出來ることですから、と云つて、公債や地劵なにかは一切呉れてしまい、契約も此方から解ひてやりました。金は大事なもの、諺にも云ふ通り品行の本獨立の基ですが、それも心の取り樣で、百萬圓有つても乞食根性のかぬ者もありますからねヱ。妾は此時に自分の身代殘らず失つたのですが、併し其代りに億萬圓も買ふことの出來ぬ心の悟を授けられました。

併し悟りは一時に開けるもの丶癖はなか〳〵手間取るもので、妾は今の年になつても少し油斷をすると人を羨むだり自分の身の上に倦きたり正直にするのは馬鹿な話で本當は世の中を浮いて暮らすが上分別なのではあるまいかと惑つて見たりすることもないではありません。ほんに耻かしい次第で、其樣な時は何時でも八月十二日の夜の事を思ひ出して、吾れと異見をして居ます。何ですと、あ、其あとの話ですか。叔父叔母は其後か妾をわけて親切にして呉れましたが、二三年内に流行病で前後に果てまして、それから從兄の欽一郎は妾が此樣になつて仕舞たのを是非に妻にと望むだですが、妾も眞實身にしみて嬉しかつたのですけれども、少し考へた所もあつて斷りまして、唯寫眞一枚貰つて置きました。其後從妹は近所に嫁にいつて、從兄も妻子か出來て、叔父の家もすつかり變つてしまひまして、妾もかねての望通り田舍に參る事になり、それから今までも此樣な皆樣の御世話になつて居ます。ヱ、其の男の人は如何なったつて仰有るの？さあ、其人は、其人は何か落ぶれでもして、妾が其人に邂逅つて親切に世話でもしてあげる樣なれば、おほ丶丶小說の樣でせうけれども、本當の事を云へば、其後はさ

つばり便りを聞きません。何處かの會社の社長さんになつて居るかも知れません。從兄の欽一郎は今は陸軍少佐で、東京に居ます。そら此間見せましてせう、裏に龍と鳳凰の彫刻のある古風の鏡、ね、錦の嚢にはいつた、あの鏡は一昨年田庄臺で分取つたものだと云つて欽一郎が送つてよこしたのですよ。（完）

お月様

子「おとつさん、あのお月様には人間が住んでるさうだね

父「うゝ、さうだよ、人間が澤山住んでるだよ

子「それぢやア三日月様の時は人間が一所に寄り集つてさぞ賑だらうね、阿父さん

訪問

跡見花蹊女史

泰西諸國にては巾幗社會に在りて文學、美術、技藝、敎育等の事に一身を委ね、自立獨行の志を貫きて終身渝らざるもの敢て珍らしからず、然れども古來本邦の婦人にして事業のために身を犠牲となし、家庭、夫婦、兒孫の怡樂を捨てゝ、獨り其道を樂むもの甚だ尠し、蓋し男子にても繫累多ければ其事業を爲すに妨なしとせず、況んや軟弱なる婦人の身にして、世帶に拘泥する時は、其道に達すること最も難事とするなり、殊に我邦の如きは女子の敎育及家庭の習慣上より、婦人は必らず其身を他人に委し、夫婦の關係を有し、小兒の母たらざるべからざるやうになりあれば、自立獨行敢て男子の力を假らず、萬難を排し經營の勞を爲すもの眞に稀にして又志を立つるも中途にして節を折るも怪むに足らず。

跡見花蹊女史の如きは、美術及敎育を以て畢生の事業となし、獻身的の精神終に其道に達し、自立獨行の婦人、書畫の名手として今や女史の名は普く江湖に知れ渡れり。

女史は天保十一年大坂西成郡木津村に生る、父は攝齋と呼び女史は其二女たり、名は瀧子、花谿は其雅稱なり、父攝齋已に學問ある人にして且つ敎育に熱心なりしといふ、女史が今日の運命も血統の力其多きに居るを見るべし、幼年より最も書畫を好み、女史三四歲の頃如何に叫號の中なるも書畫を示せば、卒然其泣聲を止めしといふ、以て女史が美術に於て已に先天的の趣味ありしを察すべし。

父は早くも女史が天才なるを看破し、熱心に女史の敎育に從事したり、則ち女史をして大坂中の島なる松蔭後藤春藏（山陽門人）の門へ入らしめて漢籍を修めしめ、畫を大坂天王寺の禪僧楚山（應擧高弟來章の門人）に就きて學ばしめしが、十四五歲の頃には繪畫に於ては早くも一家を成し、女史の芳名を傳聞し四方より來り其揮毫を乞ふもの、日々の如くなりしといふ、當時の畫幅、今尙坂地附近に殘りあるを見るに、今日の進步に比しても、容易に侮るべからざるものあり。

女史十八歲、去つて京都に行き潛龍宮原謙藏（山陽門人）に書を習ひ、又漢籍を研鑽せり、女史は早熟を慮るほど聰明怜悧にして而も書畫の技能に長したりしも謹嚴身を處して素養を廢せず、拮据勉勵毫も油斷する處なかりき、時恰も維新前に際し、國内は鼎の沸くが如く騷擾を極め、尊王攘夷の徒京都に集り、最も物騷を極めたり、女史は三條家其他勤王黨の貴紳に識認せられ、一種の主義を以て其家門に出入したりしかば、當時の志士木戸孝允氏等と交友最も深く纎弱の身を提げて貴紳の間を往來し、國事のために焦心盡力する處尠からざりき。

女史は國事を憂慮し之が爲に其熱誠を盡せしと雖も、女史が天職たる美術は、片時も其身邊を離れず、三十歲前後國家多事多難の日も筆を執つて丹青を凝せり。」

女史の畫風は四條派（應擧派）に屬し、寫生を以て精神

となす、後年文人畫を學びたりしも、淡雅なる山水畫や精巧なる花鳥の寫生畫に數籌を輸す、女史最も花鳥草木等天然の微細を描くに妙を得たり、自家の工夫を加



跡見花蹊女史

えし文人畫は蓋し其下にあり。

繪畫のみならず、書及詩文に堪能なり、書は山陽の流派に屬し筆意筆力到底巾幗者流の物にあらず、詩文亦愛誦に堪ゆるもの尠からず。

女史は書畫の技能を取り除き、其人物としても人の師表たるに足れり、當今の巾幗社會書畫に於ては其匹儔なきにあらず、然れども妙齢の頃より氣節あり、確信ある點に至りては優に有髯男子をして後へに瞠若たらしむるものあり、女史幼より山陽賴氏に私淑する處あり、後藤、宮原等山陽の系統に屬する先達より、薫陶誘掖せられしを以て、自然に賴氏の理想に感化せられ、慷慨氣節の人となり、女流の身がてら國事を以て自づから任ずるに至りぬ。

女史は當今の文人、書家、畫家が大抵幇間者流に屬し毫も氣節なきを厭ひ、女史の門は彼等の出入なく、又曾て女史が京都に在りし時、九條家の夫人、女史に贄を執りしも、嚴に師弟の禮を以て待遇し、且つ九條家は當時佐幕の傾ありしかば、女史一回も其門に足を蹈みし事なかりき、以て女史の心事を窺ふべし。

女史が始めて東京神田仲猿樂町に女學校を開設したりしは明治八年にして、同廿年校舍を現今の地に起したり、女史が女子敎育の主旨は我邦淑女の令德を養成し、且つ日常必要なる學藝を授くるにあり、其學藝も本邦婦人に適切なるを撰び、繁にして粗ならんよりは、寧ろ簡にして精ならん事を務め、材に因り、力を度り以て其才器を成就せしむるにありといふ、故に敎育の方法は單簡なれども規律整然たり、又敎育の精神は保守的なれど嚴粛にして主義一徹せり、國學、漢學、數學、習字の外に繪畫、裁縫、琴、點茶、挿花等の諸科あれど、之を職業とし女史自身の如く自立獨行の基礎とせよとにはあらず、たゞ婦人の心得としたるまでなり、何となれば婦人の獨居は其事業をば貫徹するには便宜なれども、人生に於ける不自然の甚しきものなれば、女史は己が經歷せし物を人に施すを欲せざればなり、女史は校長の任を帶び且つ日々自づから敎授の勞を執れり、其薰陶を受くるもの閑院宮妃智惠子殿下（花堤）を始め知名の淑女數多あり。

女史已に耳順に近きも身心二つながら勇健なり、女史の容貌や雄偉にして敢爲の風あり、人と接するに寡言にして決して冗長の辯を爲さず、然も溫容婦人の美德を損せず、邸宅は小石川柳町跡見女學校構内幽靜閑雅の境にあり、壯大ならざるも蕭洒たる日本造、女史が彩筆を捨てゝ、天鵞絨の如き庭前の安樂椅子に横り一日の勞を慰むる時、四五羽の家鴨水を出でゝ池の塘を逍遙す。

獲物

數日間遊獵に出かけし夫が歸宅せし時、

妻「あなた、何ぞ獲物がありましたか

夫「獲物か、己といふ大きな獲物があつたよ

家政

病人と牛乳

牛乳は病人唯一の食物にして、人躰に滋養あることこれに越すもの無けれど、亦た此の大切なる注意を忽諸にする時は、良藥却つて毒となるの危險あり、されば英國「ローヤル、ソサイチー」會員ヂヨセフ、リスター氏は牛乳に就き次の大事をいへり。

余は唯だ一度出會たるのみなるが、牛乳の内に黴菌の浮遊するを見たることあり、その數は非常なるものにして漸次に繁殖するが如し。

と、これを聞いては實に慄然たらざるべからず、故に記者は牛乳保存につきて最も肝要なる三個の規則を述ぶべし、(第一)牛乳は必ず沸騰し置くべし、其故は到底自家に牝牛を飼育する能はざれば、次々に要求し能はざればなり、(第二)牛乳は病室内に入れ置くべからず、(第三)牛乳は如何なる場所に置くも決して露出になすべからず。

牛乳は不潔物を吸收するの力非常に强ければ、風通し悪き戸棚や又は毒瓦斯の蒸騰する暗渠の近所へは假にも置くべからず、若しかゝる事あらば速刻使用に適せざるやうになるべし。

故に牛乳は火力を加へて煮立たし置くを最も安全とす、一度び沸騰したらば決して腐敗するの憂なし、殊に夏日に於ては尚更速かに沸かすを善とす、牛乳六合二勺の中に重炭酸曹達一小匕の割合を以て混入し置く時は大抵腐敗を豫防して、腐敗の徴候なる酸氣を帯ぶるに至らず、倘ほ之に鹽の一小匕を入れ措きても善し、牛乳の香氣には少しも關係せず。

然れども病氣の性質と醫者の命令によりて牛乳を與へて悪きこともあり、斯の如きは或る一部の重病患者のみ

にして、先づ大抵の病人にては牛乳を以て充分に養ひ得らるゝなり。

病人の食物には牛乳を程よく用ゆるが最も肝要にして且又利益あることなれど、さりとて之を餘り不注意に用ゆるときは却て害を釀すことあり、總じて牛の乳といふものは其儘消化せずして、胃腑内に入りても容易に液汁とならず永く滯ることあり、乳の性質として醋の氣に觸るゝときは凝結して堅くなる、されば弱き胃腑内に入りたる牛乳が胃液の酸氣に觸れて凝結をなす時は容易に消化せず、今これを實驗し見んと思はゞ、先づ茶碗一杯に牛乳を盛り、それに醋を一茶匕加へて沸かすべし、然る時は何とも變化無く純粹のまゝに見ゆれど、間も無く石灰膏の粒々に似たる凝結物を發見するなるべし、此の試驗によりて牛乳の性質成分も略了解し、生乳は胃中に入りて害をなすことをも併せて知りたるならん、されど今度は大麥水（大麥を煎じ詰めたる液）の同量を牛乳に混ぜて、前の樣に沸かす時は、決して凝結躰を見ることと無し。

故に牛乳を病人に供給ふ前に、何時も忘れずして、大麥水か曹達水又は石灰水（石灰水は現今重に礦水の類を沸騰せしむる時に使用す）を混ぜて少しく稀薄になし置くを善とす、此の法は牛乳の滋養分を減じ去るが如くに思はるれど、斯く爲し置けば、譬へその成分に於ては稀薄となるも、却て容易に消化さるれば、牛乳の消化惡きを用ふるより遙に人躰を益する點に於て相違あり、佛國著名の博士チャメン、シー氏は牛乳につきて又た、

胃臟の働きが衰へる時は牛乳の消化頗る惡くなるのみならず、胃臟内に牛乳の凝結物を生じ、終には其の機關を害し滋養分の如きは少しも殘さゞるに至ること數々あり。

といへり、病氣のときは胃臟の働き必ず衰ふるものな

れば斯く云へりしなり。

以上の事實よりして熱病患者には大抵牛乳を用ゐざれど、そは例外のことにして、牛乳が病人に最も價値ある飲料且つ藥料なることは、諸種の滋養分を含有せるを以ても明亮なり、看病人は又た單に飲料として牛乳を病人に與ふるよりも、尙外に善き仕方のあるを知らざる可からず、卽ちソープ、カスタード(乳と卵と混ぜて炊きたるもの)、砂糖菓子等に造りて與ふる時は、コツプの縁より啜るより遙かに喫べ善くも有れば、消化も早きなり。

依て容易に牛乳を以て調へ得らるゝもの數種を次に記さん。

牛乳粥

牛乳一斤の中に燕麥をテーブル匕二杯程入れて能く混ぜ合せ、次に錫製の漉器より鍋の中に漉出し、其を火に掛けて屢々攪廻し、牛乳の濃くなりたる頃を見計ひて鹽を少し加ふべし、それより十五分間も能く煮立たして幾度も攪きまはすべし、粉の分量により濃くも薄くも隨意に造り得らる、病人の好みにより鹽の代に砂糖を用ゆるも差支なし、又た之に乳酪を少し加ふれば尙ほ旨味を持つべし。

カスタード

先づ牛乳に善く味を付けて瓶へ注ぎ置き、次に鍋半分程に湯を沸かし、その中に前の瓶を差し入れ、牛乳の暖まりたる頃を見て、三個の雞卵の黄身を解き、之を靜かに牛乳に注ぎ入れ、瓶の底より絶えず内部の乳を振り動かし、濃く成りたらば直ちに鍋より取り出だし而して稍暫くする時は牛乳は凝結して固くなるべし、こは又た冷やして凝結さすれば尙ほ濃くなれど、冷熱何れの仕方を用るても差支へ無し、鷄卵と乳酪を澤山入れる程旨味も殖え滋養分も増すなり。

エグノグ

一個の鷄卵を白身と黄身とに解き分け、別々の器に盛りて能く攪き廻はし、砂糖一匕を先づ白身の方に加へて、その上に黄身を注ぎ入れ、又た密柑の汁一匕を加へ、而して其を牛乳一合の中に混ぜて用ゆべし。

コ ユ ル ド ミ ル ク

牛乳二合五勺を取りて少しく煖め、鹽を加へ、酢を二匕(大形)程混ぜて能く攪き廻し、稍冷えたる時薄布を以て漉上げて水分を去り、之に砂糖と乳酪を合して食すべし。

牛 乳 と 雞 卵

牛乳二合五勺へ卵の白身二個を入れ、それに鹽を少し加へ、瓶に注ぎ入れて固く栓をなし、五分間程振りて能く牛乳と白身の混ざりたる後食すべし。

葛 湯

葛粉一匕を(小形)牛乳一匕(大形)にて解きたる後、之を沸騰せる牛乳一合三勺の中に注ぎ、五分間火に掛けて絶えず攪廻し、かたまりとならぬ様、焼付ぬやうに注意し、よく煮上りたる後、砂糖一茶匕と鹽少しを加へて與ふべし。

温 飩 粉 湯

温飩粉を一匕(大形)を牛乳にて解き、牛乳二合五勺を沸騰せしめて、其の中に入れ、半時間も煮詰めたらば鹽半小匕加へて漉し上ぐべし(こは赤痢に最も良し)。

赤痢病に就て

黒田侚寛

赤痢は有機性病毒によりて發するものにして好んで大腸に根據す就中直腸及びS字部、左右結腸、彎曲盲腸部を侵す本病は流行病或は地方病となりて來る所の傳染病なり。

温帶地方にありては立秋の頃に多く發して冬期には消滅す併しその勢猖獗なるときは寒中と雖も之を見る

ことあり本病は悪寒の時に頓に發するものなり即ち晝間炎熱焼くが如く所謂甑中に坐する如きとも云ふべくしてその夜に至り非常に寒冷なる時に發するとあり。

本病は一種特異の病毒に關する流行性傳染病にして緒方博士は糞便中に一種の「バチルス」を發見して之を赤痢バチルスと名け又たレッシ氏は赤痢アメーバを以てその原因となすその他學者の說ありて未だ一定せず。

「コレラバチルス」の如く劇烈なるものにあらずと雖もその患者の數は遙に多し。

赤痢病毒の生活機は「コレラ」病毒の如く短命のものにあらず故に或る時には一地方に病毒數年間存することとあり府下南多摩郡に一の豪農あり昨年赤痢患者あり當年又々該病發生す一家五人枕を並べて死に就きたりこれは記者目擊せしなりこれを見るも昨年充分消毒せざりしによりこの災に罹りしや明かなり。

病毒は直接に傳染することとなし赤痢病毒を含むものは腸の排泄物にしてそのもの便處又は塵介豬等の如き不潔部に來る時は著しく發育增加し大氣中に飛散し傳染するものなり。

病毒の媒介は空氣及び水は勿論なれど土地にも關す即ち泥沼地及び不潔の地に住するものにより又衰弱したるもの例へば感冒食傷下痢飲食物不良等より原因す。

本病の症候は前兆期あることあり下痢兼て身躰倦怠食慾缺乏及び寒戰反覆頭痛が前驅症となり二三日を經て下痢劇しくなり躰温は通例甚しからずと雖も脉搏速硬し皮膚乾燥す輕症にては脉搏高まるも皮膚は温を增すことなし常に結腸部に多少の疼痛を現はしこの部を壓するときは觸痛を覺ゆ下痢は一日二乃至六回にして大便は稀薄なれども尙硬質を有す二三日の後に一日十乃至二十回甚しきは六十回に至るものあり通常便ある毎に肛門窘迫して痛みを覺ゆその便は混血膠にして粘液に血液を混淆せるが如しと雖もその內に多量の蛋白質

ゝ、を含むその反應は「アルカリ」性にして炭酸「アンモニア」を含む。

便の色によりて白色赤痢赤色赤痢の名を下すあり。

本病は朝間鎭靜し夜間增勢すること六日乃至八日間にして全快するものあり或は惡性コレラの如く迅速に死するあり非常なる重症なるは脉搏沈み細小頻數となり聲音大に衰弱し眼窩くぼみ舌面に黑色を呈し失神して痴なるかの如くなり、肛門の周圍にある筋即ち肛門括約筋が麻痺して便通とまり遂に心臟麻痺により死に至るなり。

記者該病を研究せんと欲し七月十七日學友某と東京を出發し神奈川縣下特に中郡愛甲郡津久井郡を視察し八月十日府下に來り三多摩郡に來りし時に當地には勢猖獗一家枕を並べ慘又慘中旬故園稻城に來る一人の患者ありとのこと之を見るに赤痢にあらず單にあつさあたりなりし故に日ならずして全快せり併し四隣盡く流行地なり今にして之を未發に防がざれば一大事と思を焦す幸ひにも記者の眞友にして藥劑師あり當時盛に麻布飯倉町に調劑舗を營む之を菊地調布堂と云ふ同鄕人なり同氏に贊助を得んと之を議せしに氏は大贊成即日藥劑を稻城に送ることゝす。

八月二十三日飯田町一番滊車にて稻城役場に至り村會議員に通知を托す二十四日午前七時より十二時まで寄贈にかゝる藥劑を施すによりおみき德利ぐらいのものを持參し來る云々同日未明より役場の門前市をなし老若男女手に御酒德利やら烟德利正宗のあき瓶やら種々の瓶を携へ來り巡査は制御の任に當り人民を制す六時半より記者は配劑の準備をなす八時頃には瓶は列をなす數百本。

各自一オンスづゝ配劑なすに麥酒四合入の瓶等を持來るには困みたり如此瓶持ち來りたるものには預備の瓶に入れて與へたり預備の瓶六百本十一時頃に出しきれ

たり。
人民には充分衛生豫防の事施藥服用法等を丁寧に話し十二時を以て終へ一時森圓三大河原千代吉二君は撮影の勞をとられたり。

稻城村は戸數六百以上ありて山間僻地にして一人の名醫否普通醫さへなし隣村に一人の老先生あれど之れに診察を乞ふを好まずそれに一人の患者なきは幸と云ふべし。

ある處に腸胃加答兒と赤痢とを全一視するものありとかや腸胃加答兒と赤痢とは鑑別し得べし腸胃加答兒は大に熱發し赤痢は通例熱發することなしもし熱發するも高度ならず腸胃加答兒には赤痢の特異下痢を有せず又排泄物は赤痢の如く温血膠にあらず又診斷に熟達せる名醫は便臭にて判定す大便撿査によれば腸加答兒又は「コレラ」も鑑別する容易なり。

吾人は徒らに赤痢の發生を俟ちて始めて之に應するの手段を講ずるより之を未發に防ぐこそ急務なれこの目的を達するに記者の實驗により注意を加へん。

第一に身躰を健全に保てば如何に猖獗なる赤痢とてその虚に乘ずるを得んや身躰の諸力を平均に保ちて以て健康を保持せんが爲めには種々の必要なる件あり次に之を擧げんとす。

(其一)便處を清潔にすべし　便所の清潔なるか否なによりその家婦の勉不勉を卜すべしその家婦よく家を治むるものなれば奴婢に命じて能く掃除萬端行屆くべし。

時節柄最も便所に注意すべし便所は日々能く掃除し草履は麻裏の如きを可となす掃除をなすに奴婢は雑巾にてなすを厭ふなれば棒のさきに雑巾をつけて間接的掃除をなすを命ずべし。

又手拭は必ず清潔なるを用ひよ奴婢をして度々洗濯せしめよ勿論手洗水は度々新きものと汲換さすべし。

便所の臭氣を止めんとするには石灰をまくか草の青葉若くは石炭酸を容れたる瓶を便所の隅若くは棚にをくべし余の親戚に一種の仕掛のあるあり、これは「ブリキ」にて烟突の如き狀になし漏斗狀をなし、これにて臭氣をあつめて空中に飛散せしむる法なり別に手數を要することにあらざれば之の裝置をなすも亦可ならんか。

客來ありその人吐瀉下痢を便處にてなすことあれば、必ず石炭酸五十倍位のものを便所へ撒くべし、然らざるときは萬一傳染病毒あるときは一家不慮の災にかゝることあればなり、時節柄注意を加へられよ今や東京市中にも赤痢患者の蔓延の兆あればなり。

(其二)飲食物　不消化物を食ふべからず必す一度煮沸したるものを食ふべしそれとても腹八分にとれ然らざれば腸胃加答兒となるさすれば知らず〳〵に本病に罹ることなきにしもあらず牛乳雞卵ソープ大麥煎等の如き流動性滋養物をとれ牛乳とても必ず一旦煮沸したるを飲用せよ記者府下南多摩郡八王子在に至る時に牛乳を飲みし爲め下痢せる云々の話あり、これ全くその妻君が牛乳なるものは夏でも冬でもそのまゝにてのみて可なりと信したるより、この災に罹りしなり注意あれ又水は必ず飲むべからず、もし止を得ざれば一旦煮沸したるものを用ひよこれとても長時間を經過したるものはよろしからず、記者の實驗によるにこの事は隨分困難ならん尤も中等以上の生活をとるものには容易ならん、先づ日中農耕して歸り湯をわかして飲むとは至難故に如此場合には稀鹽酸の如き價の廉なるものを水中に投すれば水中の「バチルス」は死す故に夏時はこの藥を準備しをくを便なりとすこの藥は石炭酸に投するときはその效力を增加するものなり。

(其三)土地家屋　土地は高爽にして乾燥清淨なるを可とす卑濕汚穢の地は避くべし。

病毒は不潔汚穢の場所に繁殖す故に溝渠塵芥溜並便所の周圍常に濕氣の多き床下庭園等の如きはよく掃除し石灰を撒布すべし。

大氣の流通をして充分ならしめよ室内大氣に含有する炭酸量は1‰即ち千分の一を以て極度となす之を超ゆれは健康に害あり室内大氣の交換は一時間三回より多きを得す然らされは氣流の劇なるため寒冒に罹るべしこれか原因となり他病を起すことあり注意あれ。

室内は能く掃除し清潔になして家の周圍は勿論庭園等に塵芥をくべからず又洗濯したる水は必すよく流し去る樣になせ、又下等社界に至るも小兒の大便等を猥りに流すものあり如此ことは必すなすべからず。

(其四)注意一束　非常に該病を恐るゝ時は病を釀す一原因をなすその他人民頑固にして無益の賣藥を信し醫の診察を乞はずこれより一層頑迷なるは救護を不靈の木石に祈り晝夜眠らず夜間も厭はず百萬遍をなし却て病となるものあり記者の視察地にも盛に行はるゝ處ありき多くは老人なり故に却て之を忠告すれば反動力を與ふるに過ぎず之れらは大に策略盡きぬ故に唯晝間丈にて止めよ位の說諭にすぎず。

又醫師拙劣にして治術その機を失ひ或は疾病を隱匿するあり故に醫は撰ぶべし。

船舶貨物は能く病毒を輸送す故に貨幣書狀も傳染の虞あり故に府下玉川在の奚疑塾にては「スプレー」を以て書狀等來れば必ず消毒す之に反しそれより少しく隔たる處に一の塾あり流行地より書狀來りこれが爲め一家不慮の死をなせしとか又本病は男子に多しと配偶の有無は毫も關係なし。

自家攝生の充分なるを要す醫師看護人は主として患者に近接するを以て感染し易きも比較的少なきを見るも知るべし又消毒の完全なるを要す。

降雨後は患者を增發することあり何となれば土地を濕

潤し病毒を助くればなり。
午前に多くして午後に少し何となれば午前には著く温度低下せるを以て寒冒腸加答兒等身體の異常を起し發病の媒介をなせばなり。
兒童を河堀等に游泳せしむべからず。
家内に下痢せしものあるときは直ちに石灰乳とて生石灰一分を水九分に溶解したるものを以て消毒して醫師の診斷を受くるを要す。
病者附近の「バチルレン」を飲食物に傳付することあるが故に飲食物は蓋を以て被ひ卷烟草その他飲食器に注意すべし本邦にては殊に蠅に意を用ゆべし。
如何に酷熱とても夜間必ず「フラチル」にて腹部をまくか又は寢衣を弛まざる樣に注意に注意を加へ帶をしめて睡に就くを要す。

下痢患者

此頃甚だ不時候を極め市内俄に患者増加したるが、下痢患者隨分多し、下痢と言へば時節柄甚だ物騷なれど、下痢必らずしも赤痢、虎列剌、腸窒扶斯等に限らず、感冒又は飲食物の不攝生より來る(腸カタル)もの多し、其下痢物は稀薄水樣或は軟泥樣の糞便を下すなり、かゝる時は驚くに及ばず、腹部を「フランチル」などにて卷き温め、下肢も成るべく温暖に保つべし、患者は熱も發せず又氣分左程惡くなくとも、躰動歩行を禁し、床中に安臥せしむるを得策とす、油斷をすれば慢性ともなり或は他に變症するやも知るべからず、食物は微温の粥、粥汁、乳玉子(カスター)、牛乳等を用ゆべし、固形物は禁ずべし、芥子湯、鹽湯の半身浴差支なし。

氷

氷は中川某が維新後に貯藏するを發明せしとかや我國

に於ては暑中一時の熱を除る爲めに用ゆれども西洋にては物を凝結するに用ふるのみ。

氷は衛生上水に優る、元來氷とても水なれど水か氷となるには結晶すその結晶物即ち氷の內には「バクテリア」なる恐るへく忌むへきものは生存せざれど水は如何に清潔と信ずるも煮沸せざるものにては「バクテリア」の生存するものなり、ある學者の實撿によれは氷結するときを見るに「バクテリア」生存す併し一週日氷中にあれは必す死すと云ふ、さすれば氷水は衛生上害なし、されど東京市中は勿論何れの地に至るも氷水には砂糖水を混和すこの砂糖水こそ注意せざれば不可なり、何となれば砂糖水には往々「バクテリア」繁殖すればなり、故に俗に雪の花と稱へて砂糖水を加へずして三盆砂糖を加ふものはやゝ可なり、然れども非常に熱して、忍耐する能はざる如き時は必す飲むべからす先づ團扇なり扇子なりにて身躰を冷かになし汗の流れを乾かして後飲むへし、飲むとて多く用ゆる勿れ、量をすごすときは胃病となるは必常なり、のみならず目下赤痢病は神奈川縣下に蔓延し府下にても多摩郡一般流行の兆ありて夫々豫防をなしつゝあり記者七月中旬よりその地方を漫遊して現場を見たりこの病の起る種々の原因あれども飲食不節制特に水又氷等を多量に用ゆるによるもの多し。

氷は天然と人造とあれど天然のもの函館新潟神奈川榛名赤城六甲山不二山の甲州側等なり。

人造に作るには種々あれど其理は凡て同じ、水は氷點以下に冷却すれば氷結すさすれば膨脹し比重を減ず即ち同じく水なるに氷は水より輕くなる故に水中に投ずれば氷は浮び上るべし、依て製氷するには清水をして氷點以下に冷却すれば可なり、それには「アンモニア」液の外、亞硫酸曹達「エーテル」等を使用す普通「カアレー」氏製氷器を用ゆ。

そはAなる堅牢の鐵製器に濃厚なる「アンモニア」溶液を充たしCなる鐵管の媒介によりBなる器と連繫す、その中央にはEなる室あり之れに氷結せしむべき水を筒に容れこのEの處に挿入す今A部を熱し、Bの器を冷水中に投し冷却すれば「アンモニア」瓦斯はAより飛散しBに至り濃縮し液となる、茲に於てAの水を以て冷却し始めてEに製せんとする水筒を挿入す、然るときはB內にて濃縮したる「アンモニア」は忽ち散し再びAの水中に溶解す如此「アンモニア」液の飛散により温熱をBよりとるを以て水は忽ち氷結するなり。

肥滿症

肥滿症に就きては前號に交詢欄の質問に答へたりしが倘聽き得たる譚を記せば獨逸の醫師スウエンゲルといふ人あり、嘗てビスマーク公の肥滿症を治療して功を奏せしより、其の名聲頓に伯林に震ひ婦人の來りて治を乞ふ者啻に門前市を爲すと評すべきのみならず、隨ひて其の收得の多きこと實に他の醫師をして妬心を發せしむるに至れり、氏の處方は其の患者に與ふる所は每一日一回一盞の珈琲湯の砂糖又は牛乳をも混和せざるものを以てするの外麥酒其の他の酒類の如きは全く禁じて與へず、又湯水の類も一切之を飲むを許さず、而して若渇を感じて其の苦に堪へざる者あれば菓物即檸檬橙子等の液汁に一食匕の水を和し、以て之に與ふるのみ、實に斯の如く少量の飲液を以て能く人類の生命を保全するの奇異なるに驚くべし又倘女性患者等の豫其の絕飲の苦に堪へざるべきを期し之を氏に訴ふるあれば、氏は好し然らば貴孃は是到底肥滿を療するに意なきの人なりと云ひて、之を謝絕せりといふ、蓋獨逸人は概皆肥滿の質ありて殊に婦人の如き其の齡已に十三歲を超ゆれば則直に肥肉の人と爲る思ふに其の飲料を貪るの風習ある者之が原因を成せるにあら

さるなからんや、其然り梨園弟子の輩の如きも亦猶此の風習の外に免る丶こと能はざるを以てか、女優の現に伯林に在る者にして方に舞臺に登らんとするに臨み先氷塊の砕片を包める衣を着て全身を痲痺せしむること大約一時間而して後膂力ある下婢二人に命じ布を以て緊く其の四體を壓抑せしめ強ひて纖指柳腰の態を扮出するありといふ。

肉の使用

肉は何れのものにても屠殺せし時は硬固なれども、時を經て食すれば柔軟にして、美味となる、何となれば肉中に肉糖なるものあり、これが肉乳酸と云ふものになり、肉中の「グリコーゲン」は糖に化し、その糖も乳酸に化し軟化せし故なり、又肉は細かになせば消化液がしみこみやすし、從て消化の時間速かなり故に大片よりも小片を可とす。

煮肉、蒸肉及び炙肉は生肉に比すれば消化し易し、併し熱を加ふる久しき時は却て消化し難し滋養の功最も多きを要するには大肉を脂肪内に於て炙燒し或は沸騰湯に沈入して、その表面に急劇に強熱を加ふべし、彼の「ビフステキ」の上等製を見ても知るべし。

純鹽酸三立方「センチメートル」を水一千立方「センチメートル」に混じたるもの丶内に細かにきりたる肉を投じ、能く攪亂して數時間の後しぼれば、肉液を得これは胃腸の病に用ひて可なり、この肉液は一種の消化液なり。

生肉は漫りに食する勿れ、往々旋毛蟲、包蟲等あり又豚肉には絛蟲の生活することあり、尤も我國の豚はさほどならざれども生地によりては非常に繁殖するものなり。

肉類の消化時間

烹たる臓腑（雜物と稱するもの）	一時間
生鷄卵	一時三十分間
同（烹又は油煎）	三時三十分間
烹たる雛肉	一時三十分間
同（油煎）	二時四十五分間
仔羊燒肉	二時三十分間
燒或は烹たる七面鳥肉	二時三十分間
燒或は烹たる牛肉及羊肉	三時三十分間
同油煎肉	四時間
同鹽肉	四時十五分間
燒豚肉	五時十五分間

家庭敎育と植物

恕讖

予は甞、家庭の敎育上、飼物の必要なる所以を陳べたり、家庭の飼物、即、犬、猫、鷄、金魚、鶯、松虫、鈴虫等が日夕小供の知覺を刺撃して自然的開發の効あるは勿論、人類に最、緊要なる慈善心を發達せしむる上に、少なからざる利益ある所以を說きたり、爰に又、家庭の敎育上、庭園の植物が、子供に如何なる効力あるかを述べんと欲す、兒を持てる父母達は、子供の知覺品性發達の上に、植物が與ふる利益の大なるを知りて、自然的敎育の等閑に附すべからざる所以を知り給へ、天然は眞の敎育者なりとの語、深く味ひて益々意味ある言たるを知るに足る可し。

曉を破つて白、紅、紫、艶を競ふ牽牛花、池沼に拍掌の音を發して芳薰鼻を撲つの蓮花は、兒童を導きて早起を促すの好材料たらしむべく、黄、紅、白、紫、紺、褐色の菊花壇に妍を爭ふは、兒童に色彩の種別を敎ふるに足り、山吹の花のみ咲きて、實なきは、以て人世の戒鑑として、指敎するに足り、松柏の四季操を改めざるは、

士人の心あるを例ふるに足り、其他四季庭前に咲き揃ふ美辦麗蕋一として兒童の心目を嬉ばしめざるはなし、兒童が無意に心目を樂ましむる間に於て、此天然の材料を捕へ來つて、子供の知覺品性を陶冶するは、家庭に於ける父母たるもの丶責任なり、別言せば各家に於ける庭前の植物は、兒童が色彩の區別を爲すに足るの眼力を發達せしむるに足り、香臭を嗅ぎ分くるに足るの嗅官を練習せしむるに足り、且は菊花の霜に傲り、松竹の嚴冬色を變へざる、梅花の氷雪を經て美花を開く等、精神的教養の材料たらしむに足る等、庭前の植物を假り來りて、兒童教育の材料と爲すを得べく、家庭教育の好教具として、知覺品性を啓發する事を得べし、こは唯植物に付きて其一例を示せしのみなれども、父母たるものが精思詳慮せば、最愛の無邪氣なる兒童を教育するに充分なる趣味を以て、快樂喜語のうちに、知らず識らず、完全なる家庭教育を施すとを得べきなり、日々庭前を掃除して清淨にするは、兒童に清潔の習慣を作るに足り、漫りに花木を亂折せしめざるは、我慢强き子供の習癖を挫くに足る等、庭前及び庭前の植物が、日々兒童の遊戲場として、運動場として、父母の教へ次第によりては、立派なる幼稚園たらしむべく、面白き子供學校たらしむべし、家庭教育と庭前の植物との干係、豈等閑に附して可ならんや。

何も内職

婦人とても徒手にして遊び居るは人生の義務に缺けたるものなれば、貴賤共に閑ある人は必らず内職を勸めねばならぬ事は每度奬勵する所なるが、內職は一日に五錢より十錢に過ぎず、差したる用もなきに下婢を置いて一圓以上の給銀を拂ふよりも、一家の妻女たるもの、臺所より掃除の事まで自づから爲さば、內職をせずとも、家に忠實なるは同じ理なり、下婢を置かねば

ならぬ多用の家は知らぬこと、外見又は妻女の安樂のために下婢を置くは無益の事なり、宜しく廢すべし、物價騰貴の今日猶此必要あるべし。

秋茄子

秋茄子は一口茄子とも言ひ茄子の終期にて糠漬も旨けれど唐煮に最も好適す、其料理法は茄子を皮のまゝ頭より縦に庖刀目を細に入れ、酒にて一旦煎こぼし、味淋と醤油にて旨煮にす、又甘煮の仕方は鹽押しの茄子を、能く鹽を煮出し、砂糖ばかりにてよく煮つめるなり、茄子飯は傷なく性よき茄子を炭火にて焼き、水に入れて皮を去り、細に裂きて碗に入れ、其上へ飯を盛り、清汁に好みの香料をかけて食すべし、小茄子の丸煮は秋茄子のへたを去り丸のまゝ茹でゝあくを抜き酒と醤油にてちと鹹加減として鰹節を入れ汁なきやうに煮あぐべし。

衣類の貯藏

長持の底に鼠の巣を拵え、箪笥の抽出に黴を生ぜしむるが如きは、その不注意言語同断なり、既に一通りの箪笥あり長持あり押入れありて、其上に之に納むべき幾襲の衣服ある以上は、衣類の仕舞ひ方即ち貯藏の方法につき、一家の主婦たるものゝ委しく研究し置くの責任を有す、記者は茲にそが貯藏の方法に關して最も大切なる事項を述べ、以て少しく婦人の注意を促す、即ち（第一）毎年二度づゝは必ず土用乾と寒乾とをなすべき事、（第二）衣類は毎月兩三回疊み直すの必要ある事、（第三）着物の疊み目には綿を挾み置くべき事、（第四）箪笥の内には虫除を施さゞる可からざる事等。

（第一）土用乾の必要なるは世間既に之を知る然共未だ寒乾に至りては其有益なるを知らざるもの多く、之を行もの馘に少なし、暑中土用の風に當てゝ大氣に曝す

は、能く濕氣を除きて虫喰みの害を防ぐが故なり、然れども土用乾を行ひたるのみにては、決して滿足すべからず、尙又寒中の冷氣に當てゝ充分に乾燥せしむべし、是れ又た濕氣と汚氣を取り除くの効用あると共に、土用乾の殘餘、及び其の以後發生の食衣虫といへども皆な悉く驅逐し終る可し、されば如何に狡猾奸獰なる半風子の一族といへども生を此世に貪る能はざるに至る、故に少位の手數を要するも、每年土用乾と寒乾の二つは忘るべからず。

(第二)土用乾をなしたる上に、寒乾までなさばそれにて手入には遺憾無き樣なれど、尙ほ充分とはいへず、一ヶ月に二三廻箪笥又は長持より貯藏の衣類を取り出だし、之を疊み直すの面倒を經ざるべからず、こは實に馬鹿〳〵しきとの樣なれど能く其理由を察する時は、二個の大なる特功あり、一は其の折々の空氣を吸はせて箪笥内の蒸氣を散ずると、一は疊み直す每に幾らか折り目を違え行くべければ、永く一所のみ壓搾するより起る、折れ切れ又は仕舞ひ磨れ等の憂を來たすことなし、かるが故に特に大切なる晴衣等の爲には、是非とも疊み直しの面倒を見て置くを得策とす、然れども之を行ふには好き天氣を撰むが肝要なり、曇天、雨天、殊に霧模樣なぞの日には、却て衣類に濕氣を與ふるやうなるものなれば、かゝるは成可く外氣に觸れぬ樣心掛けて仕舞ひ置くべし、この事は木綿物にても、毛織物にても、皆な同樣なれば、決して疊の上に直接に廣げ置きたり、又たは衣紋竹に掛け置きたりなすべからず、濕氣は織物類に大毒にして遂には黴を生やし食衣虫を釀す等の事屢々あればなり。

(第三)着物の折れ切れを防ぐには、前の方法を行ひて疊み直す時に、尙又た新しく柔かき木綿を着物の疊み目の間に挾みおくを良とす、此の道理は解り切つたことにて別段說明するの難事にあらねば、唯だ世の貯藏

家に對しこれが實行を庶幾ひ置くといふのみ。

（第四）以上の方法を實行すると共に尙ほ必要を感ずるは簞笥及び長持内に豫め蟲除を爲し置く方法なり、されどこは別に六ヶ敷ことなく既に汎く行はれつゝある香料（樟腦の如き）を衣類の中に添え置くことなれば、今更改めて喋々するに及ばねど、その香料を用ゐるにつきての注意を少しく述べざれば佛造つて魂入れざると一般なり、絹物に樟腦を用ゆるは甚だ惡るし、其の故は樟腦は餘りに香氣の性質激烈に過ぐれば、却つて衣服の質を痛めその色合を變色せしむる恐れあれば、樟腦の代りに麝香か（これも强過ぎては不可）丁子を用ゆるを最も安全の方法とす、然れども毛織物又は毛皮類に至りては樟腦を第一とす、次に最も利目ある方法として近來多く行はるゝは、松の靑葉を取り、それを水一升に炭酸曹達四合を溶解したる鍋の中に入れて沸騰せしめ、よく煮え立ち泡立つ頃を見て、その汁を適宜の器に移し、而してそれを平に振かけ置く仕方なり此の法は一度に澤山のものを貯藏し置くには最も便利なる仕方にて、それが爲め惡臭を帶び又は地質を痛むる等の憂少しも無しといへば、貯藏に心を煩はすもの速かに實行して可なり。

近着紹介

◎女子消息文のはやし　松岡之正氏編纂　神田通新石町同文館

初に女子消息文變遷、文章、書方を敍説し、慶賀、寄贈、請待、誘引、依賴、借用、催促、慰問、見舞、謝禮、返却、報知、哀傷の部門に分ちて作例を網羅す、文躰雅にして高尙に過ぎず俗言を挿入して卑ならずよく折衷し得て女子消息の好模範たり、蓋し近來此種の好著なるを信じて女性諸子に推薦す（頁數二百七十價四十錢）

◎手風琴獨奏案内　小林氏郎氏編　神田通新石町同文館

俗曲洋曲清樂軍歌唱歌の新しく妙なるを撰び總曲數一百餘を譜し使用法音調に就きて說明せり秋の夜月白く風清き處手風琴を把て靜に是等の譜を奏せば興必ず深からん（價二十五錢）

◎藥業雜誌　神戸元町通五丁目精々藥舘

藥業社會の機關たる雜誌は諡し多からずとせざれど、此誌號を重ぬる七十六今回更らに刷新改良し社說、學說、藥物彙說、製法新說、資料、史傳、餘譚、說林、時報、官報、統計、商況等凡そ醫學に關することは漏らさず蒐集せるところその重なる特色なるべし（毎月一回六錢）

それは跛

「先生私の小兒を診て戴きたうございます
「どうかしたのかい
「何だか一方の足が短いやうです、どういふもんでせう
「さうか、私は其兒は跛だと思ふよ

寄書百珍

健康策

溜町　曉醉生

生は原京都の產にして廿歲の時までは至極多病の質なれば一日時の府立病院長半井國手の診察を乞ひしに國手云はるゝには性質虛弱なる軀格にあらざれども皮膚の柔弱なる爲兎角感冒に罹り亦は惡熱マラリヤ等に感じ易きなれば平常別に投藥の要なきも四時とも朝夜起臥の際井戸端にて五七釣瓶の水を浴せば至極好良なれども永き月日の間には實際面倒極る事なれば簡易法にては冷水にて手拭をしぼり腰部以上を十分皮膚の赤くなる程拭ひ時々精肉を食用に供すれば牛乳などを飲用するに勝る萬々にて身軀の健康を保證すと依て以來三年前說の水浴法を行ひ其後今日に至るまで十四年春夏

秋は云ふもまてなく霜雪肌を斬る如き冬の朝も寒風身を刺す如き厳夜も一日と雖ども怠る事なき十七年の結果は至極壯健なる事を得て國手の至言を謝するの餘り貴社健康策の一端に供す。

附言 衣服は寒暑とも可成大差なきを主となし極寒の際と雖も木綿肌着（右は朝夜身を清拭の爲シャツにては脫着不自由なれば）股引足袋襦袢綿入袷羽織に限る極暑中と雖も日々外出の際は木綿縮み肌着股引足袋單物を着し歸宅すれば直に清水にて身躰を拭ひ可成温湯にて洗足す爲に暑中足部のだるきなどの患は更になし。

新潟縣 上田義雄

滋養物を食ひ新鮮なる空氣を吸ひ適宜の運動をなすとは所謂生理學上の健康策なるべけれども實際人の境遇により全く之を實行し得べき人と實行し得べからざる人があります故に實際の境遇から云ひまするなら此滋養物新鮮空氣適宜運動も不愉快なる心を以てなすならば却て有害となりましやうそれよりは以上の三ヶ方法に非の字を冠せしむるも寧ろ愉快にして人の境遇に處し至誠其人の本分を盡すこそ萬全の健康策と存じます。

私は餘り極端に自分の田地へ水を引くか知れませんが私共實際精密に生理學的の健康策を實行し能はぬ境遇にをりまして隨分勞働に由り大食もなし過度の運動もなし新鮮ならざる空氣も呼吸して居りますけれども幸に全智全能なる神を信憑すると云ふ愉快がありますから萬事神様が能き様になし下さるゝと思へばいつも健康の様に思ひます私は献心的に神を信じてより未だ曾て五日間も引續きて病床に伏せしとはありませぬ（これは餘り私の慾目か知れませんが私の事實です）故に私は家内一仝此方針を執りたいと思ひます實際人の

健康策は能く食ひ能く遊び能く眠り能く働き而して心に一の確信を抱ていつも愉快に隠れたるに見玉ふ神の御前に善とせられん事をなしつゝあるとです。

西播　矢野仙雄

(一)早起(二)早眠(三)運動(四)飲食節制。
是れ余が多年實行しつゝあるもの何れの家如何なる人にても此の外には健康策あるまじ。

三重縣　世古英太郎

余は毎朝早起して東白の頃迄近隣を散歩し新鮮の空氣を呼吸して何んとなく精神の爽快なるを喜ぶ而して朝飯は日出前に了るなり。
一日の仕事は一定に勞動をなし身體に適度ならんこととを勉む漫に勞動をなし疲勞の爲めに挫折すべきことは成さず。
食事は三度共空腹に忍びず急いで喫飯にかゝるが如きを常とす又美食は經濟上出來ず一週の中肉食は一度位にして其他は野菜を用ゆ腹加減最と心地よし。
衣服は總じて薄着を好む夕は食後必らず沐浴をなす時間は短少なり一日の疲勞を休む暫時庭園など逍遙して早目に寢に就く。
余は又常に米舂をなすこれは實に身體に活氣を與へ益あると思ふ又精神不快のときは野外に出でゝ親愛なる山水に臨み悠々漫歩するも大いに心神を轉じ胸襟の濶大になるを覺ゆ。
余は大概斯くの如くにして甚だしく病魔の襲ふを不知なり是亦余が健康策なるべき乎。

安房鴨川　安鉢生

生の健康策一應御吹聽申上度候生は健康策として精神的を信ずるものに有之候健康は心身の健全を意味する

ものにして倘ほ解剖すれは身の健全も心の左右する所に有之候得は心の保養こそ第一に有之候去れば心の保養と云へば随分喧敷ことに有之候得共日常心の持方に有之候扨て心の持方は如何と云ふに心に寸毫も弛みなく毎日の業務は「ピン／＼」として輕快に働き日々の責任を完ふするとに有之候斯くすれば何時も安心にして清良なる精神頭腦に宿りて煩悩するともなく胸痛するともなく世渡りの進行は容易と相成りて其間に身躰の榮養は自然に相取れ申候多くの病氣は精神の生殺しより起るとは誰人も是認する所と被存候不時の流行病に罹かるを防ぐも其の通りに有之候其の流行する時に妄りに恐れ自ら病に取付かれたる心地するが故に終に氣受けて眞實となるものに有之候之れは實例に徴して度々あるとに有之候畢竟するに醫術或は一般の衛生法等に據る健康策は是れ倘ほ末なるものにして心理的の健康策こそ古今將來に於ける唯一なる根本のものと思料致候不備

愛知　紅香生

健康策要は良く日課を修め良く休息し規則正しく睡眠し規律正しく飲食せよ運動を充分にすべきは勿論たるべし朝は早く起き新鮮の空氣を多く吸へ夜は餘り長起すべからず食事は可成的種々の物を食せ又月に一兩回大食せよ然らざれば胃の縮小するを奈何せん猶屢々堅き物少量を食せ常に柔軟なるもののみ食するときは遂に消化力薄弱に流るゝを奈何せん衣服は可成的穢れざるを要す。

備後　SH生

朝早く一定の時間に起き上り直ちに盥嗽を爲し意氣の爽快なるに乗し凡そ拾町斗り距たゝりたる佛閣に散歩し曉色融々なるの間四方の好景を眺め亦鬱蒼なる樹木

中に逍遙する三十分間歸りて裸躰となり井戸端にて冷水を浴する事數番然る後朝飯の代りに牛乳二合を食す而して終日精神を勉めて愉快ならしめ商事に從ひ隙あるも決して横着に流れぬ樣注意し午後三時より如何なる事あるも野外運動を爲し一日塵埃を以て穢されたる心を慰め車馬喧囂の外聞く事を得ざるの耳を美しき小鳥の音樂に洗ひ欲滴の綠色に目を嬉ばしめ愉快に適宜に散歩したる後四時半頃必ず歸宅す宵は一家團欒し和氣靄然の間種々の談話を爲し必ず十時寢に就く。

是ぞ予が二三年以來實行する健康策にして之が爲め病身なりし身躰も近時大に健康に全く別人の如く肉付き病魔の爲め苦しめられし事無くいと壯健に暮し居るなり。

次號第百九號の寄書百珍問題は引續き左の如し

『健康策』

如何なる家、如何なる人にても日常經驗せらるゝ健康策あるべし。

毎家には男子、女子、老人、小兒等各々實行せらるゝ健康策あるべし。

健康策を學理的に講究するには他に道あり、されば茲に發表して世を益せんと欲するものは、諸君が實行せらるゝ健康策の方法と結果なり。

博愛同情の諸君從來の如く陸續寄書の勞を執られん事を望む、此問題は世人を便益すること多からんと信じ、特に之を撰ぶ。

社交一斑

流行の栞

流行の革鞄

流行子

近來一般に流行する手提革鞄は舶來形のトロンク製なれど、普通に携帯者の多きは絨緞又は革製のものにて、大きさ一尺前後のもの第一位を占む、形ちには丸形、叺形、都形、大和形等數種あれど、就中都形非常に賞美さるゝ傾きなり、都形に次ぎて流行するは、染皮、魯西亞革、及び鰐革の四方待にて大きさ七八寸のもの巾幗社會に勢力を有す、又た大和形にて、革製、ブラシ地、繻珍地等の如きも可なりに持て囃さる、今夏海水浴場にて見受けたる避暑客の旅行用革鞄には、絨緞又は茶ヅック製にて大きさ二尺四五寸の合財革鞄が第一の多數を占めたり、此の合財革鞄といふは、体裁もよく携帯にも便利なればかくは流行を來たすに至りしなり、之に次ぎて旅行客に珍重さるゝは染革製の叺形なりき、其他抱え革鞄は美濃紙二ツ折の大きさにて、四ツか二ツに疊め、而して錠前の二ヶ所に付きたるもの、銀行員、會社員の類に專ら流行す、次に抱え革鞄の小形にて、大きさ大抵七八寸位のもの、革地は染茶かロシヤ革にて十圓札を四ツ折にせず其まゝ横に差入るゝを得る如く造りたるもの紙入代用となりて近來頻に流行すれど金貨本位實施の曉に至れば如何になり行くものにや。

雜　録

近時小說に於ける女性

不二行者

近日見る所の小說重に女性を主人公とするもの頗る多し。思ふに社會の思想が一般に沈滯すると共に、風俗好尙は浮華に流れ、人々自ら壯大よりも寧ろ優美を好み、豪宕よりも寧ろ温柔を愛するの傾向あり、隨て小說の作意に於けるも、槪して陽を離れて陰に向ひ、描く所また優美温柔なる女性の上に傾きたるもの乎。所謂心理的描寫の健强なる思想の上に少くして、優柔なる情感の上に多きは此に因る乎。元より一槪にかくは斷定し難しと雖も、多くの因由の中に此一事もまた必ず含まれあることは疑ふべからず。さらば女性に關する小說多きが故に、女性に讀まるべきものまた多き乎

といふに、甚だ然らず。描く所の女性、下層社會の人物多く、匹婦敗德の消息若くは空漠なる運命に弄せらるゝ婦人の慘酷なる身生なり、假令多少心理的描寫の精神を發揮して人情の極微を穿つ所少からざるものあるにせよ、一般家庭の讀物としては、甚だ適當ならざるものゝみ。例せば近日の鷗外漁史の「そめちがへ」は浮氣藝妓の心事を描き、柳浪の「靑大將」は娼妓あがりの女を寫し（假令姑嫁の衝突を寫せりとするも讀者に供する所は心理的消息に在て家庭上の事にあらず）桂月の「片袖」は娼妓の運命に了るの女子を描き、靑軒の「眞情」は藝妓の意氣を寫す。要するに寫す所、罪惡過失に因緣するの心作用にして、罪惡過失以上の悔悟反省の如き美性を寫さず、勢、墮落、醜汚、同感を損ずべき悲慘、美象を消すべき殘酷に傾くに至る。之を美文として論定するは別問題に屬し、家庭に於ける讀物として視るときは、價値甚だ少きのみならず、寧ろ排斥非難すべきもの多しとす。

村井弦齋の作は此點に於ては、他の作家に超越して家庭に入り閨閤に及ぼして娛樂に供し談柄に供しさては反省に供するを得、一般社會に普及する所、子の作が書肆の歡遇を受くるは之が爲なり。されど吾人は眞正に美文上の價値あるものにして、同時に家庭の讀物として價値あるものを得むことを期望せざるを得ず。假し悲慘にもあれ假し殘酷にもあれ、縱令匹婦にもあれ狹斜にもあれ、まことによく人生運命の全局を具有して描きたるものならば、之を家庭に推薦するを躊躇せざるなり。されど今日のところにては、到底之を望むべからず、今日の小說家の描く所は、唯人生運命の局部に止まる。故に悲慘殘酷を描きたるものは、唯悲慘殘酷の現象直に讀者の胸を擊ち、匹婦匹夫を描き狹斜閨房を寫せるものは、また唯狹斜閨閤の現象徒に讀者の懷を動かすのみ、之に依て人生運命の見解に資し

衷心の感興に供すべきものは蓋し鮮し。

吾人は夫間に於て、女性に推薦すべき小說二篇を得たり。一を幸田露伴の「新羽衣物語」とし、他を半井桃水の「夏蟲」とす、前者は某烟草店の景物とせん爲の需に應じて稿せるもの、後者は文藝倶樂部第三卷第十一篇に收む。華族の若殿が一農家の女と相戀うの始終を語れるものを新羽衣とし、同じく華族の令孃が許嫁の夫を去て同族の輕薄兒に誑らかされ之と戀に落ちて墮落せる生涯を描せるものを「夏蟲」とす。吾人は今既讀者の煩を顧みず、二篇の梗概を記して、所見を述べるも、强ちの業にはあらざるべし。

伯爵鶴園重嘉とて向島の邊に邸かまへたる人の長子に重春といふ今樣姿に業平の生れきしかと見ゆる美男子あり。文學美術を好み、和洋の二道とも良師につきて學ばせられ、專門家すら及び難き節もあるほどの才能にも、心飽かず寫眞の術を好まれ、家扶の子與二郎を伴つて折々の散策、或冬の朝玉川あたり尾山といふ村に、老親一人子一人の賤の女お瀧の家を恰好の撮影塲と認めて訪れたり。お瀧は如何なる娘ぞ、

農家の娘なれば姿をつくろはねも却々に見苦しからず……髮の天生黑く美しきに、市の女の香好き油とろ〱と塗りて濡れ色作れるには優りて見え、……鶯袖とはこれか、脇縫ひふさげたる穿き袖の紺の衣の加之處々に綻にやあらん、白きものつきたるを被て、幅濶からぬ帶をきりゝと締めたるに、すらりとしたる身幹のいよ〱見好く、これより肉付くべき勢ある身の艶、研ぎ磨きての故にはあらで何處となくおつとりと麗はしく、眼の冴え、唇の色これはまた忘られまじく好し。

母はやく死して父は末吉勘六とて尾山村に生れ、尾山村に人となり尾山村に老いたる正直漢、邪推深きものにも善き人と許されたる佛性、娘のお瀧がかせぎに餓えず凍えずすむを此上なしの滿足に思ひ、娘幸なれと念ずる外には何の念もたず。親子の家に波風もなく雲霧もなき境界、貧しけれど餓えず、樂しき家庭なり。お瀧は農事の外には傭はれては裁縫の賃仕事、他人の米預つて精げてやる、水車の見廻り、綿繰り、糸

抽き、錢嵩になる三葉の萌つくるなど、抜目無く働きて、日々の仕業に無事平穩の生活なりしが、重春に寫眞とられしが縁となりて、物語など聞きたるより、その無邪氣なる性質に一の思ひを加へたり。

時は枳殻にも花をつけさせ、月日は巣の鳥をも天に翔けらしむるもの、幾春秋を過ごし來し貧しきが中にも、漸々女めかしうなりたるお瀧、……羞かしき思ひし其時の刹那の情を思ひの種子に忘れ得ぬ異しき心地を得たり。

重春に分れてより重春を思ふともなく思ふ心は、お瀧の擧止を支配しけるが、日を經て其人の訪ひ來しときは嬉しと走り迎ふべきに然はなくて斯くと見るよりも紡車其處に抛下し倒して、けたゝましく納戸に逃げ入り、自らも後にては何とて彼樣にはせしぞと其意を解き難く思ふやうに、その擧止はや戀の囚となれり。かくて後重春の來り訪ふこと頻なるに、忽ち新聞に根無草まで傳へられ父伯爵の怒、祖母貞松院の訓戒に禁足にひとしき重春の數日訪はざる其間に、正直淡の拗六は死しぬ、親一人子一人の間にての死別なれば、歎きも一と入深く、野邊の送り事なくすみて、日を經れば心の張もなくなりて、悲みは薄くなりたれど、何を爲んといふ心は更に無く、花を摘み水を供ふる外には、椽端に坐りて雲の行方に懶き思を寄するのみ、思ふとにも無く蜘蛛手に想ひ出づれば悲しさに涙ばかり、望も乏しく樂みも無く空しく生命あるまゝに活き居る甲斐もなし、かゝる境涯なるに加へて松下といへる小人あり親切顏にうるさく問ひ來てお瀧の心を獲んとす。氣も腐り心も盡きて、羽翼あらば雲に翔け去りたしと成らぬ思を湧かすにも、あはれ彼の君の來も仕たまはゞと思ふも甲斐なし、彼の君はお瀧が友とまで云ひ得べき際の方にはあらぬに。

戀に感應あり、情に會通あり、重春の思もまた同じうして一睡の夢に逢ひ見しお瀧の事捨て難く、一日馬に騎して竟に尾山を訪ひぬ。清き流水に清き兩個の姿を

映しつゝ相語り、お瀧の薄命と困厄とを聞きて、愛憐胸に滿ちて歸り來り、人知れず思ふ心いやましけるに、お瀧は一封の書を重春の手に送り來りぬ。文中に曰く、

おてんとう様が、井戸のそこをお照しなされ候ことは少いやうに、いやしく生れたものがうれしい思をするとは叶はぬものとあきらめ候、生れかはるといふことがたのしみに候、父さまのところへゆき、それから生れかはりたいと長恩寺様へまゐり、かんのんさまの御くどないたゞき候、凶といで候、とても此世も後の世も御えんうすくて、おもふことゞかぬとおもひ候へば、あかりもつけずにその夜はなきあかし候、どうしたらよろしく候や、御おしへ下されたく、御おしへ次第どうともなろうとこの文むりにかき候、はやく御いでなされなければ、むねがいたくて死ぬかとおもひ候、おやしきむづかしければ、おいでなされ候はかなしく候、御手紙ならばいろはでねがひ候、おいでならばお馬はおよしなされたく候、

止めたる筆のあといと拙きにあはれは増して、重春涙とゞめあへず、居ても安からず立つても安からず、竟に邸をさまよひ出でゝお瀧に逢ひたり。茲に松下の狼籍ありて一夜をお瀧の家に費せしが、爵位にも榮譽にも門閥にもかへ難き戀の成就は重春が乳母の緣をたづねて二人して訪ふ三保の松原、「二人越ゆれば橋立の峻しきも山も安蓆、いざ二人して見ん山も水も」。

重春お瀧の戀はかくて成りぬ。四年の年月三保の松原の侘寓、太郎重正といふ子をまうけたるが、こゝに重春とお瀧の間に思想の相違、感情の相違、すべて學びたる夫と終に學ばざる妻との矛盾衝突を惹き起せり、重春は歎息してお瀧の知らぬ思ひの涙に暮るゝことあり「お瀧もわれを誤りぬ、われもお瀧を過りぬ、されば罪の果は身を責めて、わが一生は埋れ木の花まつ心も灰にしたれど、罪なき太郎の行末には日蔭の溪の樹も生立ちて春風に香ふ時あれと思ふは無理ならじ」と、さる些事よりして自畫の「あぶらはむ」の故事をひきて子に對する處置をお瀧に説けどお瀧は解せず。舐犢の愛と敎育の愛と合ふよしもなき夫妻の思想感情の逕庭。時に祖母貞松院病重きが爲に、異母弟重冬家督を

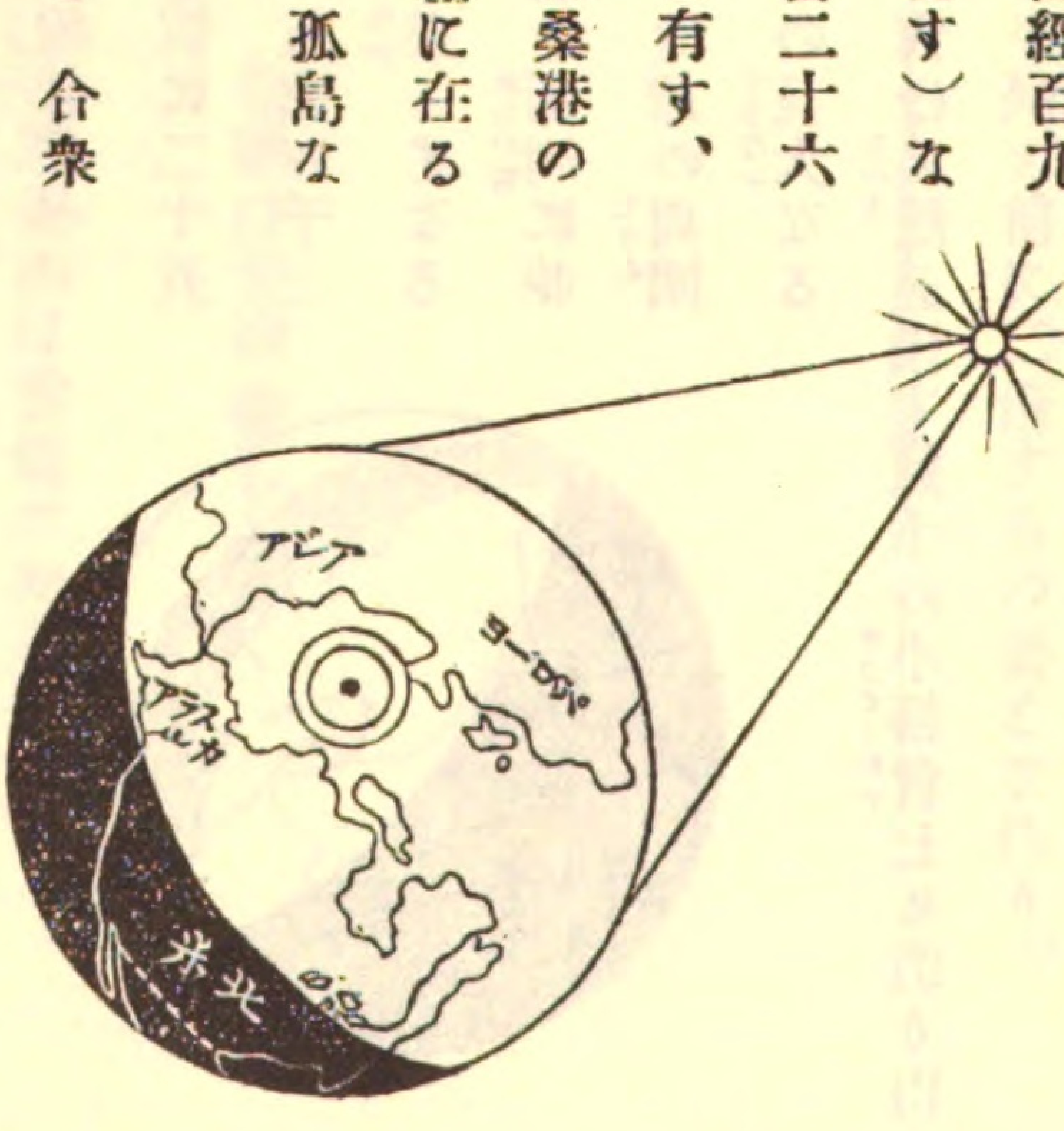
繼ぎたれど死せるが爲に、重春は呼もどされぬ。お瀧は重春の歸るをまちぬ。旬日なほ音沙汰無し、日既に經て久しく、「いゝゝ、あぶらはむ」の畫像は裂かれて窗の外に投げ出されし其日、重春は歸り來りて之を見、憮然として踵を返へせり。かくて重春は爵位ある身となりぬ、太郎は父の傍に生ひ立ちぬ。されどお瀧は伯爵家の門に入るを許されず、遠からぬ處に別宅をかまへられて其處に置かれぬ。

(未完)

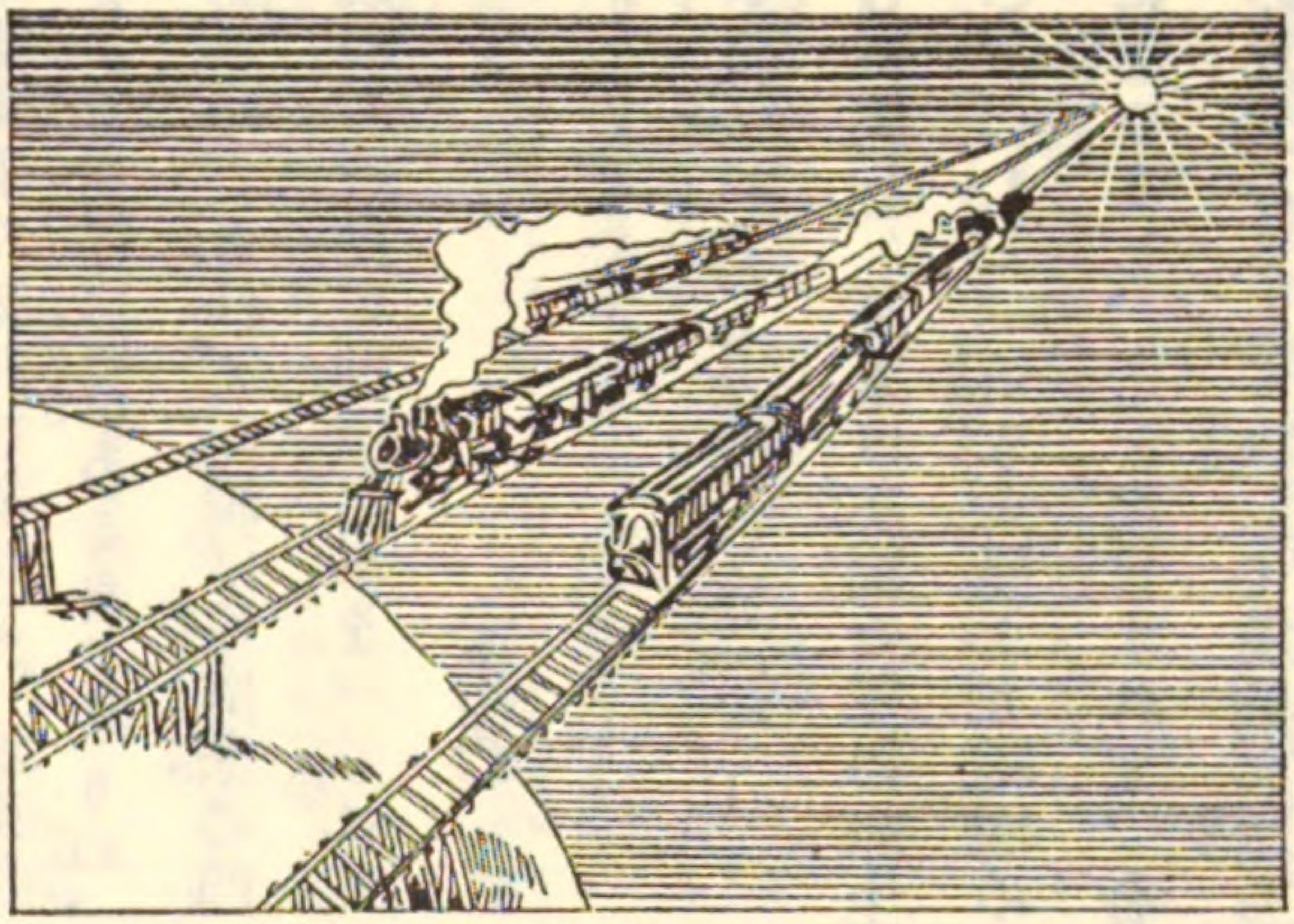
世界第一と誇れる北米合衆國(上)

◎合衆國には太陽沈む事無し　英人は英國女王の版土の上に太陽沒することなしとて、恰も大陽より格別の恩顧を享くるが如くに思ひなし、之を揚言すれど、合衆國も亦た常に日光の恩賚あることを決して英國に讓らず、その極西アラスカのアットー島に於て午後六時のときは、その極東イーストポートに於て翌日の午前九時三十六分を報ずるの時なり、然れば今此の兩者の距離を測るに、イーストポートは西經六十七度にして、アットー島は東經百六十七度(西經百九十三度に相當す)なれば、即ち百二十六經度の長さを有す、アットー島は桑港の西二百八十哩に在る大平洋上の一孤島なり。

◎鐵道の長さ　合衆國鐵軌の延長線は世界に冠たり、今その長さを測量するに十七萬九千二百七十九哩あり、之を以て地球を卷く時は七繞の帶と成るべし、されば歐、亞、非三大洲の鐵道總延長線より



も遙に長く、假に之を合衆國延長線より減じ去るも、尙ほ濠洲鐵道の三分の二を餘すべし、合衆國に次ぎて鐵軌の多きは日耳曼なり、されど僅に二萬七千八百五十一哩の延長を有するに過ぎず、實に合衆國に於ける鐵道は全國財貨の六十分の一を占有し、且つ壯丁の十七分中一は皆な之れに賴て口を糊すといふ、以て其の盛大を想ふべし、一年間に旅客列車の馳驅したるの輪跡を測れば、地球より太陽まで三回走れる割合にて、年々の所得參億萬弗を越すといふ。

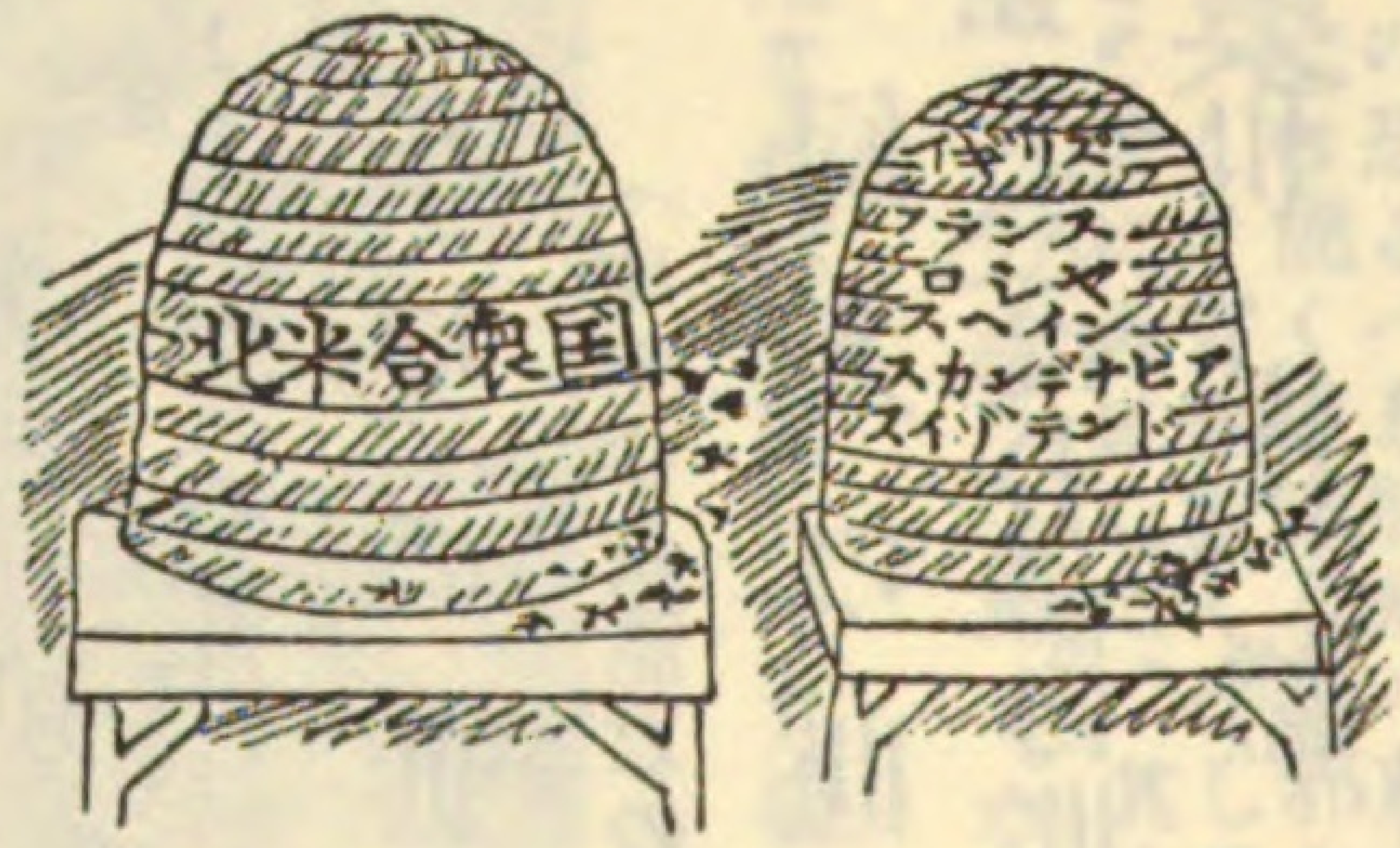


◎國民の住宅　合衆國の戸籍表を見るに、千百四十八萬三千三百十八戸と誌されたり、此數は單に人民の住宅のみにて、倉庫、事務所、殿堂、公舘、學校及大學校の如きは全然除きて計算せざるものなり、若し此の戸數を一直線に列べ、一戸の間口を假に二十五呎とすれば、五萬四千三百三十三哩の長さとなるべし、又た之を兩側に並べ見る時は、地球の周圍を一繞する所の長大なる街路となり、尙ほ其餘を以て數十の小都會をも造り得べし。



◎貯蓄銀行と貯金依賴者　社會學者及經濟學者は皆な鯨波をなして、世の文明に進むに從ひ、富者は益富み、貧者は愈貧し、兩者の懸隔雲壤も啻ならざるに至る

と大聲疾呼すれど、記者は合衆國の統計表を見るに及んで、初めて其の然らざるを知る、合衆國に於ける貧富の兩階級は相共に率ゐて益々其財貨を増殖するの傾きあり、是れ他無し、同國人民の一般畜慾に富むよりして、到る所に貯蓄銀行の設けありて、之に貯金を付托する者（千八百九十四年より同五年まで）四百八十七萬五千五百十九人あり、即ち全人口の十四分の一にて、三個の家族に一人の貯蓄者ある割合、此の總金額十八億一千五十九萬七千二十三弗は英、佛、魯、伊、西、瑞、及スカンヂナビヤ等諸國の貯蓄銀行を悉く合併したるものにも、遥に超越せり、紀元千八百四十年以來合衆國の總人口は唯だ四倍の増



加を見るのみなれど、貯蓄銀行の増加は實に驚くべきものにして頓に六十二倍の數を顯はし、從ってその總金額も百二十七倍の増加を來たし、單に一個人の貯蓄の利子の如きも殆ど前に二倍するの勢となれり。

今號は交詢欄を省く

質問規則は前號の如し

次號豫告

次號より左の三欄を増設す

小兒の世界

（少年少女諸君の爲に）

婦人の世界

（これより世に出でんとする婦人諸君の爲に）

和洋禮式

（現に行はるゝ日本禮式及西洋禮式）

金賞牌　名譽金賞牌　名譽金賞牌　金賞牌



受領　受領　受領　受領

●蜂印香竄葡萄酒



はち印

登録商標



本品は内外各大博覽會に於て夥多の賞牌を受領し就中海外大博覽會より得たる金賞牌は上掲の如し近來葡萄酒の種類多き中に其品質の卓絶なるは喋々を要せずして瞭然たり

本品は最も營養分に富み之を日常の飲料とせば血液能く循環し食物能く消化して精神常に活潑となり殊に其味甘美にして何人の口にも適せり

本品は全國到る處に販賣店あり蜂の商標と近藤利兵衛の名義を篤と御認めの上御最寄にて陸續御購求あらんことを希ふ

東京日本橋區本町二丁目九番地（電話本局四四三番）

賣捌元　洋酒問屋　**近藤利兵衛**

（明治廿五年九月十四日遞信省認可）（明治三十年九月十五日發兌）東京市京橋區西紺屋町二十六七番地　株式會社秀英舍印行